

F13-Ko12-6



1200500762469

F13  
012  
6



始



# 工場細胞

0.3



小林多雄二著

日本アリア作家叢書No. 1

F13  
K012  
6

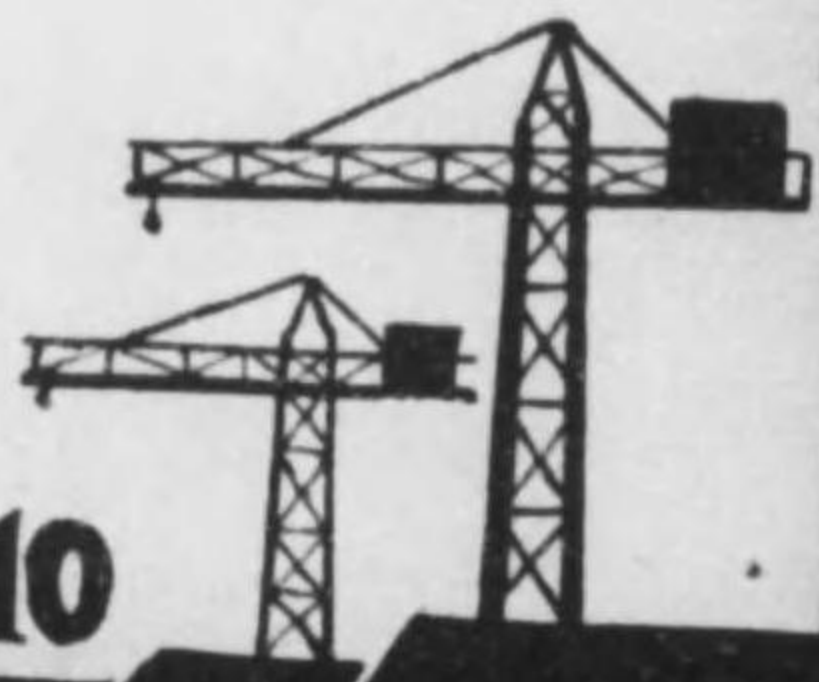
# 工場細胞



小林多喜二著

日本プロレタリア作家叢書

No.10



## 戦旗社版



~~598-30~~

目

次

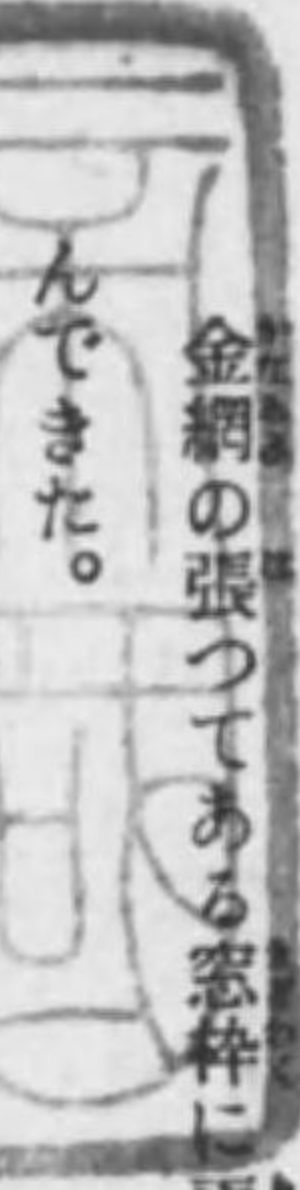


工場細胞

工場細胞……………一

救援ニュースNO18附録……………一五

暴風雨警戒報……………一七



金網の張つてある窓枠に両手がかゝつて——その指先きに入つたと思ふと、男の顔が窓に浮かんで来た。

晝になる少し前だつた。「H・S製罐工場」では、五ラインの鋳力切斷機、胴付機、縁曲機、罐巻締機、漏氣試験機がコンクリートで固めた床を震はしながら、耳をろうする音響をトタン張りの天井に反響させてゐた。鐵骨の梁を渡つてゐるシャフトの滑車の各機械を結びつけてゐる幾條ものベルトが、色々な角度に空間を切りながら、ヒタ、ヒタ、ヒタ、タ、タ、タ……ときまつた調子でたるみながら廻轉してゐた。むせつほい小暗い工場の中をコンヴェイヤーに乗つて、機械から機械へ移つて行く空罐詰が、それだけ鋭く光つた。——女工たちは機械の音に逆らつた大きな聲で唄をうたつてゐた。で、窓は知らずにゐた。

——あらッ!

「田中絹代」が聲をあけた。この工場の癖で、田中絹代と似てゐるその女工を誰も本名を云ふものは

なかつた。彼女は窓際に走つた。コンヴェイヤーの前に立つて、罐のテストをしてゐた男工の眼が、女の後を追つた。——外から窓に男がせり上がつてゐる。その男は細くまるめた紙を、工場の中に入れてやうとしてゐるらしい。

女が走つてくるのを認めると、男の顔が急に元氣づいたやうに見えた。彼女は金網の間から紙を受取ると、耳を窓にあてた。

——監督にとられないやうに、皆に配つてくれ。頼みますよ。

男は窓の下へ音をさして落ちて行つた。が、直ぐ昇を乗り越して行く悍しい後姿が見えた。晝のボーが鳴ると、機械の騒音が順々に吸はれるやうに落ちて行つて——急に女工たちの疝高い聲

がやかましく目立つてきた。

——何アによ、絹ちゃん、ラヴ・レター？

——ラヴ・レターの見本か？ 馬鹿に大ツかいもんでないか。それを見てゐた男工も寄つてきた。

——そんな事すると、傳明さんが泣くとよ。

——さうかい、出目でなけア駄目とは恐ろしく物好きな女だな？

皆が吹き出した。

田中絹代がピラを皆に一枚々々渡してやつた。

——な、何アんでえ、これはまた特別に色氣が無いもんでないか。

——組合のピラよ。

### 失業労働者大会

★市役所へおしかける！

★我等に仕事を與へよ！

★失業者の生活を市で保證せよ！

仕上場の方から天井の低い薄暗いトロツコ道を、レールを踏んで、森本等が手拭ひで首筋から顔をゴシ／＼こすりながら出てきた。ズボンのポケットには無雑作に同じピラが突ツこまされてゐた。

——よオツ！ 鐵削りやつてきたな！

連中を見ると、製罐部の職工が何時もの奴を出した。

——何云つてるんだ。この罐々虫！

負けてゐなかつた。

——鐵ばかり削つてゐるうちに、手前えの身體は輕動みてえに削らねえ用心でもせ！  
製罐部と仕上場の職工は、何時でもはちき合つてゐる。片方は熟練工だし、他方は機械についてさへるればいゝ職工だつた。そこから來てゐた普段はそれでもよかつたが、何かあると、知らないうちに、各々は別々に固まつた。——例へば、仕上場の誰か「歓迎」か「観迎」か分らなかつたとする。すると、仕上場全部が「一大事」でも起つたやうに騒ぎ出す。彼等はこんな事でも充分に夢中になつた。頭を幾つ並らべてみたところで、同じ位の頭では結局どうしても分らず、持てあましてしまふ。然し彼等は道路一つ向ふの「事務所」へ出掛けて行つて、ネクタイをしめた社員にきくことがあつても、製罐部の方へは行かないのだ。

相手の胸にこたえるやうな冗談口をさがして、投げ合ひながら、皆ゾロゾロ階段を食堂へ上つて行つた。上から椅子の足を床にじらす音や、女工たちのキャツ／＼といふ聲が「鹽漬」の焼ける匂ひと一緒に、賑やかに聞えてきた。

この日、Yの「合同労働組合」のピラは「H・S工場」へ三百枚程入つた。職場々々の「職長」さへもピラを持つてゐた。然し、そのピラのことは食事中ちつとも誰も話題にならなかつた。

飯が終つて、森本が遅く階段を降りてくると、段々のところ／＼や、工場の隅々に、さつきのピラが無雑作にまるめられたり、鼻紙になつたり、何枚も捨てられてゐるのを見た。——彼はあり／＼と顔を歪めた。

二

「H・S製罐會社」は運河に臨んでゐた。——Y港の西寄りには鐵道省の埋立地になつて居り、その一帯に運河が鑿られてゐる。運河の水は油や煤煙を浮かべたまゝ激んでゐた。發動機船や蝶のやうな平らべつたい舳が、水門の橋梁の下をくゞつて、運河を出たり入つたりする。

——「H・S工場」はその一角に超弩級艦のやうな灰色の圖體を据ゑてゐた。それは全く軍艦を思はせた。艦は製品倉庫から運河の岩壁で、そのまゝ荷役が出来るやうになつてゐた。

市の人は「H・S工場」を「H・S王國」とか「Yのフォード」と呼んでゐる。——若い職工は歸るときには、ナツバ服を脱いで、金ボタンのついた襟の低い學生服と換へた。中年の職工や職長はワイシャツを着て、それにネクタイをしめた。——Y驛のブラットフォームにある「近郊名所案内」には「H・S工場、——約十八町」と書かれてゐる。



Y市は港街の關係上、海陸連絡の運輸労働者——漢人足、仲仕が壓倒的に多かつた。朝鮮人がその三割をしめてゐる。それで「労働者」と云へば、Yではそれ等を指してゐた。彼等はその殆んどが半自由労働者なので、どれも惨めな生活をしてゐた。「H・S工場」の職工はそれで自分等が「労働者」であると云はれるのを嫌つた。——「H・S工場」に勤めてゐると云へば、それはそれだけで、近所への一つの「誇り」にさへなつてゐたのだ。

森本は仕事臺に寄つても仕事に實が入らなかつた。——彼は今日組合のピラが撒かれることは知つてゐたし、又そのピラが撒かれたときの「H・S工場」内の動きについて、ある會合で報告しなければならぬことになつてゐた。だが、見ろ、こんな様をオメ〜と一體誰に報告が出来るものか。職工の一人も問題にしないばかりか、巡查上りの守衛から、工場長さへ取り合ひもしない。ピラの代りに、工場の中に虹か蜂の一匹でも迷ひこんだ方が、それより大きな騒ぎになるかも知れないのだ。「虹」と「ピラ」か！ それさへ比較にならないのだ。……そこまでくると、彼はもう張り合ひが感ぜられなくなつた。

職場の片隅に取付けてある十馬力の發動機は絶え間なく陰鬱な唸りをたてながら、眼に見えない程

足場をゆすつてゐた。停電に備へるガソリン・エンジンがすぐ側に据ゑつけられてゐる。——そこは工場 of 心臓だつた。そこから幹線動脈のやうに、調節が職場の天井を渡つてゐる主動軸の滑車にかゝつてゐた。そして、それがそこを基點として更にそれ／＼の機械に各々ちがつた幅のベルトでつながつてゐた。そのまゝが人間の動脈網を思はせる。穿孔機、旋盤、穿孔機……が鋭い音響をたてながら鐵を削り、孔をうがち、火花を閃めかせた。

働いてゐる職工たちは、まるで縛りつけられてゐる機械から一生懸命にもがいてゐるやうに見える。腰がふん張つて、厚い肩が据ゑられると、タガネの尻を押してゐる腕先きに全身の力が微妙にこもる。生きた骨にそのまゝ鐵を當てられるやうな、不快さが直接に腕に傳はる。又先から水沫のやうに、よれた鐵屑が散つた。鍛冶場から、鉄付の音が一しきり一しきり、機關銃のやうに起つた。

こゝは製罐部のやうな小刻な、一定の調子をもつた音響でなしに、圓太い、グワン／＼した音響が細い鋭い音響と入り交り汽槌のドズツ、ドズツ！ といふ地響と鐵敷の上の拵高く張り上がった音が縫つて……こつちやになり、一つになり、工場全體が轟々と唸りかへつてゐた。鍛冶場の火焰が送風器で勢ひよく燃え上ると、仕上場にある職工の片頬だけが、瞬間メラ／＼と赤く燃えた。

天井を縦断してゐる二條のレールをワイヤー・プレーをギリ／＼と吊したグリーンが、皆の働いて

るる頭のすぐ上を物凄い音をたて、渡つて行つた。それは鑄物場で型上げたばかりの、機関車の車輪の三倍もある大きな奴で、ワイヤー受けの溝をほるために、横穿孔機に据ゑつけるためだった。

——頼むどオ！ 南部センベイは安いんだ。

——身を除けながら、上へ怒鳴つてゐる。

——まづ緊縮！ 文句云ふな。手前一人片付けば、サバくするア！

——ハンドルを握つてゐた職工が上で唾をひっかけ真似をした。

——畜生々々！

下のは大ゲサに横へ跳ねた。

——上から見れア、どいつもこいつも薄汚くゴミくしてやがる。

——少し高いところさ上つたと思つて、可哀相に畜生、すぐブル根生を出しやがる。

——ヘン、だ。手前らを顎で一度は使つても見たくならア。

横ボール盤の側に、四五人の職工とパンパン帽をかぶつた職長が集つて、ワイヤー・ブレイを踏に吊したグレインがガラ／＼と寄つてくるのを見てゐた。

——オーライ！

渡り職工の職長が手を挙げた。手先きを見てゐたハンドルの職工がグイと手元にひいた。グレインがとまると、ワイヤー・ブレイは餘勢でゆるく揺れた。その度にチエンが、ギーイ、ギーイときしんだ。周はりを取巻いてゐた職工たちが、その揺れの拍子を捕へて、丁度足場の上へ押し行つた。

——レツコ、レツコ！

職長は手先きをお出で／＼をするやうに動かした。チエンがギクシヤクシヤしながら、延びてきた。

エンヤ、コラサ、エンヤ、コラサ……皆は掛聲をかけ始めた。ワイヤー・ブレイは底を二つの滑車にのせ、穿孔機の腕にその軸と翼を締めつけて、固定された。グレインが暗い音をたて、チエンを捲き上げた。白墨を耳に挟んだ彼等は、据ゑつけた機械のまはりを歩いたり、指先きでこすつてみたり、ヤレ、ヤレといふ顔をした。

——森本のところからは、それが蟻が手におへない大きなものを寄つて、たかつて引きづつてゐるやうに見えた。素晴しく大きな鉄の機械の前には、人間は汚れた鉄クソのやうに小さかつた。彼は製罐部の護膜塗機の壊れた部分品を、萬力臺にはさんで、鏡をかけてゐた。——足場の乗りが一分ちがつたとする。その時チエンがほぐれて……と、あの大きなワイヤー・ブレイはたつた一つの音もたてずに、グイ／＼と手前にのめつてくれる。四人の職工のあばら骨が障子の骨より他愛なくひつつぶ

されてしまふ。たつた一分のちがひだとしても。二圓にもならない、そこそこの日給を稼ぐために、職工は安々と命をかけてゐる。——だのに、この職工たちは「ピラ」を鼻紙にしてしまつた！  
彼はマシン油で汚れた手を、ナツバの尻にゴシ／＼こすつた。「ま、それでもいゝだらう……！」  
——そして彼はフン、と鼻をならした。

三

終業のボーが鳴ると、皆は仕事場から一散に洗面所へ馳け出した。狭いコンクリートの壁が、女湯のやうな噴まじさをグワン／＼響きかへした。顔の所々しか寫らない割けた鏡の前で、膚ぬぎになつた職工たちが、石鹼の泡とお湯をはね飛ばした。悍しい肩と上膊の筋肉がその度にグリ、グリツとムクレ上つた。

——馬鹿野郎め、石鹼が泣きやがる。オイ鏡でゴシ／＼やつてくれ。

——田中絹代さんにふられたいつてね。

——オヤ／＼だ、この野郎。

割り込んで来る奴を、両方のが尻と尻をくつつけて邪魔をした。

——何んだ、大きくもない尻を！ 尻を割ると、此奴！  
——へえ、濟みませんね、エミちゃんのお尻でなくて。  
——抱くにも、抱かれぬツてとこだな。ハハ、ハハ、ハハ。  
その後で、皆は手拭を首にまきつけて、つつ立つたり、白い角の浮石鹼を手玉にしたり。待つてゐた。

——こん畜生、だまつてるとえゝ氣になりやがつて、棒枕ぢやないんだど。

と、云はれた奴が石鹼で顔中をモグ／＼させながら、

——へえ、何時人間様になつたかな。俺はまた職工さんだとばかり思つてゐるが！

見當ちがひの方を見て、云ひかへした。

申譯程の仕切りがあつて、女工たちの洗面所がすぐ續いてゐた。洗面所にしやがむと、女工たちの腰から下が見えた。職工たちは腰から下だけの「恰好」で、誰が誰かを見分けるのに慣れてゐた。顔を何時までも洗つてゐる振りをして、職工たちはそれを見てゐた。

——あの三番目が「モンナミ」の彩ぢやんだど。

工場では、Y市の有名なカフェーやバーのめづらしい名前をとつてきて、「シヤン」な女工を呼ん

である。

— どうだい、あの腰の工合は！

— あいつ、この頃めつきり大人になつてきたぞ。フン！

— 腰がものを云ふからな。

— こつちは誰だ？

— おツと、動いたぞ。足を交へた。……いゝなア、畜生！

— オイツ！

後に立つてゐるのが、それを見付けて、いきなり二つ並んでゐる頭を両方からゴツンとやつた。

— 出齒龜！

女の方で何か云ひながら、一度にワツ、と笑ひ出した。すると、こつちでもわざと聲をあけた。

洗面所を出ると、出口で両方から一緒になつた。歸るとき、女たちはまるつきり別な人になつて出てきた。

— お前は誰だつけな？

煙筒や汽罐の打飯をやつてゐる六十に近い眼の悪い耳の遠い職工には本當に見分けがつかない。

— プツ！ お爺さん、色氣なくなつたね。

そして女に背をたゝかれた。

— お婆さんを間違はないでね。

— こん畜生！

會社は、女工が歸りに「お嬢さん」になることにも、カフェーの「女給」になることにも、職工が「學生」になることにも、「會社員」になることにも、黙つてゐた。それだけの事が出来るから、さうするので、そこには少しの差支もある筈がない。Y市を見渡してみても、職工にそれだけのことの出

来る待遇を與へてゐる工場はあるまい、工場長はさう云つてゐた。

洗面所を出ると、狭い廊下を肩で押し合ひながら、二階の「脱衣室」に上つて行つた。両側が廢品

倉庫になつて居り、箱が何十階のビルヂングのやうに、うづ高く積みかさつてゐた。そこは暗かつた。

— 女がキヤツ！ と叫んだ。そこへ來ると、誰か女によく悪戯した。

— この、いけすかない男！

— オイ、今日は……？

— 今日？ 約束があるの。

——本當か。何んの約束だ。誰と？

——これでも、ちアんとね。

——こん畜生！

其處では、何時でも手早い「やりとり」が交はされることになつてゐた。

職工はよく仕事をしながら、次の持場にゐる女と夜會ふ約束をするために、コンヴェイヤーに乗つてくる罐詰に、

「ハシ、六」

と書いてやる。男は手先だけ動かしながら、その罐が機械の向ふかけにゐる女の前を通つて行くのを見てゐる。女はチラツと見つけると、それを消して、そして男に微笑んでみせる。——「六時、

何時もの橋のところ」といふのが、その意味だつた。さういふのが幾組もある。

森本は顔をしめた。かういふ中から一體自分たちの仕事の仲間になつてくれるやうなものが、

何人出るのだ。それを思ふと、胸の下が妙に不安になり、落付けなくなつた。

脱衣室の入口に掲示が出てゐた。森本は始め「ホオツ！」と思つた。皆が服の袖に手を通しながら

その前に立つてゐた。

告

皆サンモ知ツテキル通り、本日何者カ、當工場ニ「失業者大會」ノビラヲ撒イテ行キマシタ。云フマデモナク最近ノ不況ハドシ／＼失業者ヲ街頭ニ投ゲ出シテ居リ、ソレハ全ク見ルニ忍ビナイモノサヘアルノデス。然シ我工場ハ幸ヒニシテ、皆サンノ勤勉努力ニヨツテ、ソノ些々タル影響モ受ケテキナイノデアリマス。一度工場外ニ足ヲフミ出シテ見レバ分ル通り、當工場ハマサニ「ソノフトド」タル名ニ恥シクナイ充分ノ待遇ヲ、ソノ時間ノ點カラ云ツテモ、ソノ賃銀ノ上カラ云ツテモ、皆サンニ與ヘテ居ルノデアリマスカラ、コノ際決シテ、カ、ル宣傳ニ附和雷同セザル様、吳々モ申述ベテ置ク次第デアリマス。

右

工場長

森本はそれを讀むのに何故かあせりを感じて、字を飛ばした。

——チエツ！ 行きと書いてやがる！

彼はその言葉が、自分ながら不覺にもかぶとを脱いだ心のゆるみを出してゐるのにハツとした。彼は油ツほい形のくづれた烏打ちを無難作にかぶつた。

工場の前の狭い通りを、その幅を一杯にみたして、職工や女工が同じ方向へ流れてゐた。彼はその中に入りながら、獨りであることのうそ寒さを感じてゐた。

運河の鐵橋を渡ると、税關や波止場、水上署、汽船會社、倉庫積きの濱通りだつた。——濱人夫がタオ／＼としはむ「歩板」を渡つて、舁から荷降しをしてゐた。然し所々に何人もの人夫が固まつて立つてゐた。それ等の労働者は瀬戸を重ねた大きな辨當を、地べたにそのまゝ置いたり、ぶら下げたり、他の人達の働いてゐるのを見てゐた。——「あぶれた」人夫達だつた。

夏枯時で、港には仕事らしい仕事は一つもないのだ。市役所へおしかけやうとして連中がそれだつた。岩壁につながつてゐる舁はどの舁も死んだ蝶を思はせた。棧橋に近い道端に、林檎や夏蜜柑を積み重ねた賣子が、人の足元をポカンと坐つてゐた。

その「あぶれた」人足たちは「H・S工場」の職工達が鐵橋を渡つてくるのを見てゐた。あり／＼と羨望の色が彼等の顔をゆがめてゐた。「H・S」の職工たちは「俺らはお前たちの仲間とは異ふんだぞ」といふ態度をおツびらに出して、サツサと彼等の前を通り過ぎてしまつた。この事は然し脱衣室の前の貼紙がなくても、さうだつただのだ。

濱人足——この運輸労働者たちは「親方制度」とか「現場制度」とか、色々な小分立や封建的な苛

酷な搾取をうけ、頭をはねられ、追ひつめられた生活をしてゐるので、何かのキツカケでよくストライキを起した。Y市の「合同労働組合」はこれ等の労働者をその主體にしてゐた。しかし「H・S工場」の職工は一人も入つてゐないと云つてよかつた。

森本はその濱の労働者のうちに知つた顔を幾つか見付けた。組合で顔を合せたことのある人達だつた。然し彼は今、この職工たちの中にあるには、その人達に言葉をかける「圖々しさ」を失つてゐた。

四

父は歸つてゐなかつた。——六十を越してゐる父は、彼より朝一時間早く出て行つて、二時間遅く歸つてくる。陸仲仕の「山三現場」に出てゐた。耳が遠くなり、もう眼に「ガス」がかゝつてゐた。電話の用もきかず、きまつた仕事の半分も出来ないで、親方から毎日露骨にイヤな顔をされてゐた。然し二十年以上も勤続してゐる手前、親方も一寸どう手をつけていゝか困りきつてゐるらしいかつた。

——つらいなア……！

フツとそれが出る。朝やつぱり出遊るのだ。

——仕事より親方の顔ば見てれば、とツても……なア!

まだ暗い出掛けに上り端で、仕事着の父親がゴリゴリツと音をさして腰をのばす。それを聞く度に彼は居たまらない苦痛を感じた。——然し彼は、何時かこの父親をもつと、もつと惨めにしてしまはなければならぬ事を、フト考へた。

家の中は一日中の暑気で蒸ツ氣と小便臭い匂ひがこもり、ムレた疊の皮がブワ／＼ふくれ上つてゐた、汗ばんだ足裏に、それがベタ／＼とねばつた。

積又一つになつて机の前に坐ると、手紙が來てゐた。「中野英一」といふのが差出人だつた。それは

工場の女工だつた。その女を森本はやうやく見付けたのだつた。そのたつた「一つ」をまづ足場に、女工のなかにながりを作つて行かなければならなかつた。彼は組合の河田からその方針について、指令をうけてゐた。手紙は簡単に「トニカク、クワシイ事ヲオ話シマセウ。明日八時、石切山ノ下デマツテキマス。」——書くなど云つた通り、自分の名前も、宛てた森本の名も書いてなかつた。

夏の遅い日暮がくると、團扇位のなま涼しい風が——分らないうちに吹いてきてゐた。白い、さらしの襦袢一枚だけで、小路に出てゐた長屋の人達が、やうやく低いパン窯のやうな家の中に入つてきた。棒切れをもつた子供の一隊が、着物の前をはだけて、泥溝板をガタ／＼させ、走り廻つてゐた。

何時迄も夕映を残して、澄んでゐる空に、その喚聲がひびきかへつた。

——腹減らしの餓鬼どもだ!

父が歸つてきた。父は入口でノドをゴロ、ゴロならした。

——どうだつた、父ちやの方は?

——ン?

彼は父が何時でも「労働者大会」とか「労働組合」とか、そんなものに反對なのを知つてゐる。父はそれだから二十何年も勤めて來られたのかもしれない。そして今一本程の危さで、首をつないでゐるにしても、自分は「日雇」でない、だから、そんなワケの分らないことに引きずり込まれたら、こゝだと思つてゐるらしかつた。

——事務所の前で氣勢ば上げてゐたケ。あぶれた奴等ば集めてナ。

——組合のものだべ、あれア!

父は新聞の話でもするやうな無關心さで云つた。

——他人事でないど、父ちや。今に首になればな。

父は返事をしないで、薄暗い土間にゴゾ、ゴゾ音をさせた。少しでも暗いと、「ガス」のかゝつた眼

は、まるツきり父をまどつかせた。父は裏へまはつて行つた。便所のすぐ横に、父は無器用な櫛をしらへて、それに花鉢を三つ程ならべてゐた。その邊は便所の匂ひで、ブンブンしてゐた。父は家を出ると、キツト夜店から値切つた安い鉢を買つてくる。

——この道楽爺！ 飯もロクく食えねえ時に！

母はその度に怒鳴つた。その外のことでは、ひどい喧嘩になることがあつても、鉢のことだと父は不思議に、何時でもたゞニヤクしてゐた。——父はおかしい程それを大事にした。歸つてくると、家へ上る前に必ず自分で水をやることにしてゐた。仕方なく誰かに頼んで、頼んだものが忘れることでもあると、父は本氣に怒つた。——可哀相に、奴隷根性のハケロさ、と森本は笑つてゐた。

——今日の暑氣で、どれもグンナリだ。  
裏で獨言を云つてゐるのが聞えた。

「H・S工場」にも、少し年輩の職工は小鳥を飼つてみたり、花鉢を色々集めてみたり、規帳面にその世話をしてみたり、公休日毎に、家の細々した造作を作りかへてみたりする人が澤山ゐた。職工の一人は工場へ鉢を持つてきて、自分の仕事臺の側にそれを置いた。

——花のやうな美人ツて云ふべ。んだら、これ美人のやうな花だべ。美人の花ば見て暮すウさ。

工場に置かれた花は、マシン油の匂ひと鐵屑とほこりと轟々たる音響で身もだえした。そして其處では一週間ももたないことが發見された。

——へえ！

皆は眼をまるくした。

——で、人間様はどういふ事になるんだ？

居合せた森本がフト冗談口をすべらした。——すべらしてしまつてから、自分の云つた大きな意味に氣付いた。

胸付機の武林が小馬鹿にして笑つた。

——夜店で別な奴と取りかへてくるさ。労働者はネ、選りどり自由ときてらア、ハ、ハ、ハ、ハ。

新聞社の印刷工などに知り合ひを持つてゐるアナキストの職工だつた。——

父が裏口から何か云つてゐる。聲が聞えず、動く口だけが汚れた硝子から見えた。

——お前、十五錢ばかり持つてないかな。

具合悪さうに、さう云つてゐるのだ。

彼は又かと思つた。「うん」と云ふと、父は子供のやうな喜びをそのまゝ顔に出した。



——え、鉢があつてナ、市さ出るたびに眼ばつけてたんだともナ……！

五

暗くなるのを待った。その「會合」は秘密にされなければならなかつた。

——活動へ行つてくるよ。

家へはさう云つた。貰のほとほりで家の中にもたまらない長屋の人達は、夕飯が済むと、家を開けツ放しにしたまゝ、表へ臺を持ち出して涼んだ。小路は泥溝の匂ひで、ブン／＼してゐる。それでも家の中よりはさつぱりしてゐた。大抵裸だつた。近所の人たちと聲高に話し合つてゐた。若い男と女は離れた暗がりに蹲んでゐた。團扇だけが白く、ヒラ／＼動くのが見えた。森本はそのなかを、挨拶をしながらか表通りへ抜けた。この町は「工場」へ出てゐる人達「港」へ出てゐる人達「日雇」の人達と、それ／＼何處かに別々な氣持をもつて住んでゐる。

この一帯はY市の端づれになつてゐた。端づれは端づれでも、Y市であることには違ひなかつた。然しこのT町の人達は、用事で市の中央に出掛けて行くのに、「Yへ行つてくる」と云つた。何か離れた田舎からでも出掛けて行くやうに。乗合自動車も、圓タクも、人力車もT町迄だと、市内と同じ「割

増し」をとつた。——こゝは暗くて、チメチメしてゐて、臭くて、煤けてゐた。労働者の街だつた。つぶれた羊羹のやうな長屋が、足場の据らないチユク／＼した濕地に、床を埋めてゐる。

森本は暗いところを選んで歩いた。角を曲がる時だけ立ち止つた。場所はワザと賑かな、明るい通りに面した家にされてゐた。裏がその入口だつた。彼は決められてゐたやうに、二度その家の前を往復して見て、裏口へまはつた。戸を開けると、鼻ツ先きに勾配の急な階段がせまつた。彼は爪先きで探ぐつて——階段の刻みを一つ一つ登つた。粗末な階段はハネつるべのやうなキシミを足元でたてた。彼は少し猫背の厚い肩を窮屈にゆがめた。頭がつつかへた。

——誰？

上から光の幅と一緒に、河田の聲が落ちてきた。

——森。

——あ、ご苦労。

室一杯煙草の煙がこめて、喫みつくしたパットの口と吸殻が小皿から亂雑に疊の上に、こぼれてゐた。何か別な討論がされた後らしい。立つてきた河田は、森本の入つた後を自分で閉めた。彼は大きな臼のやうな頭をガリ、ガリに刈つてゐた。それにのそりと身體が大きいので、「惡黨坊主」を思はせ

た。何時でも、ものゝ云ひ方がブツキラ棒なので、人には傲慢だと思はれてゐたかも知れなかつた。然しそれだから岩のやうなすわりがあるんだ、と組合のものが云つてゐた。

仰向けになつて、バットの銀紙で蓋付コップを拵らへてゐた石川が、被を見ると頭をあげた。

—よオツ！

石川はもと「R 鑛物工場」にゐたことがあるので、前からよく知つてゐた。彼が河田を知つたのも石川の紹介からだつた。石川が組合に入るやうになつてから、森本はさういふ方面の教育を色々彼から受けた。それまでの彼は、普通の職工と同じやうに、安淫賣をひやかしたり、活動のぞいたり、買喰ひをしたり喧嘩をして歩いてゐた。それから青年團の演説もキツバリやめてしまつた。

もう一人の鈴木とは前に一寸しか會つてゐなかつた。神経質らしい、一番鋭い顔をしてゐた。何時でも不氣嫌らしく口数が少なかつたので、森本にはまだ親しみがでてゐなかつた。彼は膝を抱えて、身體をゆすつてゐたが、唇を出すために窓を開けた。急に、波のやうな音が入つてきた。下のアスファルトをゾロ／＼と、しつきりなしに人達が歩いてゐる。その足音だつた。多燈式照明燈が兩側から腕をのばして、その下に夜店が並んでゐた。——植木屋、古木屋、萬年筆屋、果物屋、支那人、大學帽……。人達は方向のちがつた二本の幅広い調帯のやうに、兩側を流れてゐた。何時迄見てゐてもそ

れに切れ目が來ない。

—暇な人間も多いんだな。

—鈴木君、顔を出すと危いど。

河田が膽寫版刷りの番號を揃えてゐたが、顔をあげた。

—顔を出すと危いか。ハ、ハ、ハ、汽車に乗つたやうだな。

—ちア、やつちまうか……。

灰皿を取り圍んで四人が坐つた。

—森本君とはまだ一度しか會つてゐないから、或ひは僕等の態度がよく分つてゐないかと思ふんだ。

河田は眉をひそめながらバットをせわしく吸つた。

—手ツ取り早く云ふと、かうだと思ふんだが……。これまでの日本の左翼の運動は可なり活潑だつたと云へる。殊に日本は資本主義の發展がどの分野でも遅れてゐた。それが戦争だとか、其他色々な關係から急激に——外國が十年もかゝつたところを、五年位に距離を縮めて發展してきた。プロレタリアも矢張り急激に溢れるやうに製造されたわけだ。そこへもつてきて、戦争後の不景氣だ。で

日本の運動がそこから跳ねツカへりに、持ち上つてきたワケだ。然し問題なのは、その「活潑」ツてことだ。何故活潑だつたか、これだ。——僕らにはあの「X・X・X・X」があつてから、そのことが始めてハツキリ分つたんだ……手ツ取り早く云へば、工場に根を持つてゐなかつたといふ事からそれが来てゐた。それも「大工場」「重工業の工場」には全然手がついてゐなかつたと云つてもいいんだ。Yをみたつてさうだ。労働組合の實勢力をなしてゐるのが。港の運輸労働者だ。それはそれ／＼細かく分立してゐる。それに實質上は何んてたつて半自由労働者で、職場から離れてゐる。だから成る程事毎に動員はきくし、それはそして一寸見は如何にもバツとして華やかだ。——日本の運動が活潑だつたといふのは、こゝんとこから來てゐると思ふんだ。然し何より組織の點から云つたら、零だつた。チリ／＼バラ／＼のそこから起つたんだから、終つたあとに直ぐチリ／＼バラ／＼だ。統計をみたつて分るが、その間大工場は眠つてる牛のやうに動かなかつたんだ。——工場が動きづらい理由はそれである。ギユツ／＼させられてゐる小工場は別として、何千、何萬の労働者を使つてゐる高度に発達した大工場となると、とても容易でないのだ。——容易でないが「大工場の組織」を除いて、僕らの運動は絶対にあり得ないのだ。早い話が、この近所に小さい争議を千回起すより、夕張と美唄二つだけの炭山に「ストライキ」を起してみる。日本の重要産業が「ストライキ」をさうしまう。これは決して

大それた事ではなくて、ストライキは必ずかういふ方向に進んで行かなければならない事を示してゐると思ふんだ。——今迄の練りかへしのやうなストライキはやめることだ。だから……どうも、何んだかすつかり先生らしくなつたな……。

河田が「白」を一撫でした。

——ま、詳しいことは又色んな時にゆつくりやれるとして。とにかく今になつて云ふのも變だが、

「X・X・X・X」で、何故僕らがあの位もの要らない犠牲を拂つたか、といふことだ。それは、さつき云つたあの華々しい運動をやつてゐた先輩たちが、X・X・X・X運動なのに、今迄の癖がとれず、時々金魚のやうに水面へ身体をブク／＼浮かべしてゐるところから來てるんだ。工場に根をもつた、沈んだ仕事をしてゐなかつたからだ。——實際、僕たちの仕事、工場の中へ、中へと沈んで行つて、見えなくなつてしまはなければならなかつたのに。それを演壇の上にかかけのほつて、諸君は！とがなつてみたり、ピラを持つて街を走り廻はることだと、勘ちがひをしてしまつたのだ。——日本の運動もこゝまで分つてきた……。

——ところが、本當は仲々分らないんだよ。恐ろしいもんだ。

石川が河田の言葉をとつた。銀紙のコップをバットの空箱に立てながら、何時ものハツキリしない

笑顔（えがほ）を人（ひと）なつツこく森本（もりもと）に向けた。

——ボロ船（ぶろぶね）の舵（かじ）のやうなもので、ハンドルを廻（まわ）はしてから一時間（じくわん）もして、やうやくきいてくるツてとこだ。今迄（いままで）の誤（あやま）つてた運動（うんどう）の實踐上（じつせんじょう）の情勢（じやうせい）もあるし、これは何（なに）んてたつて強い。それに工場（こうじやう）の方は仕事（しごと）はチミだし、又實際（じつじやう）チミであればあるほどいゝのだから……仲々（なな）ね。——

——それは本當（ほんたう）だ。でねえ、僕（ぼく）らが何故（なぜ）口（くち）をひらけば「工場（こうじやう）の沈（しん）んだ組織（そくしき）」と七くどく云（い）ふかと云（い）へば。假（か）りにYのやうな浮（う）かんだ労働（ろうどう）組合（くみあ）を千回（せんかい）作（つく）つたとしても「X・X・X」が同様（どうじやう）に千回（せんかい）あれば、千回（せんかい）ともベチャンコなのだ。それぢやX・Xにも、X・Xにも同じ（おな）じく一（ひと）たまりもないワケだ。話（わ）が大（おほ）きい。ところが、かうなのだ。最近（さいきん）X・X・X・X・Xがせまつてゐると見（み）えて、官營（くわんえい）のX・X工場（こうじやう）では、この不（ふ）況（きやう）にも不拘（ふくわう）、こつそり人をふやしてゐらしい。M市（し）のS工場（こうじやう）などは三千（さんぜん）のところが、五千人（ごせん）になつてゐるさうだ。その場合（ばあひ）だ。僕（ぼく）らが、その工場（こうじやう）の中に組織（そくしき）を作（つく）つて行（い）つたとする。それは勿論（もちろん）、表面（へうめん）など「無（む）證（てい）にも「花（はな）々（ざ）しくも出（で）すところか、絶對（ぜつたい）に秘（ひ）密（みつ）にやつて行（い）くわけだ。そこへ（愈々（いよいよ）四十四（しじゅうし）字（じ）削除（さくじゆ））製造（せいぞう）がピツタリととまる。それが例（れい）へば大阪（おさか）のやうなところであり、そして一（ひと）つの工場（こうじやう）だけでなかつたとしたら、X・Xもやんでしまふではないか。こゝを云（い）ふのだ。——然（しか）しこんなことをY労働（ろうどう）組合（くみあ）の誰（たれ）かに云（い）つたら、夢（ゆめ）か、夢（ゆめ）を見（み）てるのかと云（い）はれさうだ。がこれだけは絶對（ぜつたい）に今（いま）からやつて行（い）

かないと、乞食（こじき）の頭數（あたまかず）を集（あつ）めるやうに、その場（ば）になつて、とてもオイそれと出（で）來（き）ることではないんだ。

——僕（ぼく）らはそれをやつて行（い）かうと思（おも）つてゐるんだ。そのために……。

——俺（おれ）も失敗（しぱい）つたよ。

石川（いしかわ）が云（い）つた。

——職場（しやば）は離（はな）れるんでなかつた。な、河田（かた）君（くん）！

——然（しか）しあの頃（ころ）と云（い）つたら、組合（くみあ）へ必（かなら）ず出（で）てきて、謄寫版（ちやうしあばん）を刷（す）つて、ピラをまくことしか「運動（うんどう）」と云（い）はなかつたもんだ。

——さうだんだ。正直（しやうじき）に云（い）つて、工場（こうじやう）にちつとしてゐることが、良（よ）心的（しんてき）にたまらなかつたんだ、あの頃（ころ）は。

森本（もりもと）は始（はじ）めて口（くち）を入（い）れた。

——然（しか）し工場（こうじやう）は動（どう）きづらいつらと思（おも）ふんです。大工場（だいこうじやう）になると「監獄（かんごく）部（ぶ）屋（や）」のやうなことはしないんですから……。

彼は（かれ）今日（けふ）の工場（こうじやう）の様子（ようす）を詳（くわ）しく話（わ）した。河田（かた）たちは一（ひと）つ、一（ひと）つ注意（ちゆうい）深くきいてゐた。

—それはさうだ。  
と河田が云つた。  
—だから今迄何時も工場が後廻はしになつてきたのだ。

六

森本は河田に云はれて、「H・S工場」の地圖を書いた。河田はその他に、市内の色々な工場の地圖を持つてゐた。それからY市の全圖を擴げて、「H・S」のところに赤い印をつけた。

—水上署とは餘程離れてるだらうか。

—四……四町位でせう。

—四町ね？

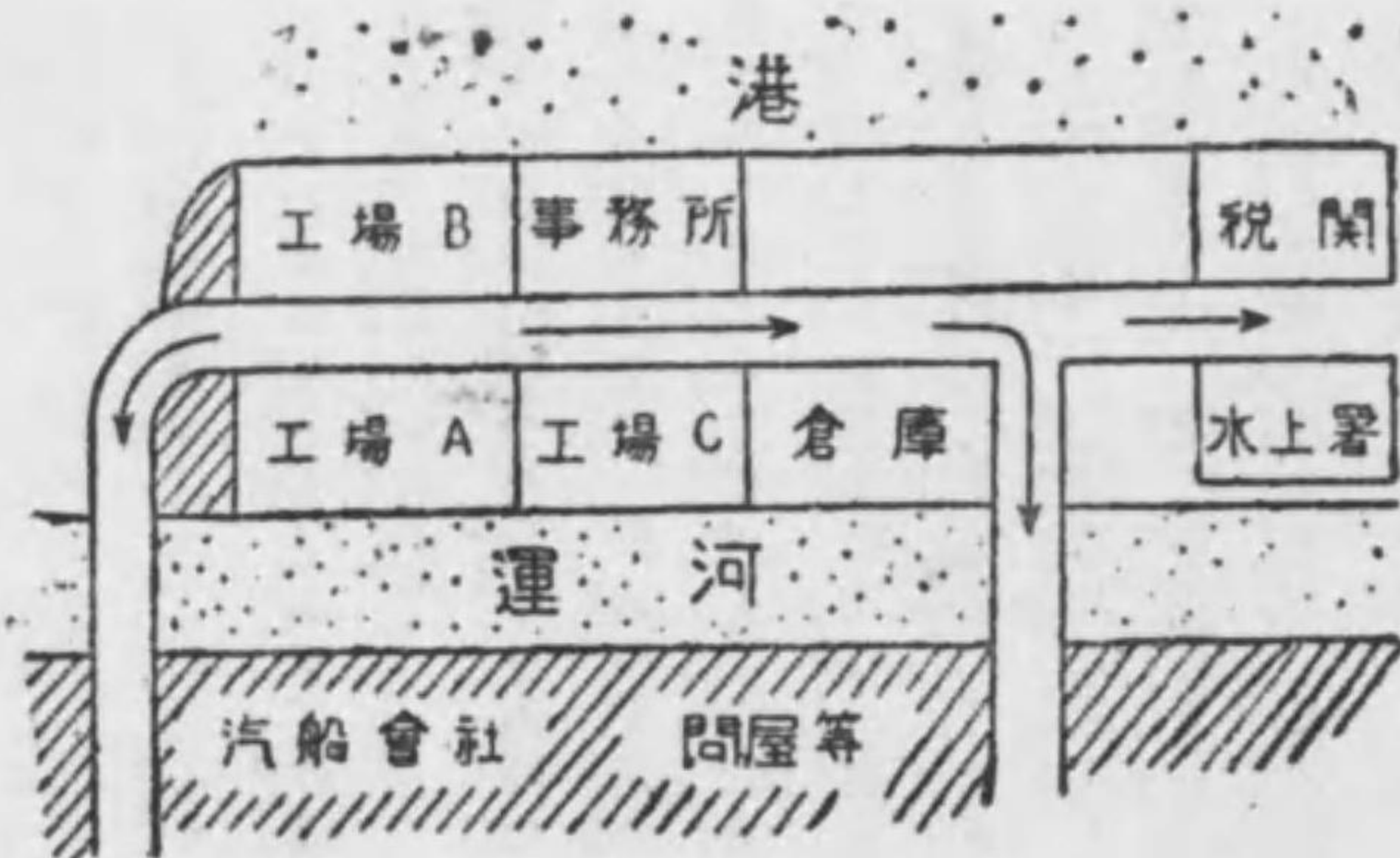
—悪いところに立つてるな。

石川が顔をあげた。

—この市の水上はドウ猛だからな。

森本は工場について一通り説明した。

—工場Aが製罐部で、罐胴をつくるボディ・ラインと罐蓋



をつくるトップ・ラインに分れてゐる。ボディの方は、ブリキを切断して、圓く胴をつくり、蓋をくつつけて締めつけ、それが空気が漏れないか、どうかを調らべる。切断機、胴付機、罐縁曲機、罐巻縮機、空氣検査機などがその機械で、トップの方は鉦力壓搾機、波形切断機、と蓋の溝にゴムを巻きつける護謄塗機がある。—工場Bは、階下はラッカー工場で、罐に漆を塗るところで、作業は秘密にされてゐた。階上は罐つめる箱をつくるネーリング工場で、側板、妻板、仲仕切りを作つてゐる。—出来上つた罐とこの空箱が倉庫の二階のパッキング・ルームに落ち合つて、荷作りされるわけである。工場Cは森本たちのゐる仕上場になつてゐた。

—その外の附屬は？

河田がきいた。

—實驗室。これはラバー（ゴム引き）の試験と漆塗料の

研究をやつてゐます。こゝにゐる人は私らにひどく理解を持つてゝくれるんです。どツかの大學を首になつたツテ話です。

——自由主義者ツテところだらう。

——それから製圖室と云つて産業の合理化だかを研究してゐるところがあります。

——ホ、産業の合理化？

河田が調子の變つた響きをあげた。

——「H・S工場」が始めて完全なコンヴェイヤー組織にかへられたのも、こゝの部員があづかつて力があつたさうです。——その時は一度に人が随分要らなくなつたので、とう／＼ストライキになつて、職工たちが夜中に工場へ押しかけて行つて、守衛をブン殴ぐつて、そのコンヴェイヤーのベルトを減茶苦茶にしてしまつたことがありました。何んしろ、作業と作業の間に一分の隙もない程に連絡がとれて居り、職場職場の職工たちは、コンヴェイヤーに乗つて徐々<sup>じゆぜん</sup>に動いて來る罐<sup>かん</sup>が、自分の前を通り過ぎて行く間に割り當てられた仕事をすればいゝといふやうになつてしまつたのですから、あまりません。縁曲機<sup>フレンヂヤイ</sup>なども、もとは職工がついてゐたが、今使つてゐる機械は自動化されて、一人も要らなくなつたんです。

——ん。

——今工場ではブリキ板を運ぶのに、トロツコを使つてゐますが、あれも若しコンヴェイヤー装置にでもしてしまふやうな事があつたら、そこでも亦人がオツ出されるわけでしょう。

——なるだらう。なるね。

——なるんです。製圖室や實驗室の人達には懸賞金<sup>けんしょうきん</sup>がかけられてゐるんです。

——うまいもん。

——その人達は何時でも、アメリカから取り寄せて、モーターやボイラーの寫眞の入つた雑誌を讀んでゐます。

——これから色々僕たちの仕事を進めて行く上に、職工のことは又別に、會社の所謂「高等政策」ツツてもものは是非必要なのだ。で、上の方の奴をその意味で利用することを考へてもらひたいと思ふんだ。

森本はうなづいた。

——工場のことでも、私らの知つてゐることは、ホンのちよツびりよりありません。

——さうだと思ふんだ。……それでも……。

眼が腕時計の上をチラツとすべつた。

——さうだな……。

疲れたらしく、石川が口の中だけで、小さくあくびを噛んだ。

——ン、それから工場の中の対立関係と云ふかな……あるだらうね。

——え……職場々々で矢張りあります。仕上場の方は熟練工だし、製罐部の方はどつちかと云へば女工でも出来る仕事です。それで……。

森本がさう云つて、頭に手をやつた。河田は彼のはにかんだ笑ひ顔を初めてみたと思つた。角ばつた、ゴツつい顔だと思つてゐるのに、笑ふと輪廓がほころんで、眼尻に人なツこい柔味が浮かんだ。それは思ひがけないことだつた。

——私らなど、何んかすると……金屬工なんだぜ。と……その方の大將なんです。それから日雇や荷役方は職工と一寸變です。事務所の社員に對しては、これは何處にでもあるでせう。——女事務員は大抵女學校は出てゐるので、服装から違ふわけです。用事があつて工場を通ることでもあると、女工たちの間はそれア喧しいものです。

森本は聲を出して笑つて、

——男の方だつて、さアとした服を着てゐる社員様を見るとね。ところが、会社には勤勉な職工を社員にするといふ規定があるんです。会社はそれを又實にうまく使つてゐるやうです。すウツと前に一人か二人を思ひ切つて社員にしたことがあります。然しそれはそれツ切りで、それからは仲々したことが無いんですが、さういふのが變にきいてゐるらしいんです。

河田は誰よりも聞いてゐた。鈴木は然し最後まで一言もしやべらなかつた。拇指の爪を噛んだり、頭をゴシ／＼やつたり——それでも所々顔を上げて聞いただけだつた。

森本は更に河田から次の會合までの調査事項を受取つた。「工場調査表」一號、二號。

河田はかうしてY市内の「重要工場」を充分に細密に調査してゐた。それ等の工場の中に組織を作り、その工場の代表者達で、一つの「組織」と連絡の機關を作るためだつた。「工場代表者會議」がそれだつた。——河田はその大きな意圖を持つて、仕事をやつてゐたのだ。ある一つの工場だけに問題が起つたとしても、それはその機關を通じて、直ちにそして同時に、Y市全體の工場の問題にするこゝとが出来るとだ。この仕事を地下に沈ませて、強固にチリ／＼と進めて行く！ それこそ、どんな「弾壓」にも堪え得るものとなるだらう。この基礎の上に、根ゆるぎのしない産業別の労働組合を建てる事が出来る。——河田は眼を輝かして、そのことを云つた。

「ブルジョワさへこれと同じことを已にやつてるんだ。工場主たちは「三々會」だとか、「水曜會」だとか、そんな名稱でチャンとお互の連絡と結束を計つてるんだ。」

暗い階段を両方の手すりに身體を浮かして、降りてくると河田も降りてきた。

「君は大切な人間なんだ。絶対に警察に顔を知られてはならないんだからね。森本は頬に河田の息吹きを感じた。」

「工場×××」として働いてもらうと思つてるんだ。

彼の右手は階段の下、厚く濶んだ闇の中でしつかりと握りしめられてゐた。

彼は外へ出た。氣をとられてゐた。小路のドブ板を拾ひながら、足は何度も躓いた。

「工場×××！」

彼はそれを繰り返へした。線かへしてゐるうちに、チリ／＼と底から興奮してくる自分を感じた。

## 七

この會合は來るときも、歸るときも必ず連れ立たないことにされてゐた。森本も鈴木も別々に歸

つた。

「俺へばりついても、この仕事だけはやつて行かうと思つてる。命が的になるかも知れないが……。」

前に歸つたものとの間隔を置くために待つてゐた河田が厚い肩をゆすぶつた。

「警察ではかう云つてるさうだ。俺とか君とか鈴木とか、表に出てしまつた人間なんて、チツトも恐ろしくない。これからは顔の知られない奴だつて、彼奴等だつてちアんと俺たちの運動の方向をつかんだ云ひ方をするよ、だから彼奴等の×××××も變つてきたらしい。特高係とか何んとか所謂表看板をブラ下げたものに彼奴等自身もあまり重きを置かなくなつてきたらしいんだ。」

「フうん、やるもんだな。」

「合法活動ならイザ知らず、運動が沈んでくれば、そんなスパイの踏みこめるところなど知れたものだ。恐ろしいのは仲間がスパイの時だ。或ひは途中でスパイにされたときだ。買収だな。早い話が……。」

「オイ／＼頼むぜ。」

石川がムキな聲を出した。



「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。まあさ、君がこつそり貰つてるとすれば、今晚のことはそのまゝ筒抜けだ。特高係など、私が労働運動者ですと、フレて歩く合法主義者と同じで、恐ろしさには限度があるんだ。外部でなくて内部だよ。」

「また氣味の悪いことを云ひやがるな。」

河田はだが屈託なささうに、鉢の大きい頭をゴシ／＼搔いて笑つた。それから、

「本當だぜ！」

と云つた。そして腕時計を見た。

「今日は俺が先きに歸へるからな。」

河田はそこから出ると、○百貨店の前のアスファルトを、片手にハンカチを持つて歩いてゐた。一寸踏めば分る小間物屋の時計が八時を指してゐた。彼は其處を二度往き來した。敷島をふかしてくる男と會ふためだつた。彼が前にその男から受取つた手紙の日附から丁度十日目の午後八時だつた。それは約束された時間だつた。彼は表の方を注意しながら、三錢切手一枚買つた。會つたときの合圖にそれが必要だつた。その店を出しなに、フト前から來る背廣の人が敷島をふかしてゐるのに氣付いた。彼はその服装を見た。一寸躊躇を感じた。然しその眼は明かに誰かを探がしてゐた。彼は思はず

ハンカチを握つてゐる掌に力が入つた。

男が寄つてきた。で彼も何氣ない様子を裝つてその男と同じ方へ歩き出した。彼から口を切つた。

「山田です。」

すると、背廣の人は直ぐ

「川村。」

と云つた。

「山」と「川」が合つた。二人は人通りのあまり多くない河端を下りて行つた。少し行くと、男が、

「何處か休む處がないですか。」

と云つた。

「さうですね。」

河田は兩側を探がして歩いた。そして小さいレストランの二階へ上つた。

テーブルに坐ると、男がポケットから三錢切手を出した。その〇〇の〇〇がインクで消されてゐた。

河田もさつきの三錢切手を出して、その〇〇の方を消した。二人は完全に「同志」であることが分つ

た。男は中央から派遣されてきた。××のオルガナザーだつた。

河田はY地方の情勢やX獲得数などを、そこで話し出した。

## 八

鈴木は少しでも長く河田や石川などゝゐることに苦痛を覚えた。彼は心が少しも楽しまないのだ。誇張なしに、彼は自分があらゆるものから隔てられてゐる事を感じてゐた。そしてその感情に何時でも負かされてゐた。——およそ、プロレタリア的でない！ 然し自分は一體「運動」を信じて、運動をしてゐるのか、「人」を信じて運動をしてゐるのか？ 河田や石川が自分にとつて、どうであらうとそれが自分の運動に對する「氣持」を一體どうにも變へやうが無い筈ではないか。——又變へてはならないのださうだ、それは分る。然し直ぐ次にくるこの「淋しさ」は何んだらう？——彼はもう自分が道を踏み迷つてゐることを知つてゐた。

理論的にも、實踐的にも、それに個人的な感情の上からでも、あせつてゐる自分の肩先きを、グイ／＼と乗り越してゆく仲間を見ることに、彼は拷問にたえる以上の苦痛を感じた。かういふ迷ひの一寸切れも感じたことのないらしい他の同志を、彼はうらやましく思つた。——然し彼はかういふ無産運動が、外から見る程の華々しい純情的なものでもなく、醜いのみ合ひと小商人たちより劣る掛

引に充ちてゐることを知つた。それは彼に恐ろしいまでの失望を強いた。

運動ではお前は河田達の先輩なんだぜ。

その言葉の陰は「それでも口惜しくないのか。」と云つてゐた。それは撒ビラのこと、二十九日食つたときの事だつた。然しそんな事を云ふのは、よく使はれる特高係の「手」であることを彼は知つてゐた。

——お前も案外鈍感だな。一緒に働いてゐて、河田や石川たちから何處ツかこう仲間外れにされてゐることが分らないのかな。

彼はだまつて外ツ方を向いた。——然し彼は自分の意思に反して、顔から血のひいてゆくのをハツキリ感じた。

——「手」だな、とお前はキツト考へてゐるだらう。

特高主任が其處で薄く笑つた。

——それアねえ、僕らも正直に云つて、そんな「手」をよく使ふよ。だが、これが「手」かどうかは、僕より君が内心知つてゐるだらうと思ふんだ。この前、石本君とも話したが、鈴木は可哀相に置いてけほりばかり食つてゐる。あれでよく運動を一緒にやつて行く度量がある。俺たちにはとても出来な

い藝當だつて云つてたんだ。

——……ちや知らせやうか。

特高主任がフト頭をかしけた。鈴木はその言葉の切れの間に思はず身體のしまる恐怖を感じた。

——これは或ひは滅多に云へない事だが、僕はある方法によつて、そこは世界一を誇る警察網の力だが、すでに河田たちが××××に加入してゐるといふことの確證を握つたのだ。——ところがそれに君が入つてゐないのだ。……入つてゐないから、こんな事君に云へる。嘘か本當かは君の方が分つてゐるだらうよ……。

——……。

——おかしな云ひ方をするが、僕はそのことが分つた時、喜んでいいか、悲しんでいいか分らなかつた。——入つてゐないときいて、僕等が喜ぶのは勝手だと君は云ひたいだらう。それならそれでいい。僕等はどうせ、人に決して喜ばれることの出来ない職業をしてゐるのだから。然し「同志」といふものゝ氣持は、僕等からはとても覗ひ知ることの出来ないほど、深い信頼の情ではないかと思ふんだ。だが、君はそれに裏切られてゐるのだ。それが分つたとき、僕は君に對して何んと云つていいか

分らない。××××××××××××××××！

——勝手なことを云へ！

胸がまくれ上がったのどへ来た。それを一思ひにヘキ出さなければならなかつた。で、怒鳴つた。

——彼は胸一杯の涙をこらへた。

特高主任は鉛筆をもてあそびながら、彼の顔をちツと見た。一寸だまつた。

——そればかりではないんだ。紛議の交渉とか争議費用として受取つた金の分配などで、君がどの位誤魔化されてゐるか知れない。——河田たちが、そんな金で遊んでゐる證據がアんと入つてゐるんだ。——それでも清貧に甘んじるか……。

それ等が嘘であれ、本當であれ、彼が内心疑つてゐた事實をピシピシと指してゐた。

氣にしまい、氣にしまい、さう意識すると、逆にその意識が彼の心を歪める。河田と素直な氣持ではものが云へなくなつた。河田たちの顔を見てゐることが出来なかつた。自分ながら可笑しい程そわ／＼して、視線を迷はせた。そして一方自分の何處かでは、河田の云ふことに剃刀の刃のやうな鋭い神經を使つてゐるのだ。

少し前だつた。何時も自分の宿に訪ねてくる×××が、街で彼を見ると寄つてきた。

— 君は大分宿代を滞こらせてるんだな。  
と、ニヤ／＼云つた。

— ちや、君か！

彼はそのまま立ち止つた。刑事は大きな聲で笑つた。— 四五日前、鈴木の人だと言つて、彼の泊つてゐる宿へ来て、今迄滞らせてゐた宿代を拂つて行つたものがあつたのだ。

— いゝぢやないか、かういふ事は。お互さ。別に恩をきせて、どうといふわけでないんだから。それから、一寸聞きたいことがあるんだが、と赤い薄い鬚を正方形だけはやしたその男が、四圍を見廻はした。

二人は大通りから入つたカフェー・モンナミを見付けた。そのバネ付のドアを押して二階へ上つた。— 特高は彼には勝手に、ビールやピフテキを注文した。

— 断つておくが、かういふ事は君たちの勝手にすること、別に……。  
みんな云はせずに、

— 分つてるよ。固くならないでさ。一度位はまアゆつくり話もしてみたいんだよ。— いくら僕等でもネ。

と云つて、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、と笑つた。

彼はもう破れ、かぶれだと思つた。彼はそこでのめる程酔拂つてしまつた。—

「二階」の會合の時も、河田が急いでゐたらしかつたが、鈴木は自分から先きに出てしまつた。チリ／＼と来る氣持の壓迫に我慢が出来なかつたのだ。— 下宿に歸つてくると、誰か本の包みを置いて行つたと云つた。彼はそれを聞くと、その意味が分つた。

二階に上つて行つて解いてみると、知らない講談本だつた。彼は本の背をつまんで、頁を振つてみた。べつたり折り疊まつた拾圓紙幣が二枚、赤茶けた疊の上に落ちてきた。

彼はフイに顔色をかへた。— 拾圓紙幣が出たからではない。知らずに本の頁を振る動作をしてゐた自分にギョツと氣付いたからだつた。

彼はそれをつかむと、階段を下りて、街へ出て行つた。だが、彼の顔色がなかつた。

九

— 君ちアん、君ちアん。— キイ公オ！

二階の函詰場で、男工と女工がコンヴェイヤーの兩側に向ひ合つて、空罐を箱詰めにしてゐた。

パッキングされた函は、二階からエスカレーターに乗つて、運河の岩壁に横付けにされてゐる船に、そのまま荷役が出来る。——晝近くになつて、鐘が切れた。皆が手拭で身體の埃を拂ひながら、薄暗い階段を下りて行つた時だつた。暗い口を開らいてゐる「製品倉庫」のなかゝら、低くひそめた聲が呼んでゐる。前掛をしめ直してゐたお君が「クスツ」と笑つて、——急いで四圍を見た。だまつてゐた。

——キイ公、ぢらすなよ！

お君はもう一度クスツと笑つて、倉庫の中へ身體を跳ねらした。

——ア、暗い。

ワザと上はずつた聲を出して、両手で眼を覆つた。居ない、居ないをしてゐるやうに。

——こつちだ。

男の手が肩にかゝつた。

——いや。

女が身體をひいた。

——何が「いや」だつて。手ば除かれよ。

——……………。

お君は男の胸を直接に感じながら、身體をいや／＼させた。

——手ば取れつたら。な。さ。さ。ん？

女はもつとさうしてゐることに妙な興奮と興味を覺えた。男は無理に両手を除けさせて後に廻はした片手で、女の身體をグイとしめつけてしまつた。女は男の腕の中に、身體をくねらした。そして、顔を仰向けにしたまゝ、いたづらに、ワザと男の唇を色々にさけた。男は女の頬や額に唇を打つけた。

——駄目だ、人が來ると！

男はあせつて、のどにからんだ聲を出した。お君はとう／＼聲を出して笑ひ出した。そして背のびをするやうに、男の肩に手をかけた……………。

——上手だなア。

男が云つた。

——モチ！癖になるから、あんたとはこれでお終ひよ！

男が自由にグイ／＼引きすり廻はされるのが可笑しかった。——お君はさう云ふと、身體を顔がへ

して、上氣した頬のまゝ、階段を跳ね降りて行つた。

お君は晝過ぎになつてから、然し急に燥やぐことをやめてしまつてゐた。

晝飯時の食堂は何時ものやうに、女工たちがガヤ／＼と自分の場所を仲間たちできめてゐた。お君は仲良しの女工に呼ばれて、そこで腰を並らべて、晝飯をたべた。

——ねえ！

ワザ／＼お君を呼んだ話好きな友達が、聲をひそめた。

驚いッちまつた！

女は昨日仕事の跡片付けて、皆より遅くなり、工場の中が薄暗くなりかけた頃、脱衣場から下りてきた。その降り口が丁度「ラバー小屋」になつてゐた。知らずに降りてきた友達はフトそこで足をとめた。小屋の中に誰かゐると思つたからだつた。女の足をとめた所から少し斜め下の、高くハメ込である小さい硝子窓の中に——男と女の薄い影が動いてゐる。

——それがねエ！

女は口を抑えて、もつと低い聲を出した。

男はこつちには背を見せて、ズボンのベルトをしめてゐた。女は窓の方を向いたまゝうつ向いて、髪に手をやつてゐる。男はバンドを締めてしまふと、後から女の肩に手をかけた。そして片方の手をポケットに入れた。ポケットの中の手が何かを探がしてゐるらしかつた。

——××よ！ 男がその××を女の帯の間にに入れてやつたのよ、どう？

——……………！？

——で、その女の人の一體誰と思ふ？

いたづら／＼しい光を一杯にたゞえた眼で、お君をヂツと見た。

——誰だかつたの？

——それアもう！ さういふことはねえ。

——……………？

——芳ちやんさ！

——馬鹿な！

お君は反射的にハネかへした。

——フン、それならそれでいゝさ。

女は肩をしやくつた。

お君は一寸だまつた。

—相手は？

—相手？ XXXXだものXXXXだらうよ。誰だつていゝでせうさ。

何時でも寒さうな唇の色をしてゐる芳ちゃんは、さう云へば四人の一家を一人で支へてゐた。お君はそのことを思ひ出した。—それをこんな調子でものを云ふ女に、お君はもち前の向かつ腹を立てゝしまつた。

—でも、妾たちの日給いくらだと思つてるの。五十銭から七八十銭。月いくらになるか直してごらんよ。—XXならXXでやらせらアねえ！

お君は飯が終つて立ちかけながら、上から浴せかけた。そして先きに食堂を出てしまつた。—馬鹿にしてる！

+

午後から女學生の「工場參觀」があると云ふので、男工たちは燥やいでゐた。

—ヘンだ。ナツバ服と女學生様か！ よくお似ひますこと！

女工たちは露骨な反感を見せた。

—口惜しいだらう！—女學生が入つてくると、工場のお嬢さん方の眼付が變るから。凄いて！

—眼付きなら、どつちがね！

—オイ、あまりいぢめるなよ。たまには大學生様だつて參觀に来るんだからな。

何時でもツケ／＼と皮肉なことを云ふ職工だつた。

—と、どうなるんだ。大學生様と女工さんが。ハ、それア今流行だ。

—ネフリユウドフでも來るのを待つてるか……！！

「藝術職工」が口を入れた。

—女學生の參觀のあとは、不思議にお嬢さん方の鼻息がおとなしくなるから、たまにはあつた方がいゝんだ。

年老つた職工が聞いてゐられないといふ風に云つた。

—「友喰ひ」はやめろつて！ キイ公まで黙つてしまつた。—

何んとか、かんと云つたつて……どんづまりはなア！

どんづまりは？で、みんなお互気まづく笑ひ出してしまった。

「Yのフォード」は、その完備した何處へ出しても恥かしくない工場であるといふことを宣傳するた  
めに、広告料の要らない廣告として、「工場參觀」を歓迎してゐた。「製罐業」を可成りの程度に獨占し  
てゐる「H・S會社」としては、工場の設備や職工の待遇をこの位のものにしたとしても、別に少し  
の負擔にならなかつた。而も、その効果は更に職工たちに反作用してくることを豫想しての歡迎だつ  
た。——「俺んこの工場は——」俺の會社は——「職工たちはさういふ云ひ方で云ふ。自分の工場  
が誰かに悪口をされると、彼等はおかしい程ムキになつて辯護した。三井に勤めてゐる社員が、他  
どの會社に勤めてゐる社員の前でも一つのキン持をもつてゐる。さういふ社員は従つて決して三井を  
裏切るやうなことをしない。「H・S」の専務はそのことを知つてゐたのだ。

傳令が來た。幼年工を使つてよこした。

——來たよ。シャンがゐるよ。

キイ公、聞いたか。シャンがゐるとよ。

——どれ、俺も敵狀視察と行つてくるかな。

同じパツキングにゐる温しい女工が、浮かない顔をしてゐた。

——ね、君ちゃん。私いやだわ。女學校なら、小學校のとき一緒の人がゐるんだもの。  
——構ふもんかい！  
お君は男のやうな云ひ方をした。  
——こつちへ來たら、その間だけ便所へ行つてゐるわ、頼んで。——本當に、どんな氣で他人の働い  
てるのを見に来るんだか。

——何が恥かしいツて。お嬢さん面へ空罐でも打ツつけてやればいゝんだ。動物園と間違つてや

らぬ。

——よオ！ よオ！

——何がよオだい。働いた金でのお嬢さん面なら、文句は云はない。何んだい！

——へえ、キイ公も偉くなつたな。どうだい、今晚活動をおごるぞ。行かないか。月形龍之介演ず  
るところの、何んだけ、斬人斬馬の劍か。人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬る！ 來いッ！

——参るぞオ——だ。行かないか。

——たまには、このお君さんにも約束があるんでね。

——キイ公めつきり切れるやうになつたな。



お君は今晩「仕事」のことで、森本と會はなければならなかつた。——階段を上つてくる澤山の足音がした。

——さア、来たぞ!!

## 十一

その聲、森本は笠原を誘つて、會社横の奇麗に刈り込んだ芝生に長々とのびた。——彼はかういふ機会を何時でも利用しなければならなかつた。笠原は工場長の助手をしてゐた。甲種商業學校出で、マルクスのもものなども少しは讀んでゐるらしかつた。

そこからは、事務所の前で、ワイシャツの社員がキャッチボールをやつてゐるのが見えた。力一杯なけたボールがミットに入るたびに、眞晝のもの憂い空気に、何かと筒抜けで行くやうな心よい響きをたてた。側に立つてゐた女事務員が、受け損じると、手を拍つてひやかした。

が、工場の日陰の方には、子供が負ぶつてきた乳飲子を立膝の上のせて、年増の女工が胸をはだけてゐた。それが四五組あつた。

森本は青い空をみてゐた。仰向けになると、空は殊更に青かつた。

——その時、胸にゲブ／＼と来た。森本は口の中でそれを噛み直した。

——オイ!

側にゐた笠原が頭だけをムツクリ擧げて、森本を見た。

——……? 反芻か? 嫌な奴だな。

彼は極り悪けにニヤ／＼した。

森本が會社のことを色々きくのは笠原からだつた。

會社は今「産業の合理化」について、非常に綿密な調べ方をしてゐた。然し合理化の政策それ自体には大した問題があるのではなくて、その政策をどのやうな方法で實行に移すかといふこと——つまり職工たちに分らないやうに、憤激を買はないやうにするには、どうすればいゝか、その事で頭を使つてゐた。

「H・S」では、新たに採用する職工は必ず現に勤務してゐる職工の親や兄弟か……でなければならなかつた。専務は工場の一大家族主義化を考へてゐた。——然しその本當の意味は、どの職工もお互ひが勝手なことが出来ないやうに、眼に見えない「責任上の連繫」を作つて置くことにあつた。それは更に、賃銀雇傭といふ冷たい物質的關係以外に、會社のその一家に對する「恩恵」とも見えた。然

し何よりストライキ除けになるのだつた。で、今合理化の政策を施行しやうとしてゐる場合、これが役立つことになるわけだつた。

会社は更に市内に溢れてゐる失業労働者やすぐ眼の前で動物線以下の労働を強いられてゐる半自由労働者——濟人足たちのことを、たゞそれツ切りのこととして見てはゐなかつた。さういふ問題が深刻になつて来れば来るほど、それが又「Yのフォード」である「H・S」の職工たちにもデリケートな反映を示してくるといふことを考へてゐた。——さういふ一方の「劣悪な条件」を必要な時に、必要な程度にチク／＼と暗示をまかして、職工たちに強いことが云へないやうにする。——「H・S」はだから、イザと云へば、さういふ強味を持つてゐた。

合理化の一つの條件として、例へば労働時間の延長を断行しようとする場合、それが職工たちの反感を真正面に買ふことは分り切つてゐる。然し「X」を作るS市の「製麻会社」や、M市の「製鋼所」などでは、それが單なる「營利事業」でなくて、重大な「X」的義務であるといふ風に喧傳して、安々と延長出来た例があつた。——「拔道は何處にでもある」だから、その工場のそれ／＼の特殊性を巧妙につかまえば、案外うまく行くわけだつた。——「H・S」もさうだつた。

自慢ぢや御座んせぬ

製罐工場の女工さんは

露領カムチャツカの寒空に

命もとの鐘詰仕事

無くちやならない鐘つくる。

羨ましいぞえ

製罐工場の女工さんは

一度港出て鐘詰になつて

歸へりや國を富まして身を肥やす

無くちやならない鐘つくる

自慢がや御座んせぬ

製鐵工場の女工さんは

怠けられやうか會社のために

油斷出來やうかみ國のために

命もとの仕事に濟まぬ

(「H・S會社」發行「キヤン・クラブ」所載。)

さういふ歌や文章が投稿されてくると、會社は殊更に「キヤン・クラブ」で優遇した。又、會社がこつそり誰かに作らせて、それを載せることさへした。

「H・S會社」はカムサツカに五千八百萬鐵、蟹工船に七百八十萬鐵、千島、北海道、樺太に九百八十萬鐵移出してゐた。割合にして、カムサツカは壓倒的だつた。

笠原は工場長のもとで、「科學的管理法」や「テイラー・システム」を讀ませられたり、色々な統

計を作らせられるので、會社の計畫を具體的に知ることが出來た。日本ばかりでなく、世界の賃銀の高低を方眼紙にひかされた。——世界的に云つて、名目賃銀は降つてゐたし、生活必需品の價格と比較してみると、實賃銀としても矢張り下降を辿つてゐる「H・S」だけが何時迄もその例外である筈がなかつた。又、生産力の強度化を計るために、現在行はれてゐる機械組織がモット分業化され、賃銀の高い熟練工を使はず、婦女子で間に合はすことが出來ないか。コンヴェイヤーがもつと何處ツかへ利用出來ないか、まだ労働者が「油を賣つたり」「息を繼ぐ」暇があるのではないか、簡拂賃銀にしたらどうか……。職工たちがセツこましい工場の中で、頭をつツこんでグヅグヅしてゐる間に彼等は「世界」と歩調を合せて、その方策を進めてゐた。

「H・S工場」の五ヶ年の統計をとつてみると、生産高が増加してゐるのに、労働者の数は減つてゐる。これは二つの意味を持つてゐた。——一つは今迄以上に労働者が押られたと云ふこと、一つはそれだけが失業者として、街頭におツほり出されてゐるわけである。コンヴェイヤーが完備してから、「運搬工」や「下働人夫」に殊に目立つて減つた。熟練工、不熟練工との人數の開きも賃銀の開きも、ずつと減つてゐる。驚くべきことは、何時のまにか「女工」の増加したことで、更に女工が増加した頃から、工場一般の賃銀が眼に見えない位づゝ低下してゐた。——工場長は、女を使ふと、賃銀

ばかりの點でなく、労働組合のやうな組織に入ることもなく、抵抗力が弱いから無理がきくと、云つてゐた。

然しこれ等のことは、どれもたゞ「能率増進」とか「工場管理法」の徹底とか云つてもいゝ位のこととで「産業の合理化」といふ大きな掛聲のホンの内輪な一部分でしかなかつた。——「産業の合理化」は本當の目的を別なところに持つてゐた。それは「企業の集中化」といふ言葉で云はれてゐる。中や小のゴチャ／＼した商工業を整理して、大きな奴を益々大きくし、その數を益々少くして行かうといふのが、その意圖だつた。

で、その究極の目的は、残された収益性に富む大企業をして安々と獨占の甘い汁を吸はせるところにあつた。そしてその裏にゐて、この「産業の合理化」の糸を實際に操つてゐるものは「銀行」だつた。

例へば銀行が澤山の鐵工業者に多大の貸出しをしてゐる場合、自分の利潤から云つても、それ等のもの相互間に競争のあることは望ましいことではない。だから銀行は企業間の競争を出来るだけ制限し、廢止することを利益であると考へる。かういふ時、銀行はその必要から、又自分が債権者であるといふ力から、それ等の同種産業者間に協定と合同を策して、打つて一丸とし、本來ならば未だ競争

時代にある經濟的發展段階を獨占的地位に導く作用を替むのだ。——合理化の政策は明かに「大金融資本家」の利益に追隨してゐた。

毎月三田銀行へ提出する「業務報告」を書かせられてゐる笠原は、資本關係としての「銀行と會社」といふものが、どんな關係で結びつけられてゐるか知つてゐた。——「H・S工場」の監督權も、

支配、統制權もみんな三田銀行が握つてゐること、營業成績のことで、よく會社へ文句がくること、事務が殆んど三田銀行へ日参してゐること、誇張して云へば、専務は丁度逆に三田銀行から「H・S」へ來てゐる出張員のやうなものであること。——かういふ關係が、いづれ面白いことになりさうだ……笠原がそんなことを話した。森本はだん／＼青空を見てゐなかつた。

産業の合理化は更に購買と販賣の方にもあらはれた。資本家同志で「共同購入」や「共同販賣」の組台を作つて、原料價格と販賣價格の「統制」をするさうすれば、彼等は一方では労働者を犠牲にして剩餘價値をグツと殖やすことが出来ると同時に、こゝでは價格が「保證」されるわけだから、二重に利潤をあげることが出来るのだつた。彼等の獨占的な價格協定のために、安い品物を買えずに苦しむのは誰か？ 國民の大多數をしめてゐる労働者だつた。

——要らなくなつた。ゴミ／＼した工場は閉鎖される。労働者はドシドシ、街道におツほり出され

五ヶ年を見たい工場

他人事務だ

る、幸ひに首のつながつてゐる労働者は、ますます科學的に、少しの無駄もなく搾られる。他人事ではないさ。——かういふ無慈悲な摩擦を伴ひながら、資本主義といふものは大きな社會化された組織・獨占の段階に進んで行くものなのだ。だから、産業の合理化といふものは、どの一項を取り出してきても、結局資本主義を最後の段階まで發達させ、~~資本主義~~に都合のいゝ條件を作るものだけども、又どの一項をとつてみても、皆結局は「労働者」にその犠牲を強ひて行はれるものなんだ。——「H・S」だつて今に……なア……。

笠原は眼をまぶしく細めて、森本を見た。

——「Yのフォード」も何時迄も「フォード」で居られなくなるんでないか、と思ふがな。

十二

始業のボウで、二人が跳ね上つた。笠原はズボンを一タタと拂らつて、事務所の方へ走つて行つた。

汽船のドズツ、ドズツといふ地ゆるぎが足裏をくすぐつたく揺すつた。薄暗い職場の入口で、内に入らうとして、森本がひよいと窓からゴルフへ行く事務の姿を見て、足をよどました。給仕にステ

ツキのサツクを背負はしてゐた。拍子に、中から出てきた佐伯と身體を打ち當てゝしまつた。

——失敬ッ！

——ひよつとこ奴！

佐伯？ 何んのために、こつちへやつて來やかつたんだ。——森本は臭い奴だと思つた。

——何んだ、手前の眼カスベか露か？

——何云つてるんだ。窓の外でも見ろ！

佐伯はチラツとそれを見ると、イヤな顔をした。

——あの恰好を見れ「昭和の花咲爺」でないか。ゴルフつてあんな恰好しないと出來ないんか。

——フン、どうかな……。

あやふやな受け方をした。佐伯には痛いところだつた。

——實はね、安部磯雄が今度遊説に來るんだよ。……それを機会に、市内の講演が終つてから、一時間程工場でもやつてもらふことにしたいと思つてるんだ。これは事務も賛成なんだが……。

——主催は……君等が呼ぶのか？

——冗談ぢやない、専務だよ。

不承不承の意思は、  
 咳、あ、う、う、う

——専務が？！

森本は薄く笑つた。

——へえ、馬鹿に大膽なことをするもんだな。

——偉いもんだよ。

佐伯は森本の意味が分らず、き真面目に云つた。

専務が「社民黨」から市議員に出るといふ噂を森本がきいたことがあつた。そんな話を持ち出してきたのも、矢張り佐伯だつた。その時、森本は、

——ちや、社民黨ッて誰の黨なんだ。「労働者の黨」ではないのか。と云つた。

佐伯が顔色を動かした。そして、

——共産黨ではないさ。

と云つたことがある。

會社では、職工たちが左翼の労働組合に走ることを避けるために、内々佐伯たちを援助して、工場の中で少し危険と見られてゐる職工を「労働者同盟」に加入させることをしてゐた。それは森本たち

も知つてゐる。——然しその策略は逆に「H・S」の専務は實に自由主義的だとか、職工に理解があつて、労働組合にワザ／＼加入させてゐるとか——さういふことで巧妙に隠されてゐた。それで働いてゐる多くの職工たちは、その関係を誰も知つてゐなかつた。工場の重だつた分子が、假りに「社民系」で固められたとすれば、およそ「工場」の中で、労働者にどんな不利な、酷な事が起らうと、それはそのまゝ通つてしまふ。分りきつたことだつた。——森本は其處に大きな底意を感じる事が出来る。會社がダン／＼職工たちに對して、積極的な態度をもつてやつてきてゐる。それに對する何かの用意ではないか？——彼はますますその重大なことが近付いてゐることを感じた。

彼はまた「工場××」といふものゝ任務を、それと具體的には知つてゐない、然し彼は今までの長い工場生活の経験と、この頃のやうやく分りかけてきたその色々の機構のうちに、自分の位置を知ることが出来るやうに思つた。——

——で、この機會に、工場の中にも社民黨の基礎を作らうと思ふんだ。……仕上場の方にも一通りは云つてきた。——その積りで頼むぜ。

佐伯はそれだけを云ふと、トロツコ道を走つて行つた。走つて行きながら、ブリキを積んだトロツコを押してゐる女工の尻に後から手をやつた。それがこつちから見えた。女がキヤッ！ とはね上つ

て、佐伯の背を殴ぐりつけた。

——べ、べ、べ！

彼はおどけた恰好に腰を振つて、曲がつて行つた。

佐伯は労働者街のT町で「中心會」といふ青年團式の會を作つてゐた。その七分までが「H・S」の職工だつた。彼は柔道が出来るので、その會は半分その目的を持つてゐた。道場もあつた。「H・S會社」から幾分補助を貰つてゐるらしかつた。何處かにストライキが起ると「一般市民の利益のため」に「争議の邪魔をした。精神修養、心神練磨の名をかりて、明かにストライキ破りの「暴力團」を養生してゐたのだ。會社で「武道大會」があると、その仲間が中心になつた。

森本は職場へ下りて行きながら、自分の仕事の段取と目標が眼の前に、ハッキリしてくるのを感じた。

その日家へ歸つてくると、河田の持つて來た新聞包みのパンフレットが机にのつてゐた。齒車の装頓のある四五十頁のものだつた。

・「工場新聞」

「『工場××の任務とその活動』

表紙に鉛筆で「すぐ讀むこと」と、河田の手で走り書きしてあつた。

十三

——女が入るやうになると、氣をつけなければならぬ。運動を變にしてしまふことがあるから。

河田がよく云つた。——で、森本もお君と會ふとき、その覺悟をしつかり握つてゐた。

「石切山」に待つててもらつて、それから歩きながら話した。

胸を張つた、そり身のお君は男のやうな歩き方をした。工場で忙がしい仕事を一日中立つて働いてゐる女工たちは、日本の「女らしい」歩き方を忘れてしまつてゐた。——もう少し合理的に働かせると、日本の女で洋服の一番似合ふのは女工かも知れない、アナアキストの武林が、武林らしいことを云つてゐた。

工場では森本は女工にフザケたり、笑談口も自由にきけた。然し、かう二人になると、彼は仕事のことでも仲々云へなかつた。一寸云ふと、まづく吃つた。淫賣を買ひなれてゐることとは、すつかり





あんただつて知つてるでせう。會社をやめて、バターの女給さんになつたり、たまには白首になつたりする女工さんがあるのを。それはね、會社をやめて、それからさうなつたんでなくで、會社のお金だけではとてもやつて行けないので、始めツからさうなるために會社をやめるのよ。——會社の人たちはそれを逆に、あいつは、墮落してさうなつたとか、會社にちアんと勤めてるればよかつたのにと云ひますが、ゴマかしも、ゴマかし！

森本は驚いて女を見た。正しいことを、しかもこのやうな鋭さで云ふ女！それが女工である！

——女工なんて惨めなものよ。だから、可哀相に、話してゐることつてば、月何千圓入る映畫女優のことゝか、女給や藝者さんのことばかり。

——さうかな。

——それから一錢二錢の日給の愚痴。「工場委員會」なんて何んの役にも立つたゝめしもないけれども、それにさへ女工を無視してゐるでせう。

——二人が出てゐるさ。

——あれ傍聴よ。それも、デクの棒みたいに立つてる發言權なしのね。

——ふウん、

——氷水お代り貰はない？

——ん。

——あんた仕上場で、私たちの倍以上も貰つてるんだから、おごるんでせう。

お君は明るく笑つた。並びのいゝ白い齒がハッキリ見えた。森本はお君の屈托のない自由さから、

だん／＼肩のコリがとれてくるのを覺えた。お君はよく「——だけのこと」「——といふ口吻。」それ

だけで切つてしまつたり、受け答ひに「そ」「うん」そんな云ひ方をした。それだけでも、森本が今

迄女といふものについて考へてゐたことゝ凡そちがつてゐた。——かういふところが、皆今迄の日本

の女たちが考へもしなかつた工場の中の生活から來てゐるのではないかと、思つた。

——會社を離れて、お互ひに話してみるとよク分るの。皆ブツブツ。あんた「フオード」だから

ツて悲觀してるやうだけれども、私各係に一人二人の仲間を作れるツて氣がしてるの。——女ツて

.....。

お君がクスツと笑つた。

——女ツて妙なものよ。一たん方向だけきまつて動き出すと、男よりやつてしまふものよ。變形ヒ

ステリーかも知れないわね。

——變形ヒステリーはよかつた。

森來も笑つた。

彼は河田からきいた「方法」を細かくお君に話し出した。するとお君はお君らしくないほどの用心深い、眞實な面持で一々それをきいた。

やりますわ。みんなで勵けみ合つてやりませう！

お君は片方の頬だけを赤くした顔をあげた。

氷水屋を出て少し行くと、鐵道の踏切だつた。行手を柵が靜かに下りてきた。なまぬるく風を煽つて、地響をたてながら、明るい窓を一行にもつた客車が通り過ぎて行つた。汽灌のほとほりが後にのこつた。ペンキを塗つた白い柵が闇に浮かんで、靜かに上つた。向ひから、激んでゐた五六人がすれ違つた。その顔が一つ一つ皆こつちを向いた。

——へえ、シヤンだな。

森本はひやりとした。それに「戀人同志」に見られてゐるのだと思ふと、カアツと顔が赤くなつた。

——何云つてるんだ。

お君が云ひかへした。

彼女は歩きながら、工場のことを話した。

……顔が變なために誰にも相手にされず、ふれに長い間の無味乾燥な仕事のために、中性のやうになつた年増の女工は小金をためてゐるとか、決して他の女工さんの仲間入りをしないと、顔の綺麗な女工は給料の上りが早いとか、一人の職工に二人の女工さんが惚れたために、一人が失戀してしまつた、ところで失戀した方の女工さんが、他の誰かと結婚すると、早速「水もしたゝる」やうな赤い手柄の丸髷を結つて、工場へやつて来る、そしてこれ見よとばかりに一廻りして行くと、日給を上げて貰ふために、職長と活動寫眞を見に行つて歸りに「そばや」に寄るものがあるとか、社員が女工のお腹を大きくさせて置きながら、その女工が男工にふざけられてゐるところを見付けると、その男と變だらうと、突ツばねたことがあるとか……。

坂になつてゐて、降りつくすと波止場近くに出た。涼み客が港の灯の見える棧橋近くで。ブラ／＼してゐた。

——林檎、夏蜜柑、梨子は如何ですか。

道端の物賣りがかすれた聲で呼んだ。

——林檎喰べたいな。

獨言のやうに云つて、お君が寄つて行つた。

他の女工と同じやうに、お君も外へ出ると、買ひ喰ひが好きだつた。

——お君は歩きながら、袂で眞赤な林檎の皮をツヤ／＼にこすると、そのまゝ皮の上からカシユツとかぶりついた。暗がりに白い齒がチラツト彼の眼をすべつた。

——おいしい！ あんた喰べない？

林檎とこの女が如何にもしつくりしてゐた。

——さうだな、一つ貰はうか……。

——一つ？ 一つしか買はないんだもの。

女は堪らへてゐたやうな笑ひ方をした。

——……人が悪いな。

——ぢや、こつち側を一嚙りしない。

女はもう一度袂で林檎を拭ふと、彼の眼の前につき出した。

彼ははてしてしまつた。

——ぢや、こつち？

女は悪戯らしく、自分の嚙つた方をぐるりと向けた。

——……。

——元氣がないでせう。ぢや、矢張りこつちを一嚙り。

彼は仕方なく臆病に一嚙りだけした。

其處から「H・S工場」が見えた。灰色の大きな圖體は鳴りをひそめた「戦闘艦」が紡つてゐるやうに見えた。

この初めての夜は、森本をとらへてしまつた。

彼はひよつとすると、お君のことを考へてゐた。彼はそれに別な「張り」を仕事に覺えた。それがお君から來てゐるのだと分ると、彼はうしろめいた氣がした。

そして——、もう自分は、河田の注意してゐることに陥入りかけてゐるのではないか、とおもつた。

どれもこれもロクな職工はゐない、みんなマヒした奴ばかりだとか——又彼等も外からはさう見えたとはいふことは、本當ではなかつた。「フオード」と云つても、矢張り労働者は労働者位しかの待遇を受けてゐないのだ。たゞ、どつちを向いても底の知れない不景氣で動きがとれないので、とにかくがみついてゐなければならなかつたし、それに彼等は矢張り「Yのフオード」だといふ自己錯覺の阿片にも少しは落とされてゐた。

——會社を離れて話してみると、皆ブツ、ブツよ。

お君が云つたことがある。これは當つてゐた。たゞ、いくらそんな工合でも、彼等は誰かゞ口火を切つてくれる迄は待つてゐるものだ、といふことだつた。

森本は今迄は親しい仲間と會つても、工場の問題とか、政治上の話などをしやべつたことがなかつた。それは仲のよかつた石川が組合に入るやうになつてからだつた。それまでの彼は見習からタ、キ上げられた。女工の尻を追つたり、白首を買つたり、女の話しかしない金屬工でしかなかつた。——然し、今度彼がその變つた意識で以前のその仲間に話しかけると、不思議なことには、その同じ猥談

組の仲間とは思はれない答を持つてやつてきた。それを見ても、今迄誰も彼等のうちにある意識にキツカケを興へなかつたことが分る。彼等は皆自分の生活には細かい計算を持つてゐた。一日一錢のこゝと、會社の消費組合で買ふするめの値が五厘高いといふので、大きな喧嘩になるほどの議論をするのだ。

月々の掛金や保険費の不親切と冷淡さで、彼等は「健康保険法」にはうんざりしてゐた。そればかりか「健保」が施行されてから、會社は職工の私傷のときには三分の二、公傷のときには全額を負担しなければならぬのをウマク逃れてしまつてゐた。「健保は當然會社の全負擔にさせなければならぬ性質のもんだ。」——誰にも教へられずに、職工はさう云つてゐた。

「工場委員會」も職工たちには「狸ごっこ」だと思はれてゐない。「おとなしい」「我ン張りのない」職工を會社が勝手にきめて、お座なりに開くそんな「工場委員會」に少しも望みをつないでゐなかつた。

今迄一人の女工も使つてゐないボディ・ラインを、賃銀の安い女工で置きかへるかも知れないといふので、職工は顔色をなくしてゐた。——  
表面の極く何んでもなさにも不拘、たつたこれだけを見ても森本はうちにムクレ上がつてゐる、ム

クレ上がらせることの出来る力を充分に感ずることが出来た。

森本は毎朝工場へ出掛けて行く自分の氣持が、——今迄とは知らないうちに變つてきてゐるのを見つけた。寒い朝、肩を前にこめて、首をちよめて、ギョク／＼なる雪を踏んで家を出るときは、彼は文字通り奴隷である惨めさを感じた。朝のぬくもつてゐる床の中に、足をゆつくりのばして、もう一時間ぐう寝て居れないものか、と思つた。——朝が早いので、まだ細い雪道を同じ方向へ一列に、同じ生氣のない恰好をして歩いてゐる汚點のやうな労働者たちのくねつた長い列をみていると、(削除)その一列にはたゞ鎖が見えないだけだつた。陰気な凶人運動を思はせた。

だから彼は工場でも仕事には自分から氣を入れてやつた事がなかつた。彼はもつと出世して「社員」にならうと、一生懸命に働いたことがあつた。併しいくら働いても、社員にしてくれないで、彼は十頃からやけを起してゐた。殊に、そこでは人間が機械を使ふのではなくて、機械が何時でも人間をへばりつかせてゐた。人間様が機械にギョク／＼させられてたまるもんかい、彼はだらしなく、懐手をしてゐる方がましだと思つてゐた。——猫を何匹も飼つてゐる婆の顔がだんだん猫に似てくるが、それと同じやうに、今にお前達は機械に似てくるぞ、と森本はしゃべつて歩いた。工場の轟音のなかで話してゐる彼等は、金剛砥が鐵物に火花を散らすやうな聲でしかものが云へない。彼等の腰は機械

の据りのやうなねばりと適確さを持つてゐる。彼等の厚い無表情は、鐵のひや／＼やかな黒さに似てゐる。彼等の指の節々はたがねの堅さを持つてゐる。彼らはそして汽槌のやうな意志を持つてゐた。——この労働者の首ツ根にベルトがかゝれば、彼等は旋盤がシャフトを削り、ボール盤が穴を穿ち、セーパーやステキ盤が鐵を平面にけづり、ミリングが齒車を仕上げると同じそのまゝの力を出す。ハンドルを握つた労働者の何處から何處までが機械であり、何處から何處までが労働者か、それを見分けることは誰にも困難なことだつた。

そこでは、人間の動作を決定するものは人間自身ではない。コンヴェイヤー化されてゐる製罐部では彼等は一時間に何十回手先きを動かすか、機械の廻りを一日に何回、どういふ速度でどの範圍を歩くかといふことは、勝手ではない。機械の回転とコンヴェイヤーの速度がそれを無慈悲に決定する。

工場の中では「職工が」働いてゐると云つても、それはあまり人間らしく過ぎるし、當つてもゐない。——働いてゐるものは機械しかないのだ。コンヴェイヤーの側に立つてゐる女工がをこほしながらも機械の一部にはめ込まれてゐる「女工といふ部分品」は、そこから離れ得る筈がなかつた。

このまゝ行くと、労働者が機械に似てゆくだけではなしに、機械そのものになつて行く、森本にはさうとしか考へられない。「人造人間」はこんな考から出たのだらう。職工たちは「人造人間」の話

をみると、イヤがつた。——誰が機械になりたいものか。労働者はみんな人間になりたがつてゐるのだ。——

森本は自分たちの「仕事」をやるやうになり。色々なことが分つてくると、その工場が今更不思議な魅力を持つてきたのだ。——朝出るとき、今日は誰にしやうかを決める。その仲間の色々な性質や趣味や仕事から、どういふ方法で、どんな話から近付いて行つたらいいか、家へブラツと遊びに行つたらいいか……そんな事を考へながら家を出て行くと、自分の前や後を油で汚れたナツバ服を着て、急いでゐる労働者がどれも何時か自分達の「仲間」になる者達ばかりだと、思はれる。——それは今迄のジメ／＼と陰気な考へを、彼から捨てさせた。

彼は河田や石川の指導のもとに、班を二つに——男工と女工に分け、男工は彼が責任者になり女工の方はお君が當り、その代表者だけが「二階」で河田たちと連絡をとり、そこで重要な活動の方法を決定して行くことにきめた。

その各班では基礎的な直ぐ役立つ経済上や政治上の知識を得るために、小さい「集り」を持つこと

にされた。

その初めに、河田が中央の指導者の書いた短い文章を森本に読んできかせた。——それはある地方の一小都市にゐる同志に與へたその指導者の手紙の形をとつてゐた。

「……通信によれば、君は貴地で労働者の研究会を組織することに成功したと云ふではないか。僕はすつかり嬉しくなつてゐる。然かも××鐵工所の労働者が七名も参加してゐるとは何んと素晴らしいことだ。たしかに、その××鐵工所は貴地に於ける一番大きな工場だ。大したものだ。タツタ七名！誰がそんな輕蔑した言葉を發するのだ。若し我々が何千名といふ工場で、而も懷柔政策と彈壓とで金城鐵壁のやうな工場に、一人でもいゝ資本の搾取に反對して起たうとする労働者を友人とすることが出来たら、我々はもうそれだけで、その工場の半ばを獲得したも同様なのだ。——要は如何にして、その獲得へ到達するかである。我々の與へる政策が正しいなら、途は急速に開けて行くだらう……」

「で、その研究会だが、君は九人の労働者を物識りに仕立てやうとしてゐるのではないだらう。若しさうだとすれば、それは一應労働運動や社會運動やマルクスの經濟學を先づ理解させて、然る後組織し、闘争するといふあの有名な、陳腐な、そして何時でもシタ、カの失敗と精力の濫費を重ねて來たやうなやり方でなしに、——今、その地の労働者は、資本家に對して如何なる不平を持つてゐるか。

殊にX×鐵工所の労働者の労働条件はどうか。現在持つてゐる労働者の不平をどんな要求に結びつけてX×をX×すべきか、といふ形で進めらるべきで、さうしたならばその集會は物議り研究會から、すつかり様子をかへてくる。現實に活きた興味をもつて活氣が起きてくるのだ。」

——僕等はもうその有名な失敗に足をふみ入れかけてゐるたんではないか。  
なほそれはもう少し續いてゐた。

「例へば、X×鐵工所に闘争激發のために、アヂテーションのピラ等を持ち込む場合、その七名の労働者を矢面に立てることは斷じて得策でない。それはまだ事の初まらない前に、我々の工場に於ける芽を敵のために刈り取られることを意味してゐるからである。かゝる仕事は當該工場の外部のものが擔當するのが最もよい。そして工場内の労働者はそのピラが工場内でどのやうな反響を起したか。何人の共鳴者があつたかを、その晩の研究會での報告者の役目をつとめる。で、今日の工場内の動搖に對して、次にはどういふ形で更にアヂテーションが與へられねばならぬか、新たに出來た工場内の共鳴者は逃がさず捕へて、どんな風に組織を進めてゆくか……等、集會は全く活氣を呈するに至らう……。」

——これは全く正しい。

と河田が云つた。

——危なかつたな。僕等もこの線に沿つて行かなければならない。

十五

ドンナ困難があらうと、何より先きに「工場新聞」が發行されなければならなかつた。プロレタリアの新聞は「宣傳、**運動**」の機關であるばかりでなく、同時に集合的な「組織者」の役目を持つてゐた。

工場新聞は工場内の労働者が自分で體得した日々の經驗、工場内の出來事、僞購的な政策等を分り易く、具體的に暴露して、それにマルクス主義的な解答を與へ、漸次彼等を階級意識に目覺めさせ**て行く**任務を持つてゐた。——だが、この新聞の持つ究極の意味は、それによつてプロレタリアの**覺**(X×X)の影響を深く工場の労働者大衆の中に浸透させ、やがてはXを工場の基礎の上に建設する目的をもつてゐた。河田の努力の本當の目的はこゝにあつた。然しそれはまだ、誰も知つてゐなかつた。

「H・S工場」の場合、工場新聞は謄寫版刷りで「H・Sニュース」として出すことにした。河田は

澤山の先輩の例で、自分のやうに離れた立場にゐるものが、その目当てとしてゐる工場の中の具體的な事實も知らずに、何時でも極まり文句の抽象的なことばかり書いて、それが工場の中の誰にも飽かされたことのあるのを知つてゐた。だが、彼は森本やお君と共同の知識を使つて作れるのだつた。河田は又、他の鐵工場、ゴム工場、印刷工場にも同じ計畫を進めてゐた。

「H・S ニュース」が出る。それは小型でもいゝ。労働者にむきほり讀まれ、そして愛され、親しまれるやうなものでなければならぬ。中に挿入されてある漫画や似顔繪は、労働者にニュースを取つて付き易いものにするだらう。工場長の似顔が素晴らしくそつくりだつたら、どうだらう、長いクドイ、ゴツ／＼した論文はやめやう。そんなものは労働者は讀まないから……、河田は自分の子供でも産まれるのを、拳のグリグリで數へるやうな喜びをもつて、そのニュースを空想することが出来た。

「H・S ニュース」の發行で、森本と工場の多くの職工たちの關係が、今迄のやうな漠然とした、弱い不十分なものでなくなるし、更に優れた「工場××」をそれ等のなかゝら見付け出すことも出来るやうになる。「ニュース」はその他にも大きな任務を持つてゐた。「H・S 會社」は會社の雜誌として、「キャン・クラブ」を定期に發行してゐた。それは何處の會社もさうであるやうに、編輯には一人の職工をも加へず、集つた原稿は社員だけで勝手に處理し、更に工場長が眼を通して、會社の利益に都

合の悪いものを除ける。かういふ御用新聞の持つ欺瞞的な記事、逆宣傳、ブルジョワ的な教化に對して、「H・S ニュース」は絶え間なく、抗争し、暴露し、それを逆に利用して「鼻をあかして」行かなければならなかつたのだ。

「キャン・クラブ」に投稿するには匿名でもいいので、表立つて云へないことをドシ、ドシ書いてく

らしかつた。  
——こんなことを考へてゐる職工が居るのかと思ふほど、凄いことを書いた原稿がくるんだ。

と編輯をしてゐる社員が云つてゐる。  
それがウツでないことは、河田も知つてゐた。Y港に×國軍艦が二十數隻入つたことがある。旗艦である「××」はその艦だけの「新聞」を持つてゐた。新聞はこんなに色々な場合に使はれる！その編輯をしてゐる士官が「原稿は餘るほど集まるが、いゝ原稿が無いんで——埋合せに大骨だ。」と云つてゐた。「兵卒ツて無茶なことを書くんでね。」

河田はそれを聞いたとき、思はず俺の眼がギロリと光つたよ、と石川に云つたことがあつた。  
——×國軍艦だぜ！喜んだなア、中には矢張り居るんだ！

「ニュース」はその「凄いこと」を書く奴を、その「無茶なこと」を書く奴を砂の中に交つてゐても



その中から鐵片を吸ひつける磁石のやうに吸ひつけなければならなかつた。

三ヶ月すると、女工で集會に出てくるのが四人になつた。男の方より一人しか少なくなかつた。お君と芳ちやんがその中心だつた。——「H・S ニュース」は、それで用心深く九枚しか刷られなかつた。「集り」で、女工たちちつとも退屈させないで、面白くやつてのける鈴木がみんなに喜ばれた。

——鈴木は最近馬鹿に積極的になつた。

と河田が云つた。それから、

——女がゐるからかな？

と笑つた。

仲間が一人増せば、ニュースは一枚だけ増刷りされた。集會にきてゐる職工たちから、「手渡し」で見當をつけた一人に渡された。——白蟻のやうに表面には出ずに、知らないうちに露臺骨をかみ崩してゐて、氣付いた時にはその巨大な家屋建築がそのまゝ倒壊してしまはなければならなくなる白蟻を、そのニュースは思はせた。

——これからの運動は、街へ出てピラを撒いたり、演説をしたりすることではないんだぞ。

河田は少し意識のついた若い職工が、チリ／＼し出すのを見ると、それを強調しなければならなかつた。

つた。

——これからニュースを五年續けてゆく根氣が絶対に必要なんだ。

「H・S ニュース」にはX×X雄と専務が握手をして、後手でこつそり職工の首を締めてゐる漫畫が出た。「狐會議」が開かれてゐる。大テーブルを圍んで、狐の似顔にされた工場長以下職長、社員が、職工に「馬の糞」の金を握らしてゐる。それが「工場委員會」だつた。「共濟會」の基金や「健保」の掛金が何處にどう、誰の利益のために流用されてゐるか。——香奘や出産見舞に職工が一々「禮狀」を書かせられて、食堂の入口に貼られるカラクリが嘲笑された……。

そのどれもが、會社を「Yのフォード」だと思つてゐた職工を驚かした。

十六

——嫌になるな、君、お君と河田が變なんだぜ。

集會の歸り、鈴木が不愉快けに云つた。森本はファイに足をとめた。——彼は前から、工場でもお君にキツスをしたといふものが二人もゐるのを知つてゐた。然し、それは如何にもあのお君らしく思はれ、不思議に氣にならなかつた。が、それが河田と！

思ふと、彼は足元が急にズシンと落ちこむ

のを感じた。

河田ッて、實にさういふところがルーズだ。

……。

然しさういふ鈴木が本當はお君を戀してゐた。彼は自分の「最後の葉」がお君だと思つてゐたのだ。彼はもう警察の金を二百圓近くも、ヅル／＼に使つてしまつてゐた。彼は自分の惨めさを忘れなければならなかつた。あせつた。然しそのもがきは彼を更につき落すことしかしなかつた。足がかりのない泥沼だつた。——そして、今、彼は最後のお君までも失つてしまつた。何んのために、自分は「集會」であんなに一生懸命になつたのだ！——かうなつて彼は始めて自分の道が今度こそ本當に何處へ向いてゐるかを、マザ／＼と感じた。夜、盗汗をかいたり、恐ろしい夢を見るやうになつた。

四五日してからだつた。

——芳ちやんが、とても誰かに參つちまつてるのよ。

とお君はいたづら／＼しく笑つた。

——そしてクヨ／＼想ひ惱んでゐるの。それアおかしいのよ。で、私云つてやつたの。あんた一體、

「お嬢さん」かつて。月を見ては何んとか思ひ、花をみて……はなんて、お嬢さんのすること。思つてることをテキパキと云つて、テキパキと片づけてしまひなさいつて、ね。

——君ちやんらしいな！

と森本は淋しく笑つた。

——そんなことで、仕事がおかしくなつたら大變でせう。私その人に云つてあけるから……キツスして貰ひたかつたら、キツスして貰はうし……そしたら仕事にも張り合ひが出来るんでないの、と云つてやつた。そしたら、とてもそんな事、恥かしくツてと。——どう？

お君は遠慮のない大きな聲を出した。かういふ云ひ方が、みんな河田から來てゐるのではないかと、フト思ふと、彼は苦しかつた。

——恥しいなんて、芳ちやん何んだか、お嬢さん臭いとこあつてよ。

お君を男にすれば河田かも知れない、森本はその時思つた。——河田が若し戀愛をすれば、それは「仕事と同じ色の戀」をするだらうと皆冗談を云つた。それは彼が戀をしたつて、彼の感情の上にも、いはんや仕事の上にも少しの狂ひもすりも起らないだらうといふ意味だつた。

お芳の想つてゐる相手が誰か、お君は云はなかつた。

十七

その夏は暑かった。しかし秋は雨と氷雨が代り番に續いて、港街が荒さんだ。冬がくると、秋のあとをうけて、今度は天候がめづらしくよかつた。が、天氣が續けば、除雪の仕事もなくなつて、労働者は瘠せなければならぬ。

港の労働者の生活はその上、政府の緊縮政策のために、更にドン底に落ち込ませられた。——「親方制度」「歩合制度」の手工業的な搾取方法を昆布巻きのやうに背負込んでゐる労働者たちは、假りに港に出て稼げて、手取りは何重にも削り取られて、半分になつて入つてきた、歩合制度になつてゐながら、親方は「水揚高」「取扱高」の公表もせず、勝手にごまかして、そのゴマかした高の何割しかくれなかつた。金菱が石炭現場に積込機械を据ゑつけてから、バイスキを擔いでゐたゴモが五十人も一かたまりに失業した。

女房たちは家の中にチツとして居れなくなつた。然しボカンと爐邊に坐つてゐれば、坐つたきりで

一日中さうしてゐた。呆けたやうになつてゐた。何も考へてゐなかつた。——臺所に立つて行く。然し臺所に行けば、何んのために立つて行つたのか、忘れてゐた。一所にゐることが出来ない。何か心の底で始終せき立てられてゐた。——女房たちは、夫の稼いでゐる運河のある港通りへ出てきた。日暮れまでゐて、歸りに女房たちは親方へ寄つた。幾らでも貸して貰ひたかつた。

笑談ぢやない!

受付から親方が顔を出した。

——この不景氣をみてくれ、こつちが第一喰へないんだ。

さう云はれても、女房たちは受付の手すりに眩をかけたきり、だまつてゐた。歸ることを忘れてゐた……。

「H・S工場」の窓から、激んだ運河を越して、その群れが見えた。——演が騒がしくなつた。

「Y労働組合」はそれ等の間を縫つて活動してゐた。×××ストライキが起るのは、たゞ「×××」だけあればよかつた。組合はそれに備へる充分の連絡と組織網を作つて置かなければならなかつた。

「工場代表會議」が緊急に開かれた。それはこの場合二つの意味をもつてゐた。——運輸労働者は一齊に騒起したとしても、Y市の「工場労働者」がその闘争の外に立つことは、他の何處の市でもさう

であるやうに分りきつてゐた。それをこの「工代」の力によつて、全市のストライキに迄發展させなければならなかつた。一つは「H・S工場」の最近の動搖についてであつた。

四つの鐵工場から六人、三つの印刷工場から三人、二つのゴム工場から四人集つた。それは各々背後にその工場の何十人かの意見を代表してゐた。

その中に、森本が見習工のとき廻つて歩いてゐた鐵工所の仲間が二人もゐた。

——やつぱり俺達はな……！

と云つて、お互ひに笑つた。

「工代」をこの位のものにするのに、河田たちは半年以上ものチミな努力をしてきてゐた。——で、「H・S會社」は戦々競々としてゐた。社員も職工も仕事を手につかなかつた。——それは三田銀行が日本の一流銀行である金菱銀行に合同されることから起つた。政府は金融機關の全國的統制——その集中をはかつてゐた。この合同もそれだつた。銀行はますます巨大な、數の少ないものに纏められて行つてゐる。で、今までの「H・S會社」に對する三田銀行の支配權は、當然金菱銀行にそのまま移つて行つた。

ところが、金菱銀行は自分の支配下に「N・S製鐵會社」「T・S製鐵會社」この二つの會社を持つ

てゐた。然し今まで製鐵業では、金菱系の會社は何時でも「H・S會社」に壓倒されてゐた。だから今「H・S」が一緒になれば、日本に於ける製鐵業を完全に獨占出来るのだつた。——その製品を全國的に「單一化」して生産能率を擧げることも、技術や工場設備の共通的な改良整理も出来、人員の節約をし、殊にその販賣の方面では、今迄無駄に惹き起された價格の低下を防いで、獨占價格を制定し思ふ存分の利潤をあけることも出来るのだつた。——だから、三田銀行が今迄とつてゐたやうな、「單純な支配」ではなしに、金菱が積極的に事業そのものの中に、ドカ／＼と干渉してくることは分りきつてゐた。これは職工たちの恐れてゐた「産業の合理化」が直接に、そして極めて慘酷に實行されることを意味してゐた、工場はその噂さでザワめいてゐた。

然し問題はもつと複雑だつた。

——今度のことは、君、専務や支配人、工場長こいつ等の方が蒼白になつてゐるんだぜ。

と、引繼のために新しい銀行に提出する書類の作成で、事務所に残つて毎日夜業をやらせられてゐる笠原が云つた。

——金菱では自分の系統から重役や重だつた役員を連れてきて、あいつ等を追つ拂ふ積りらしいんだ。然しあゝなると、あいつ等も案外モロイもんだ。——然し問題は面白くなるよ。死物狂ひで何か

劃策してゐるらしい。

然し何時でも側にゐる笠原には、大體その見當がついてゐた。——彼等は、金菱の悪ラツな進出が如何に全工場の「親愛なる」職工を犠牲にし、その生活を低下させ、「Yのフォード」を一躍「Yの監獄部屋」にまで蹴落してしまふものであるか、と煽動し、全従業員の一致的行動によつて、没落に傾いてゐる自分達の地位を守らうとでもするらしかつた。

——どうも一寸ひツかゝりさうだな。

と笠原が云つた。

——然し金菱にかゝつたら、いくら専務がチタバタしやうが、桁から云つたつて角力にならない。これからは「金融資本家」と結びついてゐない「産業資本家」はドシ／＼没落してゆくんだ。度々あるいゝ手本だよ。さう云へば「辰鈴木だつて、手はこれと同じ手を食らはされたんだ。金融資本制覇の一つの過程だな。

そればかりでなく、「H・S」の製罐数の大部分は親會社である「日露會社」に賣込まれて、カムチヤツカに出てゐた。それで、一方にはソヴェート・ロシアの「五ヶ年計畫」の進出、他方には國內資本家間の無駄な競争に何時でもおびやかされてゐた。漁區落札數の増減はテキ面に生産高にひゞい

た。——「H・S」はそれに設へるために、政府を動かして、國民一般の愛國心とソヴェート・ロシアに對する××心を煽り立てなければならなかつた。

今年は更にロシアが組織的に、色々な手段を借りて、わが優良漁區の蠶食をやるといふ確實な噂が立つていた。「日露」と「H・S」の株價は傾きかけた水のやうに暴落してゐた。

「H・S」のさういふ情勢に對しては、河田は「工場××」の積極的な活動、「ニュース」による曝露、××、新しい「××」の獲得は云ふまでもないとして、更にこの當面の「戦々競々」たる動搖をつかんで、職工が労働者としての自分の立場と利益を擁護するために、

「工場委員會」の自主化

の闘争を起すやうに努力しなければならぬ事を提議した。

労働者がどんな資本の「攻勢」にもグイと持ちこたへ得るためには、何より工場全部の労働者が、「足並」を揃へることだつた。職場、々々で態度がチグハグなために、減茶々々にされることはめづらしくないのだ。それは彼等が色々な問題について、工場の全部にわたつて充分に討議する「機關」を持つてゐないところから來てゐた。——その機關として、自主的な工場委員會が必要なのだ。今のところそれは工場長や、社員できめた役付職工や去勢された職工によつて、勝手にされてゐる。我々

はそれを労働者の利益のための機關として、労働者によつて組織されることを要求しなければならぬ。——それが可決されて、時期、方法その他の具體案が長い時間かゝつて、慎重に練られた。

それから他の代表者の情勢報告があつた。

運輸労働者のストライキには、そのかゝける「要求」の中に、必ず工場労働者をも動かし得るやうな「條項」を入れることそれには、工場××が全力をあげて、それと工場獨特の問題と結びつけて、宣傳、××をまき起すこと等が決議された。

終ると、河田は仰向けに後へひっくりかへつた。

——これで俺三日ばかり碌に寝てないんだ。

河田は特に××の追及をうけてゐた。轉々と居場所をかへて、逃げまはつてゐた。そしてその先きぐで連絡をとつて、組合や森本たちを指導してゐた。然し二十萬に足りない小さい市では、それは殆んど不可能なほど危険なことだつた。

十八

會台が終ると、外へは一人づつ別々に出た。賑やかな通りをはづれて、T町の入口に來た頃、森本

の後から誰か、すいと追ひついて、肩をならべた。オヤツと思ふとそれが河田だつた。

——一寸これからT町へ用事があるんだ。

森本はその時フト變な豫感を持つた。——河田はお君のところへ行くのではないか。

河田は一緒に歩きながら、自分たちの運動のことを熱心な調子で話し出した。河田のその熱心な調子は何時でもさうだが、獨斷的なガムシヤラなところを持つてゐた。それは初めての人に、無意識な反感さへ持たせた。然し森本はその調子を河田から聞いてゐるときは、何時でも自分のしてゐることに、不思議な「安心」を覺えた。彼は力と云つていゝものさへ、そこから感ずることが出來た。

——君はこの仕事に獻身的になれるかい。

ときいた。森本は、なれるさ、と答へた。

——獻身的の意味だが……。

河田はさう云つて、一寸考へこんで間をおいた。——人通りはまだあつた。自動車のヘッドライトが時々河田の顔を半分だけ切つて——カーヴを曲がつて行つた。

——獻身的と云つても、一生を捧げるといふ位の氣だな。と云つた。

足元で春に近いザラメのやうな雪がサラツ、サラツとなつた。

——勿論俺たちの仕事は遊び半分には出来ることでもないし、それに俺たちのやうなものが、後から後からと何度も出て来て、折り重なつて、やうやくものになるといふやうなものだから、分りきつた事だが……。

森本は今更あらたまつた云ひ方だ、と思つた。

——「ニュース」だつて半年のうちに、とにかくこの位になつたといふ事は、一糸亂れない「組織」の力だつたと思ふんだ。——でねえ、俺たちの目的だ、××××××の××を××るといふことだ。そのためには鐵のやうな「組織」とそれを動かす、死守して行く所謂その獻身的な同志の力が要るわけだ……。

又そこで河田らしくなく言葉を切つた。

——分るな？

——分つてるよ。變だな、今更……。

彼がさう云ふと、河田は口の中だけで「ムフ」と笑つたやうだつた。

——その鐵のやうな組織といふのは、工場××を通して工場労働者にしつかりと基礎を置き、労働

者の最先端に立つて闘ふ政黨といふことになる。——で、労働者の黨と云へば、それは「×××」しかないわけだらう。

然しそんなことも森本は飽きる程きかされてゐたことだつた。だから彼は「それアさうだ。」と云つた。

——鍋焼でも喰ひたいな。

河田が立ち止つて、その邊を見廻はした。すこし行くと、小さい處が眼についた。二人はそこで鍋焼を食つた。——河田は森本の家の事情や、収入や係累のことを聞きながら、自分のことを話し出した。

かういふ運動をやるやうになつた動機とか、スパイ三人を向うにまはして、×のパイプを持つて×××をやつたことがある話とか、どん底の生活をしてゐる可哀相な女が時々金を自分に送つてきてくれる。それが自分のたつた一人の女だとか、自家では然し母が彼のことを心に病んで、身體を悪くしてゐるとか、そんなことを話した。彼は「お前にだけ親があると云ふのか。」といふ詩を讀んできかせた。それは聞いてゐると、胸をしめつけた。——何時でも冷やかに動いたことのない彼の瞳が、その詩を云ひ終ると潤んでゐた。森本はかういふ河田を初めてみたと思つた。仕事をしてゐる河田は一分

もさういふ彼を誰にも見せたことがなかつたのだ。

——工場はまだ大丈夫かい。

と河田がきいた。彼は何時でも森本の「顔」のことを心配してゐた。

——少オしは。長い間だから。

——ん。少オしでも悪いな。

——会社の笠原さんの話だと、最近バカに工場長のところへ警察の高等係がきて、何か話してゐるさうだ。

鍋焼の熱いテンブラを舌の上で、あちこちやつてゐた河田が、眉毛を急にビクツと動かした。

工場長が時々顔の知らない人をつれて、工場のなかを案内して歩くけれども、ひよつとすると、そ

れが高等係かも知れない。それに君ちやんの話だと、職工のなかには皆の動きを一々報告してゐる、会社に買収された奴があるさうだ。佐伯たちの××と知らないで、鉢合せでもしたら事だからな！

——……!? 注意しなければならぬな。

——「ニュース」は矢張り分つてゐるんだ。参つてゐるらしい。何處で作つて、どんな経路で入つてくるかを躍氣になつてゐるらしい。

——フン！

「ニュース」は初め厳密に手渡しされてゐた。然し、××の根が廣まり、それが可なりしつかりしたものになつてくると、それを工場内の眼のつく所にワザと捨て、置いたり、小規模だが、バラ撒いたりするやうになつてゐた。

——組合のものが作つてゐるんだつて、工場長は云つてゐる。「ニュース」の No16 かに、専務の一年間の精細な収入と家庭生活と一年間の藝者の線香代と妾のことを載せたアレ、とても人氣を呼んで、とうとうグル／＼廻つてしまつた。あれで、女工のうちでは、これが本當なら、専務さんの「ナツパ服」に今迄だまされてゐたつて、泣いた奴が澤山ゐるさうだ。嘘のやうな話だけど——

二人は聲を出して笑つた。

——何んしろ細大洩さずだから、彼奴等も浮かぶ瀬が無いだらう。

外は人通りがまばらになつてゐた。二人は用心して歩いた。

森本の家の近くの坂に來たとき、河田が内ポケットから新聞の包みを出した。

——これ明日まで読んでおいてくれ。そして読んでしまつたら、すぐ焼いてくれ。

森本はそれを受取つた。



「ちや、明日九時頃君のところへ行くから、家にゐてくれ。さう云つて、河田が暗い小路を曲がつて行つた。彼はその足音を聞いて立つてゐた。次の日、森本は河田から「×××」××××××をうけた。」

第十九章

「H・S工場」の××が毎日日々々々集合した。手落ちのないやうに、細かい方法がそこで決められた。河田も顔を出した。

ピラの形で撒かれる大衆的なニュースが、本當に生きた働きをするためには、その「時期」が絶對に選ばねなければならなかつた。工場委員会が開かれる少し前であつて、それが同時に「金菱」の整理断行が確定した日でなければならなかつた。

ピラを撒いてからの第二段、第三段の××、従業員大會開催の件などが、決議された。

こん度は、専務の方からも職工を利用しようとしてゐた。普通のストライキと異つてゐた。専務は没落しかけてゐる。だから、××の相手は専務や工場長ではなかつた。この大きな「動搖」をつかんで、職工の結束の機關を獲得することにあつた。然し、専務たちのもくろんでゐることも、職工を結

束させるといふ點では、その形態は同じだつた。——この同じ一點に向つてゐる丁度逆の二の力がどのやうにもつれ合ふか？

ピラは大體次のやうな骨組を持つた。

- 1 工場長が天下りの工場委員をきめるのでは何んになる。われわれは全職工の選挙によつて、全委員をきめることを要求する。
- 2 今迄提出する議案は工場長が一應眼を通して、差支へのないものばかり出してゐた。こんなべら棒なことがあつてなるものか。労働者の本當の日常利害の問題をドシ／＼出すこと。
- 3 委員長には工場長が勝手になつてゐた。これでは職工の利益になる事項が議決されるわけがない、委員長は全委員の互選できめること。
- 4 委員会で決めたことでも、決めつ放しのものがあるし、又工場内の大切な規約を改正する場合などは一度だつて委員会に出したことがなく、専務や工場長だけで勝手に決めてしまふ。結局どうでもいふことだけ委員会に出す。これでは委員会は看板より劣る。我々はこんなゴマカシに全部反對だ。

- 5 女工も働いてゐる工場であるからには、女工からも委員を選ぶこと。
- 6 「金菱」の惨酷な整理、労働者の虐使と首切にそなへるたつた一つの力は、この工場委員会の自主化を握つて、足並をそろへ、全職工が結束することを措いて他にないこと。
- 7 専務らが自分の地位にしがみついたために策動するかも知れない。それに乘せられてはならないこと。
- 8 市内のゴム會社、印刷會社、鐵工所も同じ問題をひツさけて、立ちかけてゐる。「H・S」の同志に握手を求めてゐること。
- 9 濱の大夫の窮状はもはや對岸の火事ではない。同じ運命がわれ／＼にも待ちかまへてゐる。彼等とも我々は手を握つて、共に立たなければならぬこと………等々。

色々なところから出る噂さや、臆測がグル／＼廻はつてゐるうちに、雪だるまのやうに大きくなつた。それが職工たちを無遠慮に掻き廻はした。皆は落付くことを忘れてしまつた。休憩時間を持ちかまへて、皆が寄り集つた。職長さへその仲間に首を差しこんできた。

何時でもこつそり工場長に色々な小道具を造つてやつてゐた仕上場の職工などは、今度は露骨に悪

口をたゞきつけられた。職工は工場で自分のものを作ることは愚か、鐵屑、ブリキ片一つ持ち出しても首だつたのだ。

— 又新しい工場長にもか？ ハ、ハ、ハ、精々どうぞね！

上役にうまく取入つて威張つてゐたもの等が、ガラ／＼とその位置を顛倒して行つた。支へ柱を一且失ふと、彼等は見事に皆の仲間外れを食つた。

— さまア見ろ！

皆は大ツびらに、唾をハネ飛ばした。

そんな關係を持つてゐる職長などは顔色をなくして、周章てゐた。が、早くも彼等は、職工の大會を開いて、對策を講じなければならぬと云つた。佐伯たちがその先頭に立つた。「H・S 危急存亡の秋、諸君の躍起を望む！」と、愛社心を煽つて歩いた。——彼等はそんなときだけ、職工をだしに使ふことを考へた。

晝休みに女工たちは、男工の話し込んでゐる所をウロ／＼した。

— どうなるの？

ときいた。

——男も女も半分首だどよ！  
男工がヤケにどなつた。

二十

ピラは深い用意から、女工の手によつて工場に持ち込まれた。夜業準備のために、女工たちの歸へりが遅くなつたとき、「脱衣室」の上衣に一枚々々つままれた。十人近くの女工がそのために手早く立ち働いた。

朝、森本が工場の入口で「タイム・レコーダー」を押してゐると、パンパン帽をかぶつた仕上場の職長が、

——大變だぜ！

と云つた。

——大變なピラだ。「ニュース」と同じ系統だ。

——へえ。

——今度は全部配られてるんだ。何處から入るんかな、こゝの工場も小生意氣になつたもんだ。

職長は鶴見あたりの工場から流れて来た「渡り職工」だつた。皆を「田舎職工」に何が分ると、鼻あしらひしてゐた。ストライキになつたら、専務より先きに、この職長を、、、、としてやるんだ、と仕上場では云つてゐた。——「フン、今に見ろ！」森本は心の中でニツと笑つた。

工場の中は、いよく朝刊に出た金菱の態度と、ピラの記事でザワついてゐた。一足ふみ入れて、それを感じると、森本はしめたと思つた。仕事の始まる少し前の時間を、皆は機械のそばに一かたまり一かたまりに寄つてピラのことをしやべつてゐる。

——かうなつたら、これが矢張り第一の問題さ。

森本は集りの輪の外へとんでくるそんな言葉をつかんだ。

製罐部に顔を出すと、トップ・ラインにゐたお君が、素早く見付けて、こつちへ歩いてきた。何氣ない様子で、

——大丈夫よ、委員会は選挙制にするのが理窟だつて云つてゐるわ。

あんたの方の爺爺、あの禿の頑固！ あいつ奴だけが皆からピラをふんだくつて歩いてゐるのよ。それだけ云つて、男のやうに走つて行つた。

アナアキストの武林が鑪線曲機に油を差してゐた。ひよいこ上眼に見て、

——お前だな。

と云つた。  
——何んだ、皆かうやつて興奮してゐるのに、お前だけ工場長にでもなつたやうに、ツウーンとしてゐるんだな。

森本はギョツとして、キツ先を外した。

——指導精神が違ひますだ。

——さうか。自分だけは喰はなくてもいゝツツて指導精神か。結構だな。

——そ。正にさう。

森本は製罐部で見て置かなければならなかつたのは、肉親關係をお互ひに持つてゐる職工たちの動きだつた。それはお君や、この方の××にも殊更に注意して置いた。然しまだそれは見えてゐなかつた。

たゞ心配なことは、工場全體の動きを早くも見てとつて、工場長が「H・S」全體に利害を持つことだからと、「工場大會」か何かの形で「先手」を打つて來ないか、といふことだつた。——工場内の

動きのうちには、ハッキリ分ることだが、自分たちの立場、階級的な氣持からではなくて、矢張り其處には「會社全體の大問題」だといふ興奮のあることを見逃がすことが出来なかつた。乗ぜられ易い機微を、彼はそこに感じた。

鑪物場では車輪の砂型をとつてある側に、三四人立ち固まつてゐた。木型の大工も交つてゐた。すぐ下がつてくる水鼻を何度も何度もすゝり上げてゐた。

——誰か思ひきつて、グイと先頭に立つものが居なかつたら、かういふものは駄目なんだ。

云つてゐるのは増野だつた。——見習工のとき、彼は溶かした鐵のバケツを持つて、熔爐から砂型に走つて行く途中、足元に置き捨てゝあつた木型につまづいて、顔の半分を焼いた。そのあとがひどくカタを残してゐた。

——各職場から一人か二人づゝ出るんだな。

森本は彼を「××」の候補者にしてゐた。

鑪物場の職工は、どれも顔にひつちりをこしらへたり、手に繻帯をしてゐた。砂型に鐵を注ぎ込むとき、水分の急激な發散と、それと一緒に起る鐵の火花で皆やけどをしてゐた。

鍛冶場の耳の遠い北川爺は森本をみると。

——ピラの通りに何んか起るのか。どうしても、かういふ工合にしなければ駄目なもんかなア、森よ！

と云つた。

——さうだよ。さうなれば爺ちやだつて、安心ツてもんだ。

北川爺は耳が遠いので、彼を見ながら、頭をかしけて、あやふやな笑ひ顔を向けた。

打鉄の山上は、

——やると！

と云つた。彼は××の一人だつた。

——仕上場はどうだい？

腕を少し動かしても、上膊の筋肉がグル、グルツとこぶになつた、堅い身體を持つてゐた。

——それア何んてたつて本場さ。

——本場はよかつた。出し抜かれるなよ。

と笑つた。

——出し抜かれて見たいもんだ。

熟練工のゐる仕上場は「金菱」のことで、直接にさうこたえるわけではなかつたが、製罐部のやうに直ぐ代りを入れることの出来ない強味をもつてゐたし、何より森本を初め「××」の中心がこゝにあつたので、しつかりしてゐた。

ボールパンに白墨で圓を描いてゐた仲間が森本をちらツと見ると、眼が笑つた。白墨の粉のついた手をナツバの尻にぬぐつて、

——「紙」は？

と、訊いた。

——朝すぐ。先手を打つ必要がある。

旋盤や平盤や穿削機についてゐる仲間が、笑ひをニヤ／＼含んだ顔でこつちを見てゐた。機械に片足をかけて「金菱政策」を泡をとばして話してゐた。穿削機には昨日から齒を削つてゐた齒車が据ゑつけられたまゝになつてゐた。

大乗盤の側の空所に、註文の齒車やシャフトや鉄付する煙筒や鐵板が積さつてゐた。仕上つた機械の新鮮な赤ベンキの油ツ臭い匂ひがブン／＼鼻にきた。

就業のボーが波形の屋根を巾廣くひゞかせた。職長は二人位しか工場に姿を見せてゐない。事務所

に行つてゐるらしかった。——皆は何時ものやうに、ポーがなつても、直ぐ機械にかゝる気がしてゐなかつた。

ベルトがヒタ、ヒタ……と動き出すと、聲高にしやべつてゐた人達が、底からグン／＼と迫まるやうに高まつてくる音に溺れて行つた。シャフトにベルトをかけるのと、突然生物になつたやうに、機械は齒車と齒車を噛み合はせ、シリンダーで風を切つた。一定の間隔に空罐をのせたコンヴェイヤーが、映畫のフィルムのやうに機械と機械の間を這つて行つた。ブランクで大板のブリキをトロツコから移すたびに、その反射がキラツ、キラツと、天井と壁と機械の横顔を及物より鋭く射つた。トップ・ラインの女工たちが、蓋を揃へたり、數へたりしながら何か歌つてゐる聲が、どうかした機械の轟音のひげ間に聞えた。——天井の鐵梁が機械の力に抗えて、見えない程揺れた。

——あのニュースとかつて奴は×××の×××をしてゐるんだろ、な。  
職長が兩手を後にまはしながら。機械の間を歩いてゐた。

——さア。

きかれた職工は無愛想につつばねた。が、フト、ぎよツとした。——それは×××の一人だつた。「H・S ニュース」に漫畫が多かつたりすると、彼はよく糊付けにべつたり機械へはつたりした。

——後にはキツト×××があるんだ。どうもさうだ。

——然しあんなものが×××なら、×××ツてももの極く×××のことしか云はないもんだね。

——だから恐ろしいんだよ。

彼は笑つてしまつた。

——だから何んでもないツて云ふのが本當でせうや。

仕事が始まつてから二十分もした。——働いてゐた職工が後から背を小突かれた。

——何ツ處かゝら廻つてきた。

紙ツ切れをポケットの中にソツと入れられた。いゝことには、職長が二人位しかゐるないことだつた。

「工場委員会」の選挙制協議のため時間後一人残らず食堂へ集合の事。  
危機は迫つてゐる。團結の力を以つて我等を守らう。

——次へ廻はしてやるんださうだ。變な奴には廻はさないさうだど。

——ホ！ 矢張りな。

同じ時に、それと同じ紙片が「仕事場」にも「鑄物場」にも、「ボディ・ライン」にも、「トップ・ライン」にも、「塗装工場」にも、「釘付工場」にも、「函詰部」にも同じ方法で廻つてゐた。

職長たちが話しながら、ゾロ／＼事務所から歸つてきた。機械についてゐた職長がそれを見ると、周章てゝ走つて行つた。彼は工場の隅で立話を初めた。職工たちは仕事をしながらそれを、横目でにらんだ。

仕上場の見張りの硝子戸の中から、「グリーン」職長が周章てゝ飛び出してきた。——金剛砥に金物をあてゝゐた齋藤が、その直ぐ横の旋盤についてゐた職工から、何か紙片を受取つて、それをポケットに入れた。それをひよつと見たからだつた。神経が尖がつてゐた。——皆は何が起つたかと、思つた。その「渡り職」の後を一齊に右向けをしたやうに見た。

——おいッ！

大きな手が齋藤の肩をつかんだ。然し振返つた齋藤は落付いてゐた。

——何んですか？

ゆつくり云ひながら、片手は素早くポケットの紙片をもみくしやにして、靴の底で踏みちつてゐた。

——あ、あッ、あッ、その紙だ！

職長がせきこんだ。

——紙。

砂地の床は水でしめつてゐた。齋藤は靴の先きで、紙片をいちりながら、

——どうしたんです？

——どうした？ 太え野郎だ。

然しそれ以上職長にはどうにも出来なかつた。「うらめし」さうに踏みにぢられた紙片を見ながら、

——この野郎、とう／＼誤魔化しやがつた！ 畜生め！

と云つた。

機械から手を離して見てゐた職工たちは、ざまア見やがれと、思つた。

——グリーンに吊されるのも、もう少しだぞ。

職長は目論見外れから工台悪さうに、手を振つて歸つて行つた。職工たちの眼はそれを四方から思

ふ存分嘲けた。

——パーカーヤロー。

ステキ盤でシャフトに軌道をほつてゐた仲間が、口を掌で圍んで、後から悪戯した。皆がドツと笑つた。職長がくるりと振りかへつて、職場を見廻はした。急に皆が眞面目な顔をして、機械をいちる眞似をした。我慢が出来なくて、誰か隅の方で、ブウツと吹き出してしまつた。

——いまく〜しい奴だ！

硝子戸を亂暴に開けて、中へ入つた。

——自分の首でも氣をつけろ、馬鹿！

晝休みには、森本と重な仲間が四人同じ所に坐つて、もう一度綿密に考へを練つた。

——女の方はどうかかな。

——戦術としてもな。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

——さうだよ。

お君は餘程離れた向う隅で、仲間に向かひ一生懸命しやべつてゐるのが見えた。顔全部を自由に、大けさに動かしながら、ロ一杯でものを云つてゐる。お君がそこにすつかり出でた。——森本はその

女に自分の氣持をチツトモ云へないことを、フト淋しく思つた。飯が終る頃、お君が食器を持つたまゝ皆のゐる所を通つた。

——どうだ？

——四分の一位。別に反對の人はないのよ。それでも女は一度も出つけないでせう。

——うん。

——でも、頑ん張つてみる。

——頼む。

——森さん、今日は「首」を投げてやつてよ。首になつたら、皆で養つてあげるから。

お君は明るく笑つて、スタンドへ行つた。

——それから「偉い方」はどうかかな。

と森本が仲間いきいた。

——事務所ではまだ勿論「工場大會」のことには氣付いてはゐないんだが、對策はやつてゐるだらう。——給仕が云つてた。自動車で専務がやつてきたつて。工場長が電話で呼んだらしい。ところが専務は氣もでんぐり返へして、馳け廻つてゐるんだ。まだ〜工場どころでないらしいんだ。——こゝ



は俺達のつけ目さ。

脱衣場は集合場になる「食堂」と隣り合つて、二階になつてゐる。そして降り口は一つしかなかつた。——で、歸るのにはどうしても二階に行つて、食堂を通り、服を着かへて、その階段を又降りて來なければならぬ。それが偶然にも森本たちに、この上もない有利な條件を與へた。食堂の會合に出なければ、どうしても歸ることが出來ないやうになつてゐた。——普段から職工仲間信用のある「××」を階段の降り口に立たせて置いて、職工を引きとめた。

不賛成な職工や女工はしばらく下の工場で、機械のそばや隅の方を文句を云ひながら、ブラ／＼してゐた。歸るにも歸れなかつたのだ。年老つた職工や女房のゐるのが多かつた。女工たちは所々に一かたまりになつて、たゞ立つてゐた。女の方は別な理由はなかつた。何んだか工合わるく、それに生意氣に感じて躊躇してゐるらしかつた。

——ストライキの相談ぢやないんだよ。委員を選擧にして下さい。これだけの事なんだよ。森本がそれを云つて歩くと、それだけの事なら、もつと穩やかな話し様もあるんでないかと云つた。

——何處にか穩やかでない處でもあるかな。会社と一喧嘩をするわけでもないし、お願ひなんだ。女工はお君やお芳に説かれると、五六人が身體を打ツつけ合ふやうに一固りにして、階段を上がった。

職長たちは事が起ると見ると、事務所の方へひき上げてゐたので、一人も邪魔にならなかつた。食堂には思ひがけず、三分の二以上の職工が押しつまつた。然しその殆んどが、「會社存亡の問題」といふ考へから集まつてゐた。それは誤算をすると、飛んでもないことだつた。さうでなかつたらこのフォードの職工がこれだけ集まる筈がなかつた。然しそれをさかさす捉へて、強力な××を使つて、その方向を引き寄せて來なければならなかつた。——

その時。薄暗い工場の中を影が突ツきつて來た。工場の要所々に立て、置いた見張だつた。

——森君、佐伯あいつ等が盛んに何んか材料倉庫で相談してゐるよ。それも柔道着一枚で！

——佐伯！

森本の顔がサツと變つた。——暴力で打ツ壊しに來る！それが森本の頭に來た。彼はそんなことになれてゐなかつた

——よし、ちや仕上場の若手に、こゝに立つて貰はう。——そして愚圖々々しないで始めること

森本は階段を上つた。五百人近くの職工のこもつたどよめきが、足踏みや椅子をちらす音と一しよになり、重い壓力のやうに押しつぶされて来た。手筈をきめて置いた激動の演説がそれを太くつらぬいた。離れてみると、その一つ一つの言葉が餘韻を引きずるやうに、ハツキリ職工たちをとらへてゐる。潮なりに似た群集の勢ひが——どよめきが分つた。それによつて、何より會社主義で集つてゐる職工たちを、その演説で引きつり込まなければならぬのだ。——彼は嘗つて覺えたことのない血の激しい流れを感じた。これからやつてのけなければならぬ、大きな任務を考へると、彼はガタ／＼と身體がふるえ出した。グイと後首筋に力を入れ、頸をひいてもとまらなかつた。彼は内心あやふやな恐怖さへ感じてゐた。こんな時に、河田が側にくれたら、たゞりてだけくれても、彼は押し強くやれるのだが、と思つた。

知つた顔が振り返つて、笑つた。——しつかりやつてくれ、笑顔がさう云つてゐた。

食堂の中はスチームの熱氣と人いきれで、ムンとむれ返つてゐた。油臭いナツバ服が肩と肩、顔と顔をならべ、腰をかけたたり、立つたり——それが或ひは腕を胸に組み、頬杖をし、演説するものゝにらんでゐた。彼等はそして自分たちでも知らずに、職場別に一かたまりづゝ固まつてゐた。アナーキ

ストの武林の仲間、一番後に不貞腐された圖太い恰好で、板壁に倚りかゝつてゐた。左寄りの女工たちは、皆の視線を受けてゐることを意識して、ぎこちなく水たまりのやうに固まつてゐた。今迄の會社のどんな「集會」にも、女工だけは除外してゐた。女たちは今、その初めてのこゝと、自分たちの引き上げられた地位に興奮してゐた。——壇には講物場の増野が立つてゐた。「俺は何故敵の半分が鬼になつたか」彼はそのことをしやべつてゐた。身體を振つて、ものを云ふ度に、赤くたゞれた顔がそのまゝ「鬼」になつて、歪んだ。——初め、みんなの中に私語が起つた。

——また、ひでえ顔をしてゐるもんだな！  
時々小さい笑ひ聲が交つた。然しそれ等がグイ／＼と増野の熱に抑へられて行つた。

——我々はこれだけの危険を「毎日の仕事」に賭けてゐる。こんな顔になつて、諸君は笑ふだらう。だが、可哀相な僕は顔だけでよかつたと思つてゐる。一日二圓にもならない金で、我々は「命」さへも安々と賭けなければならぬ。ブリキ罐をいちつてゐる製罐部の諸君に、私は何人指のない人間があるかを知つてゐる。——指の無い人間！それが製罐工場が日本一だといふことをきいてゐる。で、我々はそんな場合、會社の云ひなりしかどうにも出来ない。何故だ？ 我々是我々だけの職

工の利益を擁護してくれる機関を持つてゐないからではないか。——  
増野はもつと元氣づいて續けた。

——金菱がどうのとか、産業の合理化がどうのとか、山倒な理窟は知らない。たゞ我々のうちの半分  
以上も今首を——首を切られやうとして居り、賃銀は下がり、もつとギユウ、ギユウ働らかされるさ  
うだ。偉い人はもつとく、儲けなければならぬのださうだ。——  
彼はそこで水をのむコップを探がした。

——で……………。

水の入つたコップが無かつた。彼はそこで吃つてしまつた。カアツと興奮すると、彼は又同じこと  
を云つた。すると彼は何處までしやべつたか、見當を失つてしまつた。無数の顔が彼の前で、重つて  
ゆがんで、揺れた。それが何かを叫んでゐる。彼は仕方がなくなつてしまつた。彼は最後のことだけ  
を怒鳴つた。

——で、工場委員会です。彼奴等の勝手にされてゐた委員会を我々のものになければならない。  
その第一歩として、委員の選挙です。我々は全部結束いたしまして、この目的のために闘争されんこ  
とを、コヒ希ふものであります。——俺、何しやべつたかなア！

お終ひに獨言ともつかない事をくつつけた。それが皆にきこえたので、ドツと笑つた。

——よオツク分つたぞ！

ワザと誰かの手をたゝいた。

お君が森本の後に来てゐた。ソツと脊を突いた。お君は興奮してゐる時によくある片方の頬だけを  
眞赤にしてゐた。

——耳……………一寸。

——ん。

——あのね、芳ちゃんに出てもらふ事にしたの。

——芳ちゃん？

あの「漂泊の孤兒」がかい？ と思つた。何んでもものをズケ／＼云ふ河田に従ふと、お芳は「漂  
泊の孤兒」だつた。顔の膚がカサ／＼と艶がなく、何時でも寒さうな、肩の狭い女だつた。無口であ  
つたが、思慮のあることしか云はなかつた。お君がそばにゐると、日陰になつたやうに、その存在が  
負相になつた。

——え、眞面目な人は案外思ひきつたことをするものよ。私でもいゝはいゝけれども、私ならそん

な事を云ふかも知れない女だつてことが分つてるでせう。だから、さうひどく感動は與へないと思ふの。然し芳ちゃんなら、へえッ！ つて皆がね。——や××効果満点よ！ 無理矢理出さすの。お君はするさうに笑つた。しめつた赤い唇が、耳のすぐそばにあつた。次に誰が出るか、それをみんな待つた。然し人達は意外なものを見た。片隅から出て行つたのは、「女」ではないか、皆は急にナリをひそめた。——そして、それがあの「芳ちゃん」であることが分つたとき、抑へられた沈黙が、急に跳ねかへつた。ガヤ／＼とやかましくなつた。

——あの女が!!

芳ちゃんは壇の上へ、あやふやな足取りで登ると、仲間の女たちのゐる方へ少し横を向いて、きちんと両手をさけたまゝ、うつむいて立つた。——顔が蒼白だつた。

——これだけの男の前だぜ。あれで仲々すれつてるんだらう。横で、ラツカー工場の職工が云つてゐるのを、森本は耳に入れた。

芳ちゃんはそのままの恰好で、顔をあげずに云ひ出した。聞きとれないので、皆はしやべることをやめた。耳の後に掌をあてゝみんな、背延びをした。

——……こゝへ上るのに、どんなに覺悟が要るでせう……私は生意氣かも知れませんが……でも必死

です……誰が矢張り先に立つて生意氣にならなければ、私たちはどうなつて行きますか……。

——あの温しい芳公がな。

一句切れ、一句切れ毎に皆の言葉がはさまつた。

——ねえ、どう？

お君は云つた。

——しつかりしてる。

——私たち皆と仕事をするやうになつてから、自分でも分るほど變つてきたわ。

——……私たちは男からも、会社からも……何時でも特別待遇をうけてきました……

言葉が時々途切れた。

——女がかういふ所に出て、かうやつて話が出来るのは……この工場始まつて以來のことかと思ひ

ます……私たちも一人残らず一緒になり……お助けして行きたいと思つてゐます。皆さんも……どう

ぞ……。

芳ちゃんが降りると、ワァーッといふ聲と一緒に、拍手が起つた。それが何時迄も續いた。お君の云つた通り、男工たちに豫想以上の反響を與へた。

——矢張り、少し温し過ぎる。

とお君が云つた。

——芳ちゃんにしたら大出来だ。然し、よくやつてくれた。聞いてみると、かう涙が出て来るんだ。

——さうね。

お君は自分の眼をこすつた。

——さ、行つて、賞めてやらないと。

お君は女工たちの方へ走つて行つた。芳ちゃんは皆に取り巻かれてゐた。見ると、彼女は堪らえてゐた興奮から、自分でワツ！と泣き出してしまつてゐた。

——安心出来ないよ。廻つて歩くと、こゝに集つてゐるのは矢張り「會社存亡組」が多いんだ。

仲間の一人が森本に云つた。

——然し一旦かう集つてしまへば、一つの勢ひに掻き込まれて、案外大したことにならないかも知れない。

——然し、俺達も危ない機微をつかんで、成功したな。あとはしやに無理、こつちへ引きづること

だ。

次に各職場の代表者が一人づつ、壇に上つた。彼等は全部「××」だつた。一人々々が火のやうな言葉を投げつけた。「會社存亡の秋」を名として、全職工を賣らうとしてゐる彼奴等のからくりをそこで徹底的にさらけ出した。——と、職工たちのなかに、風の當つた森林のやうな動搖がザワ／＼と起つた。森本はハツとした。然しそれが代る代る立つ容赦のない暴露で、見る／＼別な一つのうねりのやうな動きに押され出した。

電燈がついた。薄暗がりの中に、たゞ灰一色に充滿してゐた職工たちが——その集團が——悍しい肩と肩が、瞬間にクツキリと躍り上つた。誰かど、

——そら、電燈がついたぞ！

と云つた。

その意味のない言葉は、然し皆の氣持ちを急にイキ／＼とさせた。

結末はアこの時ぞ。

突然四五人が足踏みをして歌ひ出した。パーを飲み歩いてゐる職工たちは、誰でもその歌位は知つてゐた。それが今少しの無理もなく口をついて出たのだ。皆が一齊にその方を見たので、彼等は少してれたやうに、次の歌が濃んだ。然し、太い揃はない聲が続いた。

卑怯者去らばア去れエ。

森本が壇に上つたのは一番後だった。彼は何も云ふ必要がなかつた。たゞ用意してゐた「決議文」と「要求書」の内容を説明して、皆の承諾を得ればよかつたのだ。これ等のあらゆる細かい處に、河田たちの用意が含まつてゐた。

彼がまた云ひ終らないうちだった。激しい云ひ争ひが下の階段に起つた。——職工たちは一度に腰掛けを蹴つた。一つの勢ひを持つた集團の彼等は、そのまゝ狭い入口に押しつゝゐた。

——邪魔するに入つた奴なら、やつつけつちまへ！

その時、抑へられたやうに、下の争ひがとまつた。と、見張りの一人が、周章てゝ駆けあがつてきた。

——佐伯の連中が上がるつて云ふんだ。それで一もみしてるところへ、専務や工場長や職長が來たんだ。どうする？

——よし！

森本はキツパリ云つた。

——専務と工場長だけ上やう。職長や佐伯の連中は絶対に上げないことだ。

——さうだ。異議なし！

一舉に押し切るか、一舉に押しきられるか、そこへ來てゐる！

工場長が先に立つて、専務が上つてきた。工場長は興奮した唇に力をこめて、キリツとめてゐた。然し専務の顔には柔和なほゝゑみが浮かんでゐた。職工や代表者たちに丁寧な挨拶した。何時も温かな専務だった。女工と男工の一部が、さすがに動いた。——専務の持つてきた腹を讀んでゐる森本は、先手を打つて出なければならぬことを直感した。この動きかけてゐる動き、先手！ 一つで、この勝負がきまると彼は思つてゐる。専務にたつた一言先きにしゃべられることは、この集會をまんまと持つて行かれることを、意味してゐた。——

彼は全職工の前で、ハッキリと、今迄の経過を述べ、一人も残らない賛成をもつて「工場委員会」

の委員選挙制が決議されたことを報告し、「決議文」と「要求書」を提出した。その瞬間、Xの先頭で、一齊に拍手がされた。計画的なことだった。五百人の拍手が、少し亂れて、それに續いた。森本はハラ／＼した。然し拍手は天井の低いトタン屋根を、硝子窓をゆるがし、響きかへつた。その餘韻はそれ等の中に入つてたつた一人しか味方を持つてゐない専務の小柄な身體を木ツ葉のやうに頼りなくした。

専務は明かに周章してゐた「要求書」を手にもつた専務はそれを持つたまま、自分が今どうすればいゝかを忘れたやうに、あやふやな様子をした。——實は、彼はこの食堂に入るまで一つの明るい期待を持つてゐたのだつた。自分が今迄長い間、職工たちに與へてきた「Yのフード」としての、過分な温情はさう安々と崩されるものでない。それを信じてゐた。たとへ、小部分の「忘恩な」煽動者たちに幾分いゝ加減にされてゐても、この自分さへ其處へ姿をあらはせば、職工の全部は「忽ち」自分のもとに雪崩を打つてくるのは分りきつたことだ、と。——然し、それがこんなに惨めになるとは本當だらうか？　そして一齊の拍手！　専務は何よりこの裏切られた自分自身の氣持に打らのめされてしまつた。それにもつと悪いことには、専務は問題を兩方から受けてゐた。一方には、自分自身の地位について！　これは充分に専務を氣弱にさせてゐた「金融資本家」に完全に牛耳られて、没落しな

ければならない「産業資本家」の悲哀が、彼の骨を嚙んでゐた。そればかりか、今年ロシアが蟹工船の漁夫供給問題の復仇として、更にカムチャツカの、優良漁區に侵出してゐることは分りきつてゐた。

けれども工場長が口をきつた。——危いと思つたのだ。

——とにかく重大問題で、専務が全部の職工にお話したいことがあるんだから……それは、まづそれとして……。

— おツ！　一寸待つてくれ！

森本の後から、ラツカー工場のXが釘のやうな言葉を投げつけた。

— お、俺たちは、ばかりの力でやつたか、會は……。それば、それば！

言葉より興奮が咽喉にきた。で、森本が次を取つた。

— そんなわけで……一寸、貴方々の……勝手には……。

彼は専務や工場長に、而も彼等を三尺と離れない前において、ものを云ふのは始めてだつた。彼は赤くなつて、何度もドギマギした。普段から、専務の顔さへも碌に見れない隅ツこで、鐵屑のやうに働いてゐる森本だつたのだ。それに顔をつき合はせると、専務は案外な威嚴を持つてゐた。——だが

さう云はれて、この「鐵屑のやうな」職工に、工場長は言葉をかへせなかつた。

——まづ「確答」だ！

——要求を承諾して貰ふんだ！ それからだ！

食堂をうづめてゐる職工のなかゝら、誰かそれを叫んだ。上長に對して、そんな云ひ方は、この工場としては全くめづらしかつた。かういふ風に一つに集まると、彼は無意識のうちにその力を頼んでゐたとして彼等は全く別人のやうなことを平気で云つてのけた。

工場長とそれに森本も同時に眼をみはつた。誰が何時の間に職工をこんな風に育てたのか？

——直ぐこゝでは無理でせう。餘裕を貰はなければなりませんまい。

初めて専務は口を開いた。この言葉使ひは「ナツバ服」ともに「H・S」の誇りだつたのだ。

——餘裕？ 然しこの少しの無理のない決議はこれ以上どうにもならないのですから。

——然し、こつちの……。

森本はくさびを打ち込まなければならぬ。

——こんな困難な、どんなことになるか分らない時に、その日暮しゝか出来ない我々は、せめてこの機關だけを死守しなければならぬ所へ追ひつめられてゐるわけです。さつきから何人も何人も

職工がこゝの壇へ飛び上つて、この要求が通らなかつたら、全員のストライキに噓ぢりついても、獲得しなげア駄目だと云つてゐるのです。我々は勿論ストライキなど、望んでゐるわけではありません……。ストライキ！「今」この言葉が専務と工場長にこたへない筈がないのだ。カムチャツカの六千六百萬噸の註文！

……。

職工たちはなりをひそめた。

森本はもう一つ重要な先手を打たなければならなかつた。

——勿論「金菱」のことでは、専務自身としても色々と一緒に御相談したいこともあることと思ひ

ますが……。

専務は急に顔を擧げた。森本は思はずニヤリ！ とした。然し、彼は無遠慮にその手元へ切り込んだ。

——然しそれがすべて、この要求書が承認され、規約の上にハッキリさうと改正されてからの事にしたら、お互ひに相談が出来ると思はれます。……でなかつたら私たちの方が全く可哀相です。



専務はさつきのさつき迄、この「労働者大会」を自分のために充分利用することを考へてゐた。自分に対する全職工の支持を決議させて「金菱」が新しく重役を入れることに對して全職工擧つて反對させる。各自が醜金して、職工と社員の「上京委員」を編成し、關係筋を歴訪、運動させる。——殊に、今度のことが自分一個人の問題でないことが好都合だつた。その證據には、職工たちでさへ自發的に集會を持つところまで來てゐるではないか。だから、専務は、職長から職工の集會のことを聞いたとき、彼等の周章てゝゐるのとは反對に、かへつてほくそ笑んだのだ。かう意氣が合つてうまく行くもんでない、と。でなかつたら、専務は直ぐにも警察へ電話をかけるがよかつた。それをしなかつたではないか。——が、今専務は明かに、職工の自分に對する氣持を飛んでもなく誤算してゐたことに氣付いた。又、こんな形でやつて來られるとは思ひもよらなかつた。誰か後にゐる！ 然し「Yのフオード」はかうも脆いものか。労働者つて不思議なものだ。——してやられたのだ！ そして、もう遅かつた！

——ぢや、二三日中……。

専務は自分でもその惨めな弱々しさに氣付いた。

——二三日中？ 然し「金菱」は二三日待つてくれるわけはありません。

……。

森本は勝敗を一擧に決してしまはなければならぬ最後の「詰めの手」をさしてゐるのだ！

……。

五百の労働者の耳は、専務のたつた一つの言葉を待つてゐる。専務の味方をするものも、とんでもない會合に出してしまつたと思ふ職工たちも、こゝへくるともう同じだつた。五百人の労働者はたつた一つの呼吸しかしてゐなかつた。

誰か一番後で、カタツと靴の踵を下した音が聞えた。

——明日の時間後まで……。

波のやうなどよめきが起つたと思つた。次の瞬間には、食堂をうちから跳ね上げるやうな轟音になつて「萬歳」が叫ばれてゐた。

彼はたゞ、眼に涙を一杯ためて、手をギツシリと胸に握り合せ、彼の方を見つめてゐる、お君を、人たちの肩越しにチラリと見たと思つた……。

河田がどんなに待つてゐるだらう。あの「二階」で河田は居ても立つても居られないで、待つてゐるだらう。——だが、森本は一體今日のこの素晴らしい出来栄を、どういふ風に、どこから話したらいゝか分らなかつた。お君も同じだつた。

二人は河田に情勢報告をし、専務の返答如何による對策をきめ、すぐ歸つて、仲間の家で開かれる××集會に出なければならなかつた。「二階」に上る前には、必ず二度程家の前を通つて、様子をみるた。別に人形はなかつた。下の洋品店に、顔見知りのおかみさんが帳場に坐りながら、表を見てゐた。——ひよいとこつちが、分つたらしく、顔が動いたやうだつた。

と、おかみさんは眼の前の煙でも拂ふやうに、手を振つた。それは「駄目々々」といふ合圖らしかつた。

——變だな。

立ち止つてゐることが出来ないで、そのまゝ通り過ぎた。少し行つて、又同じところを戻つた。

四圍に注意しなければならなかつた。

——ね、君ちゃん、お客さんのふりをして、チリ紙でも買つて来てくれ。

——さうね。變んだ。あすこが分ることなんて絶対にない筈だわ。

お君は小走りに明るい洋品店の中に入つて行つた。森本は少し行つた空地の塀で待つてゐた。——一寸して、お君の店を出てくる姿が見えた。

——どうした？

——大變らしい。

お君は息をきつてゐた。

——おかみさんが聲を出して云へないところを見ると、中に張り込んでゐるらしいわ。お釣りを寄すとき、私を早く出ろ、早く出ろといふ風に押すのよ。

悪感が彼の背筋をサーッと、走つた。明るかつたら、彼の顔は白ちやけた鈍い土のやうに變つたのを、お君が見たかも知れなかつた。それは専務をとつちめた彼らしくもなかつた。

——フム、何んだらう。ストライキのことかな。

彼の舌が不覺に粘つた。

——何んにしても、この邊危いわ。

彼等は明るい大通りをよけた。集會のある仲間の家に一寸顔を出した。心配すると思つて、そのこととは云はなかつた。一三人來てゐた。皆奮して、元氣よく喋やいでゐた。——彼は自分の家が氣になつた。そして咽喉がすぐ乾いた。彼は二度も水を飲むために臺所へ立つた。彼は出直してくることにして外へ出た。

——顔色が悪いな。大切な時だから用心してくれ。  
仲間が出しなにさう云つた。

お君も一緒だつた。彼は全く何時もの彼らしくなく何も云はずに、そのまゝ歩いて行つた。

——鈴木さんて變な人。

お君が何か考へてゐたらしく、フトさう云つた。それに何時迄も、黙つて歩いてゐるのに堪へられないといふ風になつた。

——あの人變なことを云ふのよ。……お前は河田にも……キッスをさせたんだから、俺にだつていゝだらうツて！そして酒に酔拂つて、眼をすゑてるの。それから、とてもあの人嫌になつた。何か誤解してゐるらしいの。私に誤解され易いところがあるツて云ふけれどもね。……私ねえ、この仕事を

するやうになつてから、もとのやうな無駄なこと、キツパリやめたのよ。第一そんな氣がなくなつたの、不思議よ。それに芳ちゃんの想ひこがれてる相手といふのが、河田さんなんですもの。あの人まだ河田さんに云つてないらしいけど……。

彼はハツ！とした。自分でもをかしい程ドギマギした。だが、本當だらうか？さう云へば、河田が、自分にはどん底の生活をしてゐる可哀相な女がある。それが自分のたつた一人の女だと、話したことがあつた。

——鈴木さんに限らず、男ツて……。

お君がさう云つて、——何時もの癖で、いたづらしく、クスツと笑つた。

——あんただけはそれでも少オし別よ……。

——それはね。

森本は自分でも變なハズミから、言葉をすべらした。然し、何んだか、今云はなければ、それがそれツ切りのやうな氣がした。彼は恐ろしく眞面目な、低い聲を出した。

——それはね、君ちゃんを本當に……愛してゐるからさ！

「ま、をかしい！何云つてるのさ、この男！」——あの明るい、無遠慮に大きい笑ひ聲が、この

我ながら甘ツたるい、言葉を吹き飛ばしてしまふだらう、森本は云つてしまつた瞬間、それに氣付いて、カアツと赤くなつた。——が、お君はフイに黙つた。二人はそれつきり何も云はないで、撥の悪い氣持のまゝ歩いて行つた。

橋の上へ来たとき、彼が氣付いた。——彼はお君を一寸先きに行つて貰つて、服のポケットを全部調らべた。内ポケットの中から、四つに折つた、折り目が、ボロ／＼になつた薄いパンフレットが出た。河田からもらつた、な、な、な、なければならぬものだつた。彼はそれを充分に細かく幾つにも切つて河に捨てた。闇の澱んでゐる暗い河の表に、その紙片がクツキリと白く浮んで、ひら／＼と落ちて行つた。時間を置いて、何回かにそれを分けた。——さうしてゐるうちに、彼は落ちてくる自分を感じた。

お君は厚いシヨウ・ウインドウの硝子に身體を寄りかけたまゝ、彼を待つてゐた。彼は矢張り何も云はなかつた。

別れるところへ来て、立ちどまつた時、森本は始めて女の手を握つて云つた。

——元氣を出して、もう一ふんばり、ふんばらう！「Yのフォード」が俺たちの力で、ピタリと止まることもあるんだからな！

お君はうつむいたまゝ、彼の顔を見ないで、——握りかへしてゐた。

森本は家の戸を開けたとき、ハッ！とした。彼は然し何も見たわけではなかつた、が、それはこんな時に、彼等だけが閃めきのやうに持つ一つの直感だつた。——ガラツと障子が開いた。見なれない背廣が二人そこへ突ツ立つた。——失敗つたと思つた。彼には初めての経験だつた。——だがかうなつてしまつた時、彼は不思議に落付きを失つてゐなかつた。

——どなたです？

——フン。

背廣の顔が皮肉にゆがんだ。

——本署のものだよ。

彼はだまつて上へあがつた。父はまだ歸つてゐないのか、居なかつた。

——まア／＼、お前！！

母親は顔色をなくして、坐つたきりになつてゐた。待たしてゐた間、この可哀相な母親が背廣にお茶を出したらしく、「南部せんべい」のお盆と湯呑茶碗が二つ並んでゐた。それを見ると、彼は胸をつ

かれた。彼は次を云へないでゐる母親に、

——何んでもないんだ。直ぐ歸へるよ。  
と云つた。

彼は二人の背廣にポケットといふポケットを全部しらべられた。家の中はすつかり「家宅搜索」をうけて散らばつてゐた。

土間で靴の紐を結びながら、背のすんぐりした方が、

——こんな所に關係してゐるものがるやうとは思はなかつたよ。  
と云つた。

彼はその言葉の中に、當り前でない意味を聞きとつた。彼は河田に云はれたことを守つてゐた。今迄一度だつて、彼等に顔を知られたことがなかつた筈だ。河田でも云つたのだらうか。そんなことは絶対にない。とすれば——。彼は何かあつたんだと、思つた。

母親は坐つたきりだつた。彼は何か云へば、それツ切り泣けてしまふやうな氣がした。

——行つてくるよ。

彼はそして連れて行かれた。

二 十 二

初めての臭い留置場は森本を寝らせなかつた。そこは獨房だつた。

彼は澱んだ空氣の中に、背を板壁に寄せたまゝ坐つてゐた。——色々な考へが、次ぎから次ぎから頭をかすめて行く。然し不思議に恐怖が來なかつた。たゞ頭だけが冴えてくる一方だつた。

明け方が近かつた。然しまだ明けなかつた。切れぐに、それでも、お君のことを夢に見たと思つた。寒つかつた彼は頸を胸に折りこんで、背を圓るめた。

コツ、コツ……コツ、コツ、コツ……。

冴えてゐた彼の耳が、何處から來るとも知れないその音を捉らへた。耳をそばだてると、その時それが途絶えた。彼は息をひそめた。耳がチーンとなつてゐた。ものゝすべてが凍てついてゐた。

コツ、コツ、コツ……コツ……コツ……。

彼は耳を板壁にあてた。——と、それは隣りからだつた。然し何の音か分らなかつた。彼は反射的に表へ氣を配つた。それから、ソツと拳をあて、低く、こつちから、コツ、コツ、コツと三つほど打ちかへしてみた。——向ふの音がとまつた。こんな事をして、だがよかつたらうか、森本はフトぎよつとした。しばらく両方がだまつた。

コツ、コツ、コツ……………。

又向ふが打ち出した。が、今度はその打つ場所がちがつてゐた。彼はその方へ寄つて行つた。すると、其處から小さい光の束が洩れてゐた。何處の留置場でもよくあるやうに、前に入れられた何人かによつて、少しづつ開けられたらしく、そこだけ小さく板がはけて、穴になつてゐた。——いゝことには、そこは表からは奥になつてゐた。彼は思ひきつて、その同じ場所をコツ、コツ、コツと、打つてみた。

低い聲がそこから洩れてきた。

彼はソロ／＼と身體をすらして穴の丁度、そこへ耳をあてた。

——ダ……………。

はつきりしなかつた。何度も耳をあてかへ直した。

——ダレダ……………。

「誰だ?」——然し、さういふもの自身が一體誰だらう。彼は口を穴に持つて行つた。

——誰だ?

ときいた。そして、直ぐ耳をあてた。相手はだまつたらしかつたが、少少し大きな聲で。

——ダレダ?

と繰り返した。

アツ! その聲は河田ではないか! 彼は急に血が騒ぎ出した。表の方へ氣を配つてから、口をあてた。

——河田か?

相手は確かに吃驚したらしかつた。

——ダレダ?

——森！  
——モリカ？  
相手も分つたのだ。彼は全身の神経を耳に持つて行つた。  
——ゲン……  
——けん？  
——ゲンキカ。  
——あ、元氣か。元氣だ。  
——……。  
何を云つたか、分らなかつた。  
——分らない。もう少し大きく！  
——コーバ……。  
——工場、ん。  
——ダイジョウブカ。  
——ん、うまく行つた。

——アトハ……。  
——後は？  
——ドウダ。  
——大丈夫だ。  
——へ……。  
——ん？  
——へコタレルナ。  
——ん！  
——イツ……。  
——何時？  
——イヤ、イツデモ。  
——何時でも。  
——ゲンキで……。  
——分つた！

彼は、この不自由に話されてゐるうちにも、何時もの河田を感じた。フウツと胸が熱くなつた。彼のどをゴクツとならした。

—ダレカ……、

—ん。

—ナカマデ……。

—ん？ 中途？

彼は一生懸命に耳をあてた。

—イヤ、ナカマ。

—あ、仲間。

—ウ……ラ……。

—う……ら……。

河田の言葉がハッキリしなかつたが。彼はアッ！と思つた。

—裏切つた？

思はず大きな聲を出した。

—本當か？

—ホントウ。

知らないうちに握りしめてゐた彼の掌は、ネトくと汗ばんでゐた。

—ワカル……。

—ん、分る。

—ハズノナイ……。

—ん？ ん？

—ワカルハズノナイコトマデ……。

—分る筈の……、

—ミンナ……。

—皆。

—ワカッタ。

—……。

—ジケンハ……。



— 事件？ ん。

— ジケンハ……。

— ん、分つた。

— ××××××××！

— 矢張り！

矢張りか、と思つた。彼は胸締めをされたやうな「胸苦しさ」を感じた。

— サイ……。

— ん？

— サイゴマデ……。

— ん。

— ガンバレ。

— 分つた！

— アノ……。

その時、彼はギョットして、身体を跳ね起した。廊下を歩いてくる靴音を聞いたと思つたからだ。

そしてそれは本當に靴音だつた。——何か騒がしい事が、向ふ端で急に起つたらしかつた。形式だけの検束をうけて、留置場の中で特別の待遇をうけて居た鈴木が、この明け方、首を掻つてゐたのを、看守の巡査が発見したのだつた。

★

★

次の日「H・S工場」の労働者たちは、豫期してゐたやうに「工場委員会」の自主化を獲得した。たとへ、そのなかにはどんな専務の第二段の魂膽が含まれてゐるとしても。——然し彼等は、次にくる今度こそは本物の闘争にたへるために「足場」を堅固に築いて置かなければならなかつた。森本の後は残されてゐた。——

初めて二人を結びつけた握手が、別れるためのものだつたことをお君は思つた。それを考へると、胸が苦しくなつた。——然し彼が歸つてくる迄、自分たちのして置かなければならない仕事をお君は知つてゐた。

お君は工場の歸り、お芳とそのことを話し合つた。——お芳はそつと眼をぬぐつた。

——泣くんぢやない！泣いぢや駄目！  
お君は薄い彼女の肩に手をかけた。お芳は河田のことを考へてゐた。  
春が近かつた。——ザラメのやうな雪が、足元でサラツ、サラツとなつた。

(一九三〇・二・二四)

一九三〇年二月二十四日

援 救  
ニ ュ ー ス  
No.18  
附 録

冬が来た。プロレタリアの骨節にこたえる冬が来た！

獄中にゐる我等の前衛に綿入れは入つてゐるか？

遣族は路頭に迷つてゐないか？

(これはある部分抜けてゐる。然し文章を少し直したとだけでそのまゝ附録とした。)

んて行きました。みんな一列にならんで、おいしやさんのところへ一人づつめて行きました。おいしやさんは生徒のむねをこつ／＼たゝいたり、きかいをあてたり目をひつくりかへしたりして、そばにゐる人に何か云つてゐました。私のぼんにきました、私は赤くなつてからだかふるえ、こまつてゐました。はづかしくてならなかつたのです。私ははだかになるのがどんなにいやだか分かりません。

私は先生のお話をきいてゐるときなど、からだを何びきもしらみがつてちつともちつとしてゐられないのです。私はいつでもふところの中に手をいれてやつて、しらみを手さぐりでおさへてゐました。一生けんめいにそれを、ゆび先きでこすつて、つぶすのです、でも、すぐまたからだのほかの方で、ざわざわ走りだすのです。私はそれではだかになるときに、からだにしらみがついてゐるのではないかとおもつて、いつでもいやでたまらなかつたのです。いつか、たいかくけんさの時に、私のまへにならんでゐた人のくびに、しらみがあるいてゐたのを見ました。その時それが

ちようど自分であつて、よその人にでもみられたときのやうに私はまつかになりました。

そればかりでなく、おゆには入つてゐないし、じゆばんがほろ／＼してゐるし、こしまきもなく、からだがかく（七、八字程不明）おいしやさんは何んべんもあたまをふりました。ほかの人よりくわしくみるのです。私はむねがどき／＼して、じぶんで赤くなるのが分るほどでした。おいしやさんはほうと云ひました。そばの人にそして何かいひました。

おいしやさんはあとで私だけをよんで、いろ／＼のことをききました。お母さんはるるか、私は二人入りますと、こたへました。お母さんが二人もかい、とびつくりしてきゝかへしました。お母さんが二人、へんだなあ。ほんとうのと……さう私がいひかけると、ほんとうのと、うそのかいとわらつて云ひました。私はあたまでうなづきました。おいしやさんはだまつて、そしてしば／＼私のかほをみてるました。もらはれたんだねと云ひました。

どうだね、うそのお母さんは。お母さんはいつでも早く大きくなれといつてゐます。私はそのとほりこたえました。それでもお前はこはんさへろ／＼たべてないではないか。からだをみればすぐ分る。さう云ひました。私はだまつてゐました。お母さんは私が大きくなつたら、賣るといつてゐるのです。私はそれがどんなことであるか分りません。しかしそれはきつとおそろしいことなの

です。お母さんはいつでも早く大きくなれと云ひます。私はさう云はれるたびに、それがどんなおそろしいか。お母さんはその時やくにたつのだといつていろ／＼なうたをおしへてくれてゐるのです。うたのこととおもひ出しましたが、よほどまへ私がお母さんのところへ行つて、弟とあそんでゐながら、しらないうちに、ひくいこゑで、月はよるで、あさかへる……とうたつてゐました。私になにかで、ひよいとうしろを見たら、はんぶんあいたしやうじのところによりかゝつて、お母さんがちつとうしろから、私をみてゐました。私はお母さんの目がなみだで一ばいにひかつてゐるのを見ました。

お父さんがあたときからくみあいの人があるとすぐ弟がこたつの上にあふんばつて、おれはぶられたりや、しほんかはてき、だと云つてみんなをよろこばしてゐました。お父さんがおしへるので、はじめ私たちはなか／＼ぶられたりやといふことが云へなかつたのです。弟はふんばりはふんばつても、そのぶられたりやといふのが口がまはらず、どもつて、かほをしかめ、それから、とう／＼あたまをかいてしまふことがありました。私たちは赤はたのうたといふのもおほえてゐますよくこゑを合せて、うたひました。ひきようもの、去らば去れ、そこがすきで、そこばかりくりかへしてうたつてゐました。お父さんやくみあいの人、そのたびに、えらい、えらいと云つて、あたまをな

でくれました。お父さんは大きくなつたら、弟や私をどうしてもこうばに入れて、ぶろれたりやにするのだといつてゐました。お父さんがけいさつにつれて行かれ、たべることができなくなつてしまひ、それに私がこんなにな（一行程不明）のに、月はよるで、あさかへる……、お前はもうお父さんがおしへてくれたうたの方はわすれたらうね、とお母さんがそのとき云ひました。いつのまにか私にはあかはたのうたもうたはないでゐたのでした。それで私は今でもそのときのこと、あたまのなかにのこつてゐるのです。

**おいしやさんは、**私になにも云はなくなつたので、もうよし／＼と云つて、お母さんにもつてゆくんだよ、とてがみをわたしてくれました。私は、どつちのお母さんかとおもひ、みちみちかんがへましたが、今のお母さんにはみせるきがせず、ほんとうのお母さんのところへもつて行かうとかがへました。しかしさうきめても、心がうしろから、うしろからおひかけられるやうでした。ほんとうのお母さんのところへ行つたのを、今のお母さんにみつけれれると、私はいち／＼とさうされてから、まだ右の手のふしがいたんでありません。私ハアルイテキルウチニダン／＼シンバイニナリマシタ、ソノ手ガミノ中ニハ、何かキツタイヘンナコトガカイテアルノデハナイカト思ハレテキタノデシタ一度サウオモウト、モウ私ハハンブンナキダシサウニナリマシタ。

フトコロノ上カラテガミヲオサヘテ人ゴミノナカラ走りダシマシタ。

**ウチノカドマデキテ、**一ドクチドマリマシタ。イツデモソウシテキルノデス。何モカワツタコトガナイヤウデシタ。私ハウラノ方ヘマワロウトシテ、トソノトキフクヲキタ人がキタノデス。私ハギヨツトシテ、足ガチマリマシタ、やあ、キヌが、その人は私のなをいひました。でも、私はなんだか、その人がに／＼らしい人で、おそろしい人であるきがして、だまつてゐました。それにひさかぶが、どうしてもがた／＼ふるえてなりませんでした。私はおもひつきました、それはほんとうにくらしいやつなのです。いつでも、お父さんのあとをついて行つたり。お父さんが、どこへ行つたか、お前しつてゐたらふ、ときいたりするすばいでした。どうだ、あたらしいお母さんにめんこがられてゐるかと思ひました。私はへんじをしないで、そいつのかほをにらんでやりました。それから、おちさん、お金ちよだいと、云ひました。けいさつの人は、へえ、といふかほをして、私のかほをみてから、ふうん、ばかやろ、さう云つて、行きかけました。私はよう——と云つて、うしろからひぢにつかまりました。おちさんがお父さんをつれて行つてしまつたから、お母さんがとてもこまつてゐるんだもの、と云ひました。づうづうしいやつだ、こいつらはみんなかうだ、ぶつ／＼いつて、それでもしかたがなく／＼しをさがし出しました、見ろ、とおもひました。先生、私ハ心中ガ、コレデオ

父サンノカタキガトレタト、オモツテ、ウレシクテウレシクテ、ナリマセンデシタ。スパイハ手ノヒ  
 ラヲヒラカセテ、ソレニ十センチダマ一ツノセテクレマシタ。ソレカラ、ソツトシタヲ出シタノモ知ラ  
 ナイデ、カタヲフツテ、グヂヨ／＼シタミチヲカヘツテ行キマシタ。ソレヲヂツト見テキルウチニ、  
 私ハジブンデモ分ラズニ、ナミダガ出テキマシタ。イチド出ルト、アトカラ、アトカラ出テキマシタ  
 ナゼダカ分リマセン。

**私ノカホヲミルト、**

オ母サンハモウ泣キダシテキマシタ、ズイブン長イ間コナカウツタノデ  
 ス。アシタオ前ノトコロヘ、コツソリモツテ行ツテヤロウトオモツテ取ツテオイタノダト云ツテミカ  
 シト、アンパンヲ出シテクレマシタ。ソノトキオシ入レガガタ／＼シタノデス。私ハコエヲアゲルト  
 コロデシタ。スルト男ノ人ガノツソリ出テキマシタ、モウ行ツタロウト、云ヒマシタ。クミアヒノ人  
 デシタ。オ母サントハナシヲシテキタトコロヘ、ケイサツノ人ガキタノデ、アワテ、ソノ中ニカクレ  
 テキルノダト云ヒマシタ。ソレデミンナデ、オカシクナツテ、コエヲ出シテワラヒマシタ。

**クミアヒノ人ハ**

オ父サンノコトラワスレズニ、トキ／＼マワツテキテクレテキマシタ。ケイ  
 サツニ行ツテキルノハ、オ父サンバカリデナク、何ンデモコノ市カラ二十四、五人モキルサウデス。  
 コノクミアヒノ人タチハ、ミンナデ、私ノウチノヤウナ人タチヲタスケルタメニ、オ金ヲアツメテ、

ソレヲクバツテアルイテキルノデス。チヨウド、ソレヲモツテキテクレテキタノデシタ。

**弟ハボロ／＼ニナツタエ本ヲ**

ミテキマシタ。アタマダケガゲン／＼大キクナツテ、目ガコ  
 ノ前ノトキヨリモ又モツトギヨロ／＼シテキマシタ。私ハ弟ノホソイクビヲミルトカナシクナツテ  
 キマシタ。オ母サンニ、弟ガドコカワルイノデナイノ、トキ、マシタ。オ母サンハウカナイカホヲ  
 シマシタ。弟ハ學校デハヨクケンクワチシカケラレタリ、ナカマハツレニサレテキマシタ。オ父サ  
 ンノコトガスツカリ分ツテキタノデス。ソレデ弟ハ學校ヘ行クノマイヤガツテキマシタ。

**クルタビニ、**

ウチノ中ガダン／＼ガラントシテキテキマシタ。ソレハ私ニモワカリマシタ。ウチ  
 ニキタトキ、私ハオ母サンノアトニツイテ、シツヤヘヨク行キマシタ。オ母サンハオビヤタビマデモ  
 ツテ行キマシタ。ソレカラドコヘ行クニモ、ヒモバカリシメテキマシタ。冬ガチカクナルト、足ニヒ  
 ヲガキレテ、赤クワレテ、ニクガミエマシタ。シヨウチハクミアヒカラシンブンノアマリヤ、ピラノ  
 アマリヲモラツテキテ、ベタ／＼ハツテアリマシタ、ソレモヤブレテ、ツメタイ風ガ入ツテキマシ  
 タ。ウラ口カラ入ツテクルト、オモテヘソノマ、フキヌケテ行クノデス。

**私ハオ母サンガ**

ドンナニシンバイスルカトイフコトガ分ツテキテモ、今マデアツタコトラ、  
 ナンデモ、カンデモ云ツテ、アマイタイ心デ一バイデシタ。イツデモヒネラレタリ、タ、カレタリシ

テキルノデスモノ。私ハオ母サンノトコロヘクルトキニハ、アルキナガラ、アノコトモ、コノコトモト一ツ一ツカゾイテ、ソレヲワスレナイヤウニシ、何ンベンモ、何ンベンモ、オボエナホスコトニシテキルノデス。

### オ母サンハ字ガヨメマセン。

オイシヤサンノ手ガ、ミハクミアヒノ人ニミテモラウコトニシマシタ。クミアヒノ人ハヨミナガラ、私ノカホヲミテ、キヌチヤンガエイリヨウフレウダカラ、ウチデ何かチヨウニナルモノヲタベサスヤウニシナケレバナラナイト、云ヒマシタ。キノヨワイオ母サンハ、ワケハ分ラナイガ、モウオロシテ、私ノ手ヲギツチリニギリナガラ、ソレハドウイフコトカトキ、マシタ。オ母サンハドモツテシマツテ、エイリヨウ（鉛筆ノタメ、二行程不明。）キカレマシタ。ハジメハワカリマセンデシタガ、ダンク何ンド目ヲコスツテ、見ナホシテモ、オカシイノデス。イツデモ日グレチカクナルトソウデシタ。ウラ口ヘスミヲトリニ行クトキナド、ジブンデモオカシイ、オカシイトオモヒナガラ、ソレデキテツマズキマシタ。ソシテイキナリ上リ口ヘノメリマシタ。次ギカラハ、コノヘンニ何かアツタトオモツテ、キヲツケテキナガラ、ヤツバリスグツマヅイテシマイマス。クミアヒノ人ハソレハトリ目ニナツテキルノダ、ト云ヒマシタ。

### クミアヒノ人ガカヘツテカラ、

オ母サンガカンゴクニキルオ父サンカラキタ手ガミヲ出シ

テキマシタ。私ニモ分ルヤウニカタカナデカイテアリマシツ。私ハコエラダシテ、一字一字オ母サンニヨンデキカセマシタ。私ハダンクヨメナクナリマシタ。ナミダガデテキテ、字ガドウシテモ見えナクナルノデス。ソレニコエガフルエルノデス。オ母サンモ目ヲコスツテ、ナンドモハナチカミマシタ。オ父サンニコウコウヲシテクレルナラバ、ドウシテオ前タチノオ父サンガ、カンゴクニツレテ行カレタカトイフコトヲヨク考ヘテミテ、オ父サンノアトヲツイデクレルコトダ、オ父サンガキナクナツテ、クルシイコトバカリダロウ、ソレデモ、ケツシテコレダケハワスレナイデオクレ。オ前タチガコノコトヲ分ツテクレ、ドンク大キクナリ、ツヨイ人間ニナツテクレルナラ、オ父サンハカンゴクノ中ニキテモチツトモサビシイコトガナイ。ソレバカリヲマイニチタノシミニオモツテキル。私ハコエラアゲテナイテシマイマシタ。コレ健ヤ、オ前キイタカ、オ母サンハ弟ノカタヲユスリマシタ。ソノトキ、ヒヨツコリ、サツキノクミアヒノ人ガ入ツテキマシタ。オ金ヲ二圓モツテキタノデシタ。私ニハツメウナギヲタベラシタライ、ト云フノデス、ミルト、サツキキテキタジヤケツヲキテキマセシデシタ。

### 私ハホツベタヲ

ヒネリアゲルオ母サンガ、マチカマヘテキルコトガ分ツテオリ、ソレガ目ノマヘニチラチラシテキナガラ、ヤツバリカヘルノヲモウ少シ、モウ少シノバシテキマシタ。オ母サン

モカヘシタガラナイノデス。イモヲフカシテクレタリ、カミニクシテ入レテ、シラミヲトツテクレタリ、オヤユビノデタ足ビニツギテアテ、クレタリ、少シデモカヘスノヲノバシテキルノデス。ソレガ私ニモ分リマス。スルト、モウドウシテモカヘリタクナクナルノデシタ。

日ガクレカケマシタ。

オ母サント弟ガコウジヲトオリマデオクツテクレマシタ。弟ハカタラスボノテ、セキヲシテキマシタ。ソトハカゼガサムクフイテキマシタ。ミチノナント云ヒワケシヤウカ、ソレバカリ考ヘテキルト、シラナイウチニ、ドンノハシラサツテキマシタ。夜ニナツタラチリガミヲウリニデナケレバナリマセン。

先生トハオ別レデスカラ、

ナンデモ云ヒマス。うそのお母さんのところへは、まいばんちがつたお父さんがくるのです。お母さんは、それをお父さんと云へといひます。年をとつた女の人がいつでもおそくなつてから、うら口からこつそり男の人をつれてくることになつてゐました。ソシテソノ男ノ人ハ次ノアサカ、オヒルコロカヘツテ行キマシタ。ヒトバン中サケヲノンデ、サワグコトガアリマシタ。シマヒニ、ケンクワニナツテ、オ母サンガナグラレタリ、カミヲツカンデ引キズリマハサレタリスルコトガアリマス。デモ、ソレヨリ、イクラ先生ニデモ云ヘナイヤウナコトヲ、私ガソバニキルノニスルノデス。私ハドウスレバイ、カ、ドウニモデキナクテ、タバウロノスルバカリデ

ス。ソレダノニ、オ母サンハオ前モハヤクコンナコトヲオボエテ、オ母サンニオ金ヲカセイデクレナケレバナラナイ、ト云フノデス。私ハオシ入レノ中ニチバコマツテ、フルエテキルヨリドウスルコトモデキマセンデシタ。

コノ前デシタ。

私ハハシゴダンノドタンノトイフ音デ、ビツクリシテ目ヲサマシマシタ。スグ火事ダトオモツテ、私ハトナリニキルオ母サンヲヨビマシタ。トオ母サンノキルヘヤデ、キユウニ何カサワギガオコツタノデス。私ハブルブルフルエナガラ、シヨウヂヲアケマシタ。アケテ私ハ、ハツトシマシタ。ジュンサガ上ツテキテキルノデス。前ノバンニキテキタ男ノ人ハ何カキカレテキマシタ。オ母サンハソレカラ一シユウカンモ、ケイサツカラカヘツテキマセンデシタ。私ハサムクテ、ハラガヘツテ、ナイチキナケレバナリマセンデシタ。

私タチハ

人ノニカイチ一タマカリテキタノデス。オ母サンハ私ノキル方ヲ、私ダケデハモツタイナイト云ツテ、ツミトリニンプ（積取人夫）ヲツレテキテ、ダシユクサセマシタ。フトンガ一枚シカナイノデス。私ハネルトキガキテモ、シミツコニチバマツテキマシタ。カゼヲヒクヨ、ネツチヤ、ソノ人ハサウ云ヒマシタ。シカタナク、私ハ石コロミタイニ、コツチリカタクナツテ、フトンノハシノ方ニ入ツテネマシタ。ソノツミトリニンプハトキノヨツバラツテカヘツテキマシタ。私ハサケク



サイイ、キヲカケラレルト、ムネガワルクナリ、アサマデネムレマセンデシタ。トナリデハオ前ノオ母  
 アガウマイコトヲシテルンダカラナ、ソナコトヲ云ヒマシタ。私ハゾツトシマシタ。オ母サンニオ  
 キヤクサンガナイトソノニンブガオ母サンノトコロへ行ツテキルノデ、私ハドンナニオ母サンニオキ  
 ヤクサンガナイノヲヨロコシレマセン。先生ソレニコンナコトガアツタノデス。私ハコノ前ノ  
 夜、キヤツト云ツテ、ハネ上リマシタ。ネテキルマニ、ニンブガ私ニヒドイコトヲシヤウトシテキル  
 ノデス。私ハマツサヲニナツテ、イキナリカイゲンノトコロヘハシリマシタ。ソシテ、ソノマ、ノメ  
 ツテカイゲンヲヒドイ音ヲタテナガラ、オチテ行キマシタ。私ハモウ何モカモ分ラズ、ムチユウダツ  
 (以下二行程不明——この邊から鉛筆がペンになつてゐる。)オソロシイバカリデス。デモ、ミンナヤ  
 ツバリオ金ガナイカラダトオモヒマス。私ニダツテソレハ分リマス。オ金ガナカツタラオ母サンノヤ  
 ウニモナラナケレバナナイトオモヒマス。ミンナイ、人デス。私ハシカシドンナコトガアツテモ、  
 オ父サンノ云ツタトウリコウバニ入ツテ、女工サンニナラウトオモツテキマス。ソシテ三ネンスルト  
 出テクルオ父サンヲヨロコバシテアゲタイ、トオモツテキルノデス。デモ、私ハウラレ

(この次に續かなければならない分が脱けてゐるらしい。)

ワカリマセン。ドコデモ、イキナリダメ／＼ト云ヒマス。オ客サンノジヤマニナルンデナイ  
 ノ、キノフモオトトイモキタクセニ、ウスギタナイ、ジヨ、キユウサンハキレイナカホテ、イヂワルク  
 シカメテ、ニラミツケタリシマシタ。私ハサウ云ハレルタビニ、心デハウロ／＼シナガラ、ソレデン  
 テ立ツテキルノデス。しらんかほをして、びーるをのんでゐる人や、きぶんがわるくなつたと、こそ  
 〳〵云つてゐる人や、あります。私はひとり〳〵、おちさんちり紙をかつて下さい、とてえぶるによ  
 つて行くのでした。こまつたな、かねがないんだよ、といふ人があつた。私はおもはずてえぶるの  
 上をみます。私などのしらないりようりがたくさんのつてゐるのでした。私はそれとお客さんのかほ  
 を何んどもみてるうちに、なんだかさびしく、はづかしくなつてきます。おきやくさんのうちには  
 わざにふところからさいふを出して、それをてえぶるにたゞいてみせたりしました。私はつぎのてえ  
 ぶるに行きます。よつばらつた、お客さんはいきなりばかつと、どなるのです。うるさいうるさい、  
 でて行きやがれ。私は、おきやくさんがかへつて行くときに、五、六圓もはらつて、一えんもてえぶ  
 るにのこして行くのを何んどもみたことがあります。私はところが、一ばん、あさの二時ごろまで市  
 のなかをあるいてそれで一圓になることなんか、なか／＼ないのです。先生は私がどうしていつでも

教室でえねむりをして、しかられたが、今わかつて下さることとおもひます。うちへかへつてねるの  
が、三時になることさへあるのです。

**なかには** よし／＼ひとつ買ふかな、と云つてくれる人もあります。よぶんなお金をてのひらに  
にぎらしてくれる人もありました。ところが、私が入つてゐるところへほかのやつぱり同じやうにま  
はつてある入つてくる人が入つてくることあります。私はかほがまつかになつて、おたがひにきまり  
わるく、いそいで外へにけてしまふこともありました。私はいろ／＼な同じ人を知りました。かふご  
くべやからきたといふ、いつでも足のぶる／＼してゐる、はんでんをきた人や、なにはぶしやしばい  
のやくしやのまねをしてある入つてゐる人や、私よりも小さい男の子や女の子などのゐることもしりま  
した。はんでんの人は、お金やたばこをもらつてゐる、それがおはると、ていしやばのいすにね  
るのだと云つてゐました。かへりに一しよになると、いくらになつたときいて、私か少なかつたりす  
ると、おれは今日すこし多いから、といつて、おかねを分けてくれることがありました。足がぶるぶ  
るふるえて、はやくあるけないので、私はとき／＼まつたり、ゆつくりあるかなければなりません  
した。つちうらをうつてある入つてゐる小さい男の子が、ふじきのぼんに手がつめたいつめたとなき  
ながらある入つてゐるのを、私があごの下に入れてあつたためてやつたこともありましたが、でも、なかに

はひどい人もありました。ちやうど、かふえの前で、ほかの女のひと／＼一しよになつたとき、その人が  
お前も入つてきたら、ぶんなぐるぞと云つて、私をいきなり雪のなかにおしこんだりしたことがあり  
ました。

**私は一人の男の子と** しりあひになりました。あるとき、かふえに入つて行くと、お客さんが  
その男の子を、このほいと（乞食のこと）出ていきやがれ、と云つたさうです。男の子はむつとして  
どこがほいとだと口をかへしました。ところが、おきやくが、ばかやろふ、金をもらひにきたくせに  
と云つた。男の子はいきなりじぶんのもつてゐたつじうらを、おきやくのかほにぶつつけると、だれ  
がお前に金をくれといつた、さう云つて、足にかぢりついたのです。あとでさん／＼なぐられて、  
雪のふつてゐる外へなけ出されたさうです。私はその話をきいてゐるうちに、からだかふるえてきま  
した。それでも男の子はおれたちは何もほいとをしてある入つてゐるんだから、少しもびく／＼  
してゐなくてもいゝんだと云ひました。私はそれはさうだとおもひました。何かお金のある人とな  
い人、お父さんの云はれてゐる入つたことが、わかるきがします。然し、なかまの人はその男の子をなまいき  
だと云つて、あまりしたくしてゐませんでした。

**少しも** お金かよぶんに入ることがあると、私はそれをもつて、こつそりうちへより、弟に

やることにしてゐました。弟はほんとうによろこんでくれました。私は弟によろこんでもらふことぐらひ、うれしいことはありません。ねつちや、さむかつたろ、弟がさう云つてくれます。元氣きのいゝときには、お父さんとそれにねつちやのかたきをとつてやらなければならぬんだなど云ひました。

**お母さんはごまつてゐました。** どこへ行つても、お父さんのことで、長くゐることはできなかったのです。男のいふと一しよにはまだ俄をかついだり、豆よりへ行つたりしてゐました。夏かみみると、だんくやせてきてゐました。

夜おそくなつてからでした。すこしお金をもつてゐたので、私はうちの方へまはりました。入らふとしたときだれか人がきてゐたので、だれかとおもつて、うらへまはつてみました。すばいす。そしてくものやうな、そのうすきみのわるいすばいが、お母さんに何かいたづらをしてゐるのです。私からだは石のやうになりました。私はお母さんとさげんだきり、そこへたほれてしまひました。すばいはお母さんにくらしをたすけてやるからと云つて、前からもそんなことをしてゐたのです。

**私はおそろしいきがします。** これからどんなことが、もつともつとくるのでせう。くみあ

いの人もどうしたのかなくなりしました。私はくみあいの人からたのまれてゐることがありました。毎ばんし、よばいに出るとき、おしえられたところへよつて、そこからがみをもつて、やつぱりおしえられた、別のところへもつて行くことになつてゐたのです。それが二三日前からどつちの方にも、たれもなくなつてしまひました。お母さんはまた何かおこつたんでないかと、しんばいしました。それで、ときく今までもつてきてくれた、お金などもちつとも、こなくなつてしまつたのでした。

**ふといてゐたばんでした。** 十二月のおはりころになると、くるばん、くるばんふといてばかりゐました。一時すぎると、外はだれもあるいてゐません。雪とかぜだけが、だれもなくなつたまぢのとほりを、ぐるぐうづをまいて、ふいてゐるばかりです。まへからきたとおもつて、うしろむきになると、又まつしようめんからふいてくるのです。ふときで、そとにつけてあるでんとうも見えなくなつたりしました。かぜがおそろしいなりをたてゐました。私ははらがへり、それにさむさではんぶん泣いてゐました。こんなときお父さんは火もなんにもない、かんごくの中で、どうしてゐるだらふか、とそれがおもはさりました。かへつてくると、お母さんにはおきやくさんがゐました。お母さんはさけをのんで、赤いかほをしてゐました。私をみると、お前の弟が死にさうだとさつきつかひがきてゐたと云ひました。私は立ちすくんでしまひました。かへつてほかんと立つてゐました。

私は何をきいたのか、それがじぶんで分らないやうでした。それから私はきゆうに、あつ、あつともはすこゑを出すと、そとへはしりてました。私はむちゆうではしりました。私は二どもすべつて、雪のなかに手をつきました。しかしすぐおき上りながら、はしりました。すこし行くと、ふところに入れてあつた賣りのこりのちりかみがおちたのにきづきました。私はそれをひろつてふところに入れました。ところがちよつと行くうちに、又ちりかみがふところからおちました。雪というがおなじなので、私はめくらにでもなつたやうに、むちゆうでそれを雪やぶのなかへらさがし出すと、ふところにぐじやぐじやおしこんで、はしりました。ふときはなほひどくなつてゐました。死ねばだめだ、死ねばだめだ。私ははしりながら、こゑを出して泣いてゐました。ゆきのなかにのめつたり、下のかちく／＼のところではすべり、ころんだり、弟の名をよびながら、たえずあつあつ、とこゑをあけて、私は（六字程不明）お母さんや私かどんなに弟をあてにしてゐるか分りません。弟が大きい

（これはこゝまで終つてゐる。）

## 暴 風 警 戒 報

（困難な下半期）

その港の第二期築港埋立計畫が「政争」の具にされた、波止場一帯に要りもしない「運河」が構形にほられた。

運河の水は腐つてゐた。煤煙で黒く濁り、蓄膿症の鼻汁のやうに腐つてゐた。回漕店、汽船會社、仲仕溜場、連絡倉庫、石炭現場、木材積卸場が、口を並べて、海風の交つた運河の臭ひを吸ひ込んだ。解が平らべつた背に棒鱈、鹽鱈、メリケン粉、カントン袋を規則正しく積み重ねて。岩壁に身體を並べてゐる。——港からは汽笛が響いた。銅羅がなつた。起重機の腕が廻はると、チエンがガラ／＼ひびいた。高架棧橋の鐵口から、何十尺下の汽船のダンプルに、石炭の滑り落ちる凄い音が海を傳つて直接に響いてきた。税關の構内には暴風警戒の旗が、子供の掌のやうに高く翻つてゐる。

こゝは市の「生産面」だ。——市のこの部分だけが劇しく何時でもドキを打つてゐる。

市は海迄裾をひいてゐる山の斜面を、その高みと低みを充たして、階段に這ひ上つてゐる。——海岸通りの一つ上の通りには、大會社、大問屋、一流銀行、大ビルディングがアスファルトの上に高く交錯した斜線を切つてゐる。——その上の通りは、汚い労働者が決して一度も歩いたことのない明る

い、まばゆい遊歩街だ。——その上が公園だ。街がそこから一眼に見える。——その上の通りは、樹木の蔭の静かな「山の手」だ。

だが、市の両端は、泥濘と、便臭と、形のくづれた三十軒長屋と、淫賣屋と、積取人夫の安宿と、煤煙と……真ツ暗だ。

「労働者」がゐるのだ。

「岩城ビル」はこの暗い「臭い街」の入口に、その歪んだ大きな圖籠を邪魔ツ臭くのさばらせて、隠んでゐるのだ。——「岩城ビル」皆さう云つた。だが「ビル」でなくて、「アパート」なのだ。「アパート」！ 然し、そんなハイカラな言葉で呼ばうものなら、このとてつもなく大きな「塵芥箱」は、柄になくテレてしまふだらう。——汚い雑多な「世帯」が南京蟲のやうにゴミくくとさゝり込んでゐる。どうにもならない「塵箱」なのだ。

野口と島田は「岩城ビル」にゐた。——二人とも「H・S製鋼所」に通つてゐる。

二

だるさうな足が、きしむ階段を一つ、一つゆつくり上つてきた。

「ソーニヤ」だ。——野口の筋向ひにゐる會社員の寺田が、その若い、ホツそりした女をさう云つてゐる。三階の隅ツこに「姉さん」と二人で、別々に室を持つてゐる。タキ子はその名だ。

「ゐる？」

寺田の室の前に立ち止つた。軽く息をハズませてゐる。室は階段の上り口すぐだ。

タキ子が中に入ると、横顔を向けて、うつむいたまゝ坐つた。眼が疲れを見せてゐる。

「お客さんが歸つたネ。——随分長くるんだな。」

「……………」

「タキちゃんがお客を連れてきたり、送つて行つたりしてゐるのを、この部屋でぢいと聞いてゐると——かう、やつぱり胸んところが變になるな……………」

「私だつてそのこと考へてるわ。どんなに……………」

「ソーニヤ」はチョコレートやドロップスの五つ六つ位づつ混つたのを、クルツ／＼と紙に包んで置いて行く。——「ソーニヤ」はその外にかういふ事をする。

寺田が「一週間」を讀んでゐる。(彼は左翼の藝術運動をやつてゐた。)何枚か繰つて行くと、フト紙片が出てくるのだ。

一生懸命勉強して、  
 お偉い方になつて下さい。  
 貴方の「ソーニャ」より  
 道夫さんへ。(キッスをしました。)

「道夫さんへ」といふ字が、そこだけ、インキが滲んでゐた。

寺田が會社に行つてゐる間に、ソツと入つて來るらしかつた。淋しいことがあると、寺田の室で何時迄も泣くのだと、云つてゐる。同じ家にて。タキ子は寺田に手紙を出した。ワザく二三町離れたポストに入れに行つてくる。すると次の朝それが寺田に配達になつた。——まだ十九になつてゐないのだ。

タキ子は立ち際に、帯の間から四ッ程に疊んだ紙を出した。

「忘れてた。——街角で號外を拾つてきたの。」

「田中内閣總辭職」號外は不揃な大急ぎの字を並べてゐた。寺田は新鮮な活字の匂ひを嗅いだ。

「ホオ——？、これは！」

寺田は聲をあけた。

「野口と島田は知つてゐるかな。」

三

四つに折目のついた號外の紙が綺麗にのされて、その上に三つの、頭が重なり合つた。野口達の室だ。壁から「レーニン」がそれを見下してゐる。

野口は首の短い、四角い顔をした旋盤工だつた。打つても直ぐ響かない鈍感な男だ。島田はさう云つてゐる。むつつり屋で、眼がギロ／＼してゐる。「岩城ビル」では、それで誰も野口を愛してはゐない。だが、それはそれだけが理由の全部なのではない。野口は「シギシヤ」だといふのだ。父は奥地で小作をやつてゐる。

「打倒田中サーベル内閣」——二年もの間、野口達は闘つてきたのだ。めづらしく角な顔が形をくづした。

「だが、こいつア分らなくなつたぞ——何時もの用心深い顔だ。」

「ん？」

「待つてくれ。——分らないな。」

「大命降下は濱口だ。さうだとすれば、今度こそ少しはやりよくなるさ。」

「何故よ？」

野口はムツとした聲を出した。

「田中内閣を散々やツつけてきた手前もあるからな。どうしたつて多分に、自由主義的要素を持つて登場してくるさ。そこをつかむのさ。——俺達の運動はさういふ處を巧みにつかんで、決して差支えないんだ。」

「さうだよ。」不機嫌に、ブツキラ棒に、「然し、そこだよ、分らないのは——」

「……………」

又始まつた！ 島田は、底の知れないこの憎々しさが、彼の短い首から出るのだと思つた。

「知つてるだらうが——、英國で労働黨が内閣を乗取つたつて新聞に出たとき、工場で仲間が馬鹿に興奮したのを。」

「ホ——」

寺田が聲をあけた。「英國のことでも、労働黨のことが、そんなに北海道の職工達にも響くものかな！」

「俺達だつて、見ろ！ 皆さう云つてた。一日仕事が手につかない位だ。その時お前は眼に涙をためて、その尻馬にのツかつてるたんでないか！」

四

「圓みのない頭だな、お前の頭ア。——あんな時でも嚴密な考へを崩さずに、苦蟲をつぶしてれツてか？ そも、右翼社會民主主義者とは——ツてか？」

「こいつ誤魔化しやがる！」

労働者は、下手な高商出や大學出の銀行員、會社員などよりもこんなに政治といふものに對して、要求や關心を持つてゐるんだ。そのことでは、この俺だつてお前に負けない位涙が出てきたんだぜ。だから、だからよ。尙更このヌエ労働黨が、労働者にや恐ろしい阿片だつて云ふんだ。そいつを皆の前でドシ／＼やつて行かなければならない時、お前何してたか？——大したもんだ。労働者だつて大し



「たまんだつて、オイ〜……」

「まあいよ、まあいよ。ムキになる奴だな！——お前に負けて置くよ。」

「負けておくで帳消にされるもんか、かういふ事は。——悪い癖だぞ。」

「で、濱口と労働黨がどうかとでも云ふのか？」

「仲々分るもんか。」

「で、二人とも——島田も寺田もアツと吹き出してしまった。「何アんだい！」

煤けて、世界地圖を描いてゐる天井が、ミシ〜なつた。重い「男」の足の下でなるミシ〜だ。フト、寺田の顔が天井を見上げた。「ソーニヤ」の室が丁度この真上になつてゐるのだ。

「たゞ、俺達の周囲のどこを見たつて、いづれ近い中に第二の大規模の戦争が起るツてことが分つてゐるしそれにいくら、弾壓を加へたつて、ます〜左翼の運動が猛烈になつて行くことも分つてゐる。——その時にだ、この軍事内閣をこゝもあらうに、樞密院が何故辭職させたか、それが分らないんだよ。」

「野口は何時でもとんでもない處へ考へを持って行つてゐるんだな。」

「ぢや。」——島田が口を入れた。「ぢや英國だつて同じ理窟でないかな。こんなに世界の情勢が逼迫してるとき、何故マغدナルドのやうなそれがたとひ右翼社會民主主義者であらうと、ともかくも労働黨と名のつくものに内閣を與へたかつてことがな……」

「ん、どうも——さうなるんだ。」

野口は窓際に腰をかけて、バツトを深く吸ひ込んだ。それからフウーとはいた。——下に見える、「明るい街」と「臭い街」の交叉點は新鮮で活々と渦をまき返へしてゐる。もう夜だ。——こゝは、それでも明るい。觸角を振り立て、ひどいカーヴを曲がつてくる電車はガチャン〜としやツくりながら、ポールに稻妻を閃めかした。幾臺もの自動車のヘッド・ライトが交錯した。労働者のたくましい肩が、港の工夫の伴天が、光つた。そして消えた。

と、窓にゐる野口の眼は、道と同じ幅だけの織物のやうに流れてゐる雑踏の中から、さとく、一つの、小さいたつた一つの縮目の隙をつかんだ。それはそれとすぐ分る外形をして、雑踏から歩度を外した特別な歩き方をしてゐる。少し行くと、今度は戻つてくる。それは何かを探がしてゐる。——「ソーニヤ」と一緒にゐる玉枝だ。

四つの足だけが舗道の上でからんだ。雑多な足がそこではぐまれ、踏み、そして、兩側へ流れた。男の厚い肩胛骨がドシンと来た。小鼻のふくらんだ酒臭い顔が玉枝の眼一杯にきた。

「三圓。」

「ウ、いゝ。」

玉枝は先に立つて歩き出した。これで、まづいゝ。

女はお客をつれて「岩城ビル」の階段を上つた。するめのやうに、一枚々々のり返つてゐる床板が足の下できしんだ、一段々々上つた。——一階——二階、女は胸を張つて、冷たい顔を眞直ぐにして上つた。兩側の室が下へ、下へ移動した。——三階。薄暗い光は、二人の歪んだ影を壁に大きく、色々とうつした。

この國の労働者運動が年と共に高まり行く大衆の壓力と、やうやく大衆化してきたプロレタリアのXの力によつて、官許政黨の運動範圍が見る／＼その範圍を越えて行つたとき、支配階級は斧を振る

つた。——その「三・一五事件」で入つた女の同志のことを、野口が玉枝に話した。「社會主義の女なら、X X 人民として犬畜生よりも劣るんだ。犬畜生なら何をしたらつてかまふことがないだらう。」

X X X のスパイが抵抗力のなくなつたそのXの同志のX X を引き破つて、X X してしまつたのだ。——「口惜しいか、口惜しくはないだらう。——口惜しいと思つたら、人間並だ。」——さう嘲笑つた。

「そのことが、中にある同志に分つたのだ。君は男泣きツツてものを知つてゐるか。——皆男泣きに泣いたのだ。その時、Xの同志は、然しローザのやうに清い臍を蹴やかして、叫んだ。

「同志の皆さん、心配して下さるな、我々は必ず勝つたから。——然し、その時までは！」それを法廷で云つたのだ。

「これは、ホラそのレーニンの言葉だ。——然し、その時までは！……分る？ この中にこそ無限の氣持が含まれてゐるではないか。」

興奮はめづらしく野口を吃らせた。だが、それより「同性」の玉枝は、下唇に一つ、一つ齒形を刻み込んでゐた。冷たい石のやうに、女の顔がこぼつた。

「ちや、私だつてクヨクヨすることは止めやう。」  
 女はしばらくして、ハツキリ云つた。  
 自分は××力を賣る労働者だ、彼女はそれから、さう考へた。この意識の発見は、かういふ女が必ず持つ古い惨めさを、玉枝から爪先きの切れた足袋のやうに捨てさせた。  
 玉枝は「復活」位は讀んでゐる。——タキちゃんを「ソーニヤ」なんて名前をつけて呼ぶ寺田さんなら「ネフリユードフ」どころだらう「甘い、甘い」と云つた、「あんな小説をかく人らしくなく、寺田さんは女にはセンチメンタルね。」

で、今「一時間三圓」の賃労働に雇傭された女工のやうに、玉枝は冷たい顔をしたまゝ、自分の室の障子を開けた。

六

「三月黨員歸る！」

障子の骨がゆがんで、ギシ／＼抵抗した。拍子に、カ一杯開くと、島田の噪やいだ顔か飛び込んだ。

「三月黨員？ 何んだ、それ？」

「我が三・一五の黨員さ。——二人無罪で歸つてきたんだ。」

野口は頁に鉛筆をはさんで、本を伏せた。レーニンの「労働組合論」を讀んでゐたのだ。

「さうか、よかつた！」

急務は「四・一六」の打撃の回復だつた。

——「三・一五」以後、日本の無産運動は正しい方向をつかんだ。日本の運動も初めて世界的規模で考へ得られるところまで行つた。——「プロレタリアの黨は一つしか、×××しかあり得ないこと。」「合法的活動は強固な地下的組織の上に結合されてのみ、初めて力あること。」「我々は無産大衆とは工場プロレタリアを指すと嚴格に規定する。工場は城塞だ。街頭の浮き上つた、彈壓に一番弱い、しかも一見華々しい組織を清算すること。」「そして清算した。——然し「あせつた」発見の大きさには荷が勝ち過ぎたのだ。地味な、底に沈んだ地下建築が、それで「素人細工」になつた。で、「四・一六

「はそれを根こそぎにしてしまったのだ。」

二度「X」を流した。

——急務は、だから「四・一六」の打撃の回復なのだ。

「さ、いよいよ、X、X、Xの學校を建てろぞ。基礎工事からだ。三月黨員も歸つたし。」

島田にさう云はれて、向ひの寺田は分らない顔を向けた。

「オイ、く、氣でも、狂つたのか。」

「狂ふもんか、労働組合はX、X、Xの學校だつて、レーニンが云つてる、レーニンが。」

そして、ワハ、ハ、ハ、と笑ひ出した。

「畜生！」

寺田も吹き出した。島田の肩をグイ、グイ、ついて「大げさな云ひ方をすんなよ。」

「忙がしくなる。君も大馬力をかけてくれ、人が一番足りない時だ。」

前から寺田は組合で「ニュース」や「ポスター」を書いてゐた。小説も作る。だが、書の方がうまかつた。

彼等は毎晩遅く歸つた。「組合創立準備會」が持たれたのだ。クタククになつてゐたので、室に入る

といきなり、手足をのばして、仰向けにひっくりかへつた。全国的に、強固な「左翼組合」の再建が叫ばれた。——それはXと大衆の結合點であり、Xの大衆化はそこに具體的な貯水池を見出さなければならなかつたからだ。離れてゐては駄目だ。孤立したX

そんなことは有り得ないからだ。

七

一九二八年の暮「新黨準備會」が、合法政黨としての結黨を放棄して、プロレタリアのXによつて指導される「闘争團」として鏡角的に方向を轉換した。だが、今迄X、X、X運動は眞實に革命的な組織運動を、その明確な方法に於ても、實踐に於ても具體的には知らずに過してゐたのだ。——で、その急角度の「曲角」で、X、X、X運動は遠心力からヨロメいてしまつた。——あはて、ふためて（！）X、X、X分子は地下へ沈んで行つた。ハラ、ハラ、する危い過渡期だつた。——野口は今になつて、「四・